

# あの日、あの時、あの人の短編集

タマモ猫

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界は、様々な事象で溢れている。思わずほのぼのする暖かい話。思わずドキドキする愛の話。思わず泣きたくなる感動の話。

これは、そんな世界に生きた、あの日のあの時、あの人の物語

※月二回更新です。

## 目次

あの彼と、彼女の恋愛小説	1
甘くて辛い	10
俺の彼女はめちやくちや可愛い。	17
あの彼と、彼女の恋愛小説 アフターストーリー	28
幼なじみこそメインヒロインであって。	35
喫茶店のあの人へ。	54
ヤン（キー）デレ？な彼女	64
無表情で素直な妹。	74
ご主人様と私	80
魔王幹部のお姉さんが強すぎて敵うわけがない。	89
完全他人頼みな、何書こうかなのコーナー。	99
おつきなちつちやな恋	103
ご主人様、愛しています。	118
ちよつと昔の話。	130
その甘美なる誘いは、甘くはなく。	140
電話彼女 case1 『帰省中の地味つ子彼女』	161
短編集の短編集。 「マッチ売りの少女」	167
短編集の短編集。 「マッチ売りの少女、に」	170
短編集の短編集。 「マッチ売りの少女、さん」	173
成仏はしないであげましょう	183
幽霊さん幽霊さん	187
機械ですが	193
ある朝、コーヒーを一杯	200

## あの彼と、彼女の恋愛小説

彼女は、はっきり言うと、目立たない人だった。いつも、人の影に隠れ、クラスの中心から外れ、図書館へ赴き、事ある事に本を読み、体育はだいたい見学で、弁当は屋上で食べ、部活に入らず一人で帰る。基本一人で寂しく行動しているのに、何故か、彼女は満足そうに見えるものだ。

その内、僕は彼女を目で追うようになった。

そして、昼食。僕は屋上へ行く事にした。普段は友達と食べるのだが、今日は特別に。この前の帰り道、彼女がコンビニであるパンを買っていると場所を見た。僕には、彼女の顔がいつもより緩んでいると感じた。彼女を見ない人には決して分からないであろう些細な違和感だが、僕にははっきりと分かった。ああ、楽しみにしてるな、つて。

だから、僕も買ってみる事にした。そのパンは中にカスタードクリームとホイップクリーム、そして、表面にはミルクチョコレートを使った、もう甘さのために存在しているパンでそりやもう甘さで口がやられてしまった。ブラックコーヒーと合わせて食べないと、耐えられない甘さだった。

そして、今日。僕はそのパンとブラックの缶コーヒーを持ち屋上へ向かっている。彼女は、今日も屋上で一人、昼食をとっている。

屋上のドアを開けると、透き通るような蒼さと、漂う雲が目に入る。そして、春の陽光に相応しい暖かな光。なるほど、弁当を食べるにはベストコンディションだ。僕は、あたりに目を配らせる。そして、上を見上げると…

綺麗な太もも、真っ白な靴下、そして、濃紺のスカートの中に潜む、水色と白のストライプ。って、はあ!?!?

「うわわっ…!!」

「…?」

ま、まじか… まさか上にいるとは…!! ん、んん。僕が来た事

には気づいていないみたいだな。一先ず安心。

「えーっと…」

「…！君は…クラスの…」

「どうやら、気づいたみたいだ。椅子に座った状態、と言った方がいいのかな？とにかく、ぷらぷらしていた脚を引つ込め、顔だけを覗かせる。」

「うん。こんにちは、青山さん」

「…こんにちは、鈴木君」

僕は、梯子を登り青山さんと同じ場所に来る。そこは眺めが良く、僕が住んでる街を一望できた。大きな高層ビルも小さな一軒家も。何もかもが、小さく見えた。

「…急に、どうしたの？」

「え？あ、いや。たまには、屋上で食べるのも悪くないかなって。高校生っぽいでしょ？」

「…まあ、ありがちだけど…」

「僕は、一人で過ごす青春をした事が無いんだ。何をするにも、傍には友達がいる。それって、素晴らしい事なんだろうけど…」

「…けど？」

「うーん…何て言うのかな…何か、それは違うと思うんだ。上手く、言葉にできないけど…」

「…誰かと一緒にいるのは、良い事だと思う。でも、私の周りには…偽物ばかりだから…」

「…偽物、か。うん、その言葉が一番正しいかもね。本物が、どんなものかは知らないけど」

「…知らないから、偽物に感じるんだと思う」

なるほど、一理あるな。人というのは、情報の無い物を本物だと思わない。逆に言えば、些細な情報でもあれば、瞬く間にそれを本物だと思い込む。未確認生物とか浮遊物体とかがその良い例だろう。この目で見れないものを偽物だと決めつけ、逆に自分で見てしまえばそれを本物だと信じる。人は、知らないのが怖いのだ。それがどんなものなのかが分からないから、だから、知らないものに手を伸ばせない。

「青山さんとこんなに話したのは初めてだな」

「… そうだね… 私も、人とこんなに話したのは初めてかもしれない…」

「… あのさ。また、ここに来ていい？」

「… それは、鈴木君の自由だよ」

そう言っつて、青山さんはクスツと笑う。その、柔らかい笑みが、優しい声音が、僕の心臓を跳ねさせた。

\*\*\*

「おい鈴木？ お前また屋上行くのかよ？」

「ああ、悪いな」

僕は、3日に1日程度、屋上で昼食をとるようになった。友達はまだ詮索してこないから助かった。今日は、どんな話ができるだろうか…

知らず知らずの内に、僕は彼女との会話を楽しみにしているようだ。

「こんにちは、青山さん」

「こんにちは、鈴木君」

僕らが最初に交わすのは、決まってこの挨拶。最初にここで話した時からの恒例になっているようだ。

今日の青山さんは、アツプルティーを片手に本を読んでいた。

「よつと… 青山さん、何読んでるの？」

「え？ これですか？ これはですね…」

青山さんは、その本の事を丁寧に教えてくれた。それは、ある少年が、ある少女のために、何度も何度も過去に戻り、少女を幸せにする、というものだった。

「いくら策を労しようとして、未来を変える事のできない苦労と葛藤の描写が、綺麗に書かれていますね」

「なるほどー。そういう観点で見る事もありなのかー!」

僕は彼女のお陰で、すっかり読書にはまってしまっていた。彼女曰く、本とは作者が作り出す世界。でも、作者の世界に入らず、いかに自分の世界で作者の世界を理解する事ができるか、それが、読書に大切な事らしい。

「…あの、青山さん」

僕は、一回深呼吸をし、息を整える。大丈夫、大丈夫だ。

「はい?」

「…あの、僕今度本を買いにしようと思うんだけど、その、一緒に選んでくれないかな?」

「…え?」

それは、高校生のデートでは、あまりに地味過ぎる本屋デートの申し込みだった。

\*\*\*

私は、今、非常に混乱している。たかが本と一緒に選ぶだけなのに、私の心臓は早鐘のように鼓動を刻み、顔はどんどん熱くなってくる。す、鈴木君が…私を誘ってくれた…?

私は、最初彼とこの場で出会った時、ああ、私の空間が邪魔されると思ってしまった。だから、話を早く終わらせて、早く帰ってもらおうと思った。だけど、そんな事を思っていた自分を、今は殴り飛ばしたい。彼は、私の話を、私の本を嫌な顔一つせず受け入れてくれた。それどころか、笑顔で応対してくれた。

色の無かった私の世界に、一色じゃ足りない。七色の鮮やかな色で染められていった。

だから、私は…彼に惹かれていたのだ。ここで、共に過ごすようになってから。

クラスでうまく話せないのがもどかしい。そして、彼に簡単に話しかける女子を見るたび、私はみつともない嫉妬をする。何故、あなた達がそこにいるの?そこは、その人は、私のものなのに…いつ、

鈴木君が私のものになったのだ。理性では、そう分かっているのに、私の本能は、彼女達を赦そうとはしない。私は、自分がここまで嫉妬深いとは思ひもしなかった。だから、今日、鈴木君が私を誘ってくれたのが、嬉しくて、嬉しくて嬉しくて嬉しくて嬉しくて。心の中では自分が小躍りしていたぐらいだ。

翌日、その時がやってくる。

「…こんにちは、こんにちは、鈴木君…」

「う、うん。こんにちは、青山さん」

青山さんは、どうやら緊張しているようだ。もともと、素材が良く、日本美人な青山さんは、今日も律儀に制服だ。内の学校、制服原則だけど、守らなくなっていたいいのに… 僕思い切り私服だし。結構頑張っちゃったし… なんか恥ずかしいな…

「鈴木君？ 内の学校は、休日も制服が原則ですよ？」

「うう… すみません…」

「…ま、守らなくてもいいらしいですが、分かればよろしい」

青山さんは、満足げな笑顔を見せる。その笑顔を見た時、安心した反面、心臓は思い切り跳ねていた。

「じゃ、じゃあ行くかうか」

「はい、そうですね」

僕らは、駅前の本屋に向かって歩き出した。

\*\*\*

失敗でした… こんな事なら多少似合わなくても私服を着てくるべきでした…。ああ、律儀にこなしていた自分の馬鹿…。でも、鈴木君は凄くかっこいい。着こなしている、という表現が一番だろう。白いTシャツに、水色の半袖パーカーを上羽織り、黒いジーンズで決めている。今日は私に見せるために頑張ったのかな？なんて都合の良い妄想をしながら、私は彼についていく。そうだったらいいなあ…。

「これとか、どうかな?」

「…へえ。結構見る目ありますね」

「え? 本当に?」

私達は、本屋で本を見繕っていた。彼が哲学物からファンタジー小説まで、幅広い分野を読むため選ぶのは時間がかかる。

「うーん…でもこっちも良いなあ…」

「あ。鈴木君鈴木君、これなんてどうですか?」

「おお。良いねそれ、面白そう」

彼は、私が選んだ本全てを手に取り、難しい顔をして悩んでいる。その…全部肯定しなくても…まあ、それも彼の優しさなのだろう。その事に、少し心がほっこりする。

「…よし、決めた! これにするよ」

そして、彼が決めたのは、私が薦めた文学小説。ネット小説からのしあがった新進気鋭の若手作家の本だ。この作者の本は、日常と非日常のいりくんだ作風が話題をよんでいる。私も何回か読んだ事がある。

「よし…じゃあ、選んでくれたお礼に、どこかでお茶でも飲んでく?

僕奢るからさ」

「え!?! いやいや。大した事してませんし…」

「でもなー…いつもお世話になってるし、今日も本選んでくれたし。それに、感謝の気持ちだよ。ほら、行こう?」

「えっ、ちよっ…」

私は、彼に手を引かれるがままになってしまう。そして、手を繋いでいるという事実には、顔を真っ赤にしてしまう。

…ああ、私は幸せだな…。

\*\*\*

分かっていった。彼は、クラスでもかなり人気のあるほうだ。女子からの人気も高い。そこに、日陰者の私が入ったら、どうなるか。そんな事、分かっていたはずなのに。

「ねえ、青山さんと鈴木君ってさ、付き合ってるの？」  
「…」

「黙ってちゃ分からないでしょー？」

「…わ、私と、鈴木君は、そういうんじゃない？」

「なんだ、良かったー。だよねー？ ああ鈴木君が、こんな娘と付き合うわけないよねー？」

「あつは!! だよねー!!」

「…確かに、そうだ。私なんか、鈴木君と釣り合うわけない。その事実にも、私の心を崩れそうになる。私の目尻に涙が溜まる。」

「あたしきー、今度鈴木君に告ろうかなって思ってるんだよねー」

「うっそ、まじで!?!」

「うん。この前一緒にお茶しよーって言ったらすぐにOKしてくれたしきー。ついでにカラオケとか行っちゃおうかなー？」

「…そんな…鈴木君…まさか、OKしたりとか、しないよね…? そして、あの優しさが、あの笑顔が私だけに向いているわけではないと、そう思った瞬間、形容できないどす黒い感情が、私の中に生まれる…こんな、バカみたいな女達に…鈴木君は…渡さな…い…渡すわけには、いかない…」

「あれ? 三人とも何してんの?」

え…? 今の声、鈴木君…? 何で、こんなところに…?

「あーっ鈴木くーん!! 良いところにー!!」

「良いところ?」

「うん。あのねー、今青山さんに色々聞いてたんだけどさー」

… やめて… やめて… 私の前で、彼と話さないで…!!!!

「やっぱり鈴木君と青山さん付き合うとかあり得ないよねー!!」  
「…」

「そういうばさ、スタバ、ちゃんと来てよね? こんな女なんてほっといてや」

「…ごめん。その日、たった今予定が入っちゃってさ。悪いね」

「… え？」

「その日はね…。」

鈴木君は、一度間をおき、そして、言葉を紡ぐ。

「その日は、僕が青山さんに告白する予定だから」

突然、とんでもない事を言い出した。え？ 何？ 私に、告白？

うそ、たった今？ 何を考えているんだこの人は

「は？ 青山さんに、告白？ …… なんて、青山さんなんかには？」

「いや、君と一緒に遊ぶのも、楽しいけどさ… 君は、それを手段に使っているから」

「手段？」

「君が、恋や部活をして、放課後誰かと遊んで『青春』を送る。僕は、君が青春を送るために存在しているわけじゃないんだ」

そして、彼は私の手をとる。

「だから、僕は… 君が良いんだ、青山さん。ずっと傍に寄り添ってくれる、君が。恋も青春も関係なく、真実をくれる、君が」

「… 鈴木、君…」

「じゃあ、明後日。場所はあの本屋でね… 待ってるから」

そう言つて、彼じゃ去つていった。今だに、私の鼓動は尋常じゃないスピードでトクントクンと鳴っている。周りに音が聞こえるんじゃないかというぐらい。

「… 行く」

「え!? あ、ちよつと待つてよ!!」

そして、二人も去つていった。最後に、私だけが、赤い顔でぽーつとしながら、そこに突っ立っていた。

4月27日。彼は、駅前の本屋で、待っている。今日告白されるのが分かかっていても、私はいつも通り

「こんにちは、鈴木君」

「こんにちは、青山さん」

今日も、この挨拶で、私の世界は彩る。

甘くて苦い

今日も今日とて普通だ。朝起きて、顔洗って、ご飯食べて、ぐーたらな妹よりも先に出て、学校へ向かう。コンピューターの反復操作かかってぐらいこの生活は繰り返される。途中で何かのバグが起こった事なんてない。自分の完璧過ぎる処理能力にうんざりする。

今日も今日とて快晴だ。昇る朝日が眩しい。だけど、それさえも鬱陶しい。まるで、君は陰に生きてるんだね、と笑われているかのようだ。そんなのは俺の被害妄想だけれど、そう思わずにはいられないほど、太陽は太陽で、俺は日陰だった。

そんな俺を、神様は可哀想に思ったのか、少しの変化をもたらしにくれた。それもほんの少しの変化だけれど。

俺は今まで帰宅部だったのだが、二年生の夏、夏休みが終わり秋に近づく今日この頃。俺はある部活に入る事になったのだ。まあ、太陽の下でボール追いかけるような部活に入ったら、俺はいよいよ死ななければならなくなりそうだから、文化部なんだけど。

「こんにちはー…」

「あら、こんにちは…えーつと…名前、何だったかしら？」

「そのジョーク飽きました…黒瀬ですよ」

「ふふっ、ごめんなさいね、黒瀬君」

早速失礼な挨拶をしてきたのは、この部活「文化部」部長、「東城華蓮」先輩だ。まじでやっぱい財閥の娘らしい。名前もそれっぽいし、その容姿が、他とは違うという存在感を醸し出している。

冬の夜に溶け込むような、意外な事に肩下までしかない黒髪、見ていると吸い込まれてしまいそうな黒瞳、整い過ぎた端正な顔立ち。まさに美少女。校内でも類を見ない美貌を持つ東城先輩は、何とも摩訶不思議なこの部活、「文化部」の部長なのだ。

「そもそも」文化部」というのは、主に校内で活動する部活の総称だ。なのにこの部活は、その総称を名乗っている。それは何故か。

「…今日は、何をしてらっしゃるのでしょうか…？」

「え？ ああ、今日は吹奏楽部の真似事よ。トランペットを吹いているわ」

なんと、この部活、”文化部”の活動をする「文化部」なのだ。この東城先輩、何をやらせても完璧にこなしてしまう完璧超人なのだ。なので、あらゆる部活から引つ張りだこになつてしまい、あまり影響のない文化部に移り、この部活を立ち上げたというわけだ。部活に入った以上、他の部活から声が掛かる事もない。なんとも羨ましい理由である。

「…上手ですね」

「そう？ 結構簡単な物ね… 飽きたわ」

「はやっ!? もうちよつと頑張れよ…」

「……………」

しまった、思わずため口が… やべえ、超睨んでる…。

「こつ、紅茶淹れますね!!」

「はあ… 今日の日活動も終了ね… 暇だわ…」

そう言つて、机にぐでえく、つと突つ伏す先輩。こんな姿、普通は見られない。こんな姿を晒してくれるって事は、俺に心を許してくれているのかもしれない。

俺は慌てて部屋に置かれているティーポットにお湯を注ぎ、紅茶葉を用意する。これでも、喫茶店の息子だ。紅茶の淹れ方ぐらい心得ている。

「吹奏楽部にも、トランペット以外に色んな楽器がありますよ？」

「… もうやつたわ」

「そ、そうっすか…」

早い… 飽きんのも早い…。

お湯が沸き、ティーカップに注ぐ。漂ってくる良い香りを少し楽しみ、先輩のところへ持つていく。

「どうぞ。今日は、うちのお薦め持つてきたんですよ」

「………… 美味しい… ありがとう、黒瀬君」

「い、いえ…」

うわあ… やべえ、めつちや可愛い笑顔。どうしよ、このまま押し

倒そうかな… 駄目だ。まず先輩に殺されて、その後には財閥に殺される。いや、その前に先輩ファンクラブ会員に殺される。リスク高過ぎだろこの人…。

「… 私で一体何を妄想しているのかしら?」

「ひゃい!? い、いえ!? 別に何も!」

汚物を見るかのような眼で睨まれてた。怖い。

「はあ… 黒瀬君の頭の中では私はどんな姿になっているのかしらね…」

「ご、誤解ですって!!」

「…」

…? 何か、先輩の唇が動いた気がするけど、何も聞こえなかった。多分、気のせいだろ。それよりも…

「すみません先輩。俺、先生に頼み事されて、ちよつと抜けますね」  
「そうなの? それじゃあ仕方ないわね」

そう言つて、先輩は紅茶を啜る。これはOKという事だろう。荷物はそのままでもいいか。

そして俺は、部室を後にした。

「……」

一人残った先輩は、何をしているのだろうか? また、本でも読んでんのかな。

しまった。上着忘れてきちゃったな… まあ、いいか。

「ふうー… ったく、人使いが荒いつつうの…」

先生から頼まれた科学準備室の整理は、一人でこなせる量じゃなかった。標本とか実験器具とかを壊さないように慎重に運んだ時は本当に辛かった。

とにもかくにも、漸く部室へと戻ってきた俺である。

「すみませーん、遅くなりましたー」

「あら、お帰りなさい。黒瀬君」

「いやー、あの先生人使い荒いですよほんと…」

そう言つて、自分の席につく。あれ？

「先輩、俺の上着知りませんか？ 上着つてもブレザーなんですけど」

「…いいえ、見てないわ」

…？ 何だ？ 今の間は？ …でも、困ったなー、ここに無い

とすると、何処に置いてきたか分からん。

「うーん… 何処置いてきちやっただら…」

「…そうね。教室とかじゃないかしら？」

「そうですね。帰り探します」

おかしいな… ここに来て脱いだ気がするんだけど… 気のせいかな？

そして、俺は自分の本を開く。先輩は、自分の本に目を落とす。俺は、この時間が好きだ。言葉は無く、ただページを捲る音だけが室内に響く。この静かで優雅な時間は、俺の普通の日常を彩ってくれる大切な時間だ。

今はこの時間に浸ろう。そう思い、視線を先輩に向けようとしたら、突如、凄まじい悪寒が背筋に走った。恐怖に凍てつくような寒気。今までに感じた事のない感覚。

恐る恐る、先輩に目を向けると、

——先輩は、優しい笑顔で、俺を見ていた。

「うーん… やっぱ無いな…」

部活動時間が終わり、自分の教室に戻ってきたが、やっぱり俺のブ

レザーは無かった。そうすると、部室の何処かに置きっぱなしにしてしまったのだろう。

「じゃあねえ…戻るか」

三階にある生徒活動室。そこが、俺達の活動場所だ。もう辺りは暗く、言葉に出来ない恐怖感が、学校を覆っていた。

「ふう、やあつと着いた…」

「――黒瀬君」

ゾクツ。

先ほどと同じ悪寒が、背筋を再び走った。慌てて後ろを振り替えると、そこには俺のブレザーを持った先輩が立っていた。

「せ、先輩…?」

「ごめんなさい、驚かせてしまったかしら?」

「え? あ、はい…びつくりしました…」

「そう、ごめんなさいね。あと、これ…」

先輩は、俺のブレザーを手渡してきた。

「ああ、ありがとうございます。やっぱり部室にあったんですね」

「…ええ。探してみたら、机の下に落ちてたのよ」

「わざわざ探してくれたんですか、ありがとうございます」

先輩は優しい笑顔で、いい、と言ってくれた。なんやかんやで優しいのだ。東城先輩は。

「それじゃあ帰りましょうか」

「ええ」

そう言っ先輩は自分の腕を、俺の腕に絡めてきた。えつと…ド  
ユコト?

「せせせせ、先輩!？」

「ふふっ。探してあげたのだから、これくらい良いでしょう?。」

「ででで、でも!?! ああ、えっとおおお...!?!」

「慌てふためく顔が見たかったのよ... ふふ、ふふふ...」

どういうこっちゃ?!? ああ、東城先輩が、俺に恋人繋ぎををつをををを?!? あわわわわ、何か!! 何か柔らかいんですけどおおおおお

お?!?! 俺史上最高の幸せが俺の腕を包んでやがるっ!!!

「今日はこのまま帰りましょう」

「えええええ!?!」

俺と腕を組んだ先輩は、何だか、いつも以上に楽しそうだった。

... 今日のアレには、困らそうにないな...。

「... んはあ、んう... はあ...」

室内に響く、卑猥な声と、音。彼の匂いが染み付いたブレザーを、思い切り嗅ぐ。すると、彼女の身体には、まるで麻薬を吸ったかのような快楽で包まれる。彼の腕の感触が、まだ腕と胸に残っている。そこを触ると、身体に電流が走ったかのように身体が痙攣する。

彼に返したのは、もともと持ってきていた、予備のブレザー。そして、彼女の身体にまわりついているのは、彼のブレザーだった。

「んはあ... 黒瀬君... 黒瀬君...!!!」

彼女の身体を支配する、恋い焦がれる男の匂いと感触。彼女を快楽に引きずりこむのに、充分過ぎる素材だった。少し甘噛みすると、口に広がる彼の味。それが、より彼女を快楽に墜とす引き金となった。

「んはあ... 欲しい... 黒瀬君... 黒瀬君...」

—— 彼が、欲しい。

果てた彼女の瞳に広がるのは、スマホの中に納められた、彼の顔

だった。

「…好き…好き…好きよ、黒瀬君…」

液晶に写る彼の唇に口づけすると、彼女は立ち上がり、部屋を後にした。

俺の彼女はめっちゃくちゃ可愛い。

「なあ、楽斗ってどんな奴タイプなんだー？」

「いきなりどうした我が友よ」

ある高校の、ある廊下。ある廊下はおかしいな。二年四組前の廊下。いつもわいわいがやがやと騒がしく、スカートが捲れる事を意に介さない女子が暴れまくってる。完全に見えた。良い下着してんなおい。

「… ああいう恥じらいの無いのは嫌だなあ」

「ああ。あれは見てるだけで良いよな… おほお… !!」

そんな事を呟きながら光悦の表情を浮かべる我が友、藤野 章介、17歳童貞。無職ではない。俺も童貞だけど。

「お前って彼女いた事ないじゃん？ 異様にモテてるけど」

「お前も無いだろ。あと、モテてない」

まずい、章介が泣きそう… お前良い奴なんだからその性格やめれば… いや、エロいから駄目だな。

章介とは小学校からの付き合いでその頃からエロかった。女子のパンツが見えれば1日生きていけるとか言ってたっけ。エロガキめ。

「… あ」

そんな事を思い出していたら、四組の前のドアに、人がいる事に気づく。恥ずかしそうにおろおろして、教室内を伺っているようだ。

「どうしたの、佐々木さん？」

「ひゃい!？」

一応声を掛けてみると、びっくりしたのか慌てて振り返る。

「あ、神野君… 良かった…」

「何か俺に用？」

そこにいたのは、隣のクラス的女子佐々木 友架だった。あ、ともかね。

「えと… お昼休みと放課後、読書週間の張り紙作るから図書室に、来て… ください」

「おっけー。分かった」

俺と佐々木さんは同じ文芸部に所属しており、図書室への融通を効かせるために時々図書委員の仕事を手伝っている。

根暗を感じさせる眼鏡、髪を一本に結んで卸していて、前髪は左側に寄せてピンで止めている。

「ん？ でも、それって図書委員がやるんじゃない？」

「…」

目が何も言うなと言っている。… やれやれ… この娘は…。

「分かった。昼と放課後ね」

「… つ!!」

顔からパアアツっていう効果音が出てきそうなくらい目を輝かせて、頬を紅潮させる彼女。… 感情表現が薄い人って結構顔で分かるよな。

「じゃ、じゃあ… 待ってる、から」

そう言い残し、足早に自分のクラスに戻ってしまう彼女。もうちょい話しても良かったのに。

「… 佐々木って、眼鏡外せば可愛いと思うんだけどなー」

「何で？」

「昨日プールの授業あっただろ？ 覗きには行けなかったんだが、授業終わってすぐプールに向かったんだ。そしたら髪を卸して眼鏡外してる佐々木に会ってさ、結構可愛かったんだよなー。なんつーか… あれが本当の佐々木なんじゃねえかなって」

「… ふーん…」

そつかそつか… 章介も、見る目あんじゃねえか。

窓から吹き抜ける風を感じて、隣の喧しい友の話聞きながら、俺の午前は終わっていく。

「… っていう話を聞いたんだ」

「… そう、なんだ」

図書室の端っこ。設けられたテーブルと椅子に俺達は向かい合っ

て座り、真っ白な紙に色々と案を出しながらそれを書いていた。

「良かったな、”友架”。褒められたぞ」

「…別に。”楽斗君”以外に褒められても嬉しくない」

俺達は、互いの事を名前で呼び合う。そう、実は俺達、付き合っているのだ。時期は一年の秋。友架の方から告白され、承諾した。俺は、その頃まで彼女居ない歴Ⅱ年齢だったから、あんなにも嬉しい事は無かった。

「…私のクラスは、楽斗君の事褒める娘いっぱいいるよ」

「お、まじで？ そりゃ嬉しいな」

「…」

友架は無言で紙を鋏で寸断する。そこには言葉に出来ない圧力が掛かっていた。下向いてるせいで眼鏡が反射し、目が見えない。

「褒められて嬉しくない奴なんて居ないだろ？」

「…」

… はあ、全くこの娘は。

「まあ、世界一嬉しいのは友架から褒められる事だけだな」

「… いたっ」

突然のパワーワードに驚いたのか、使っていた鋏を落としてしまい、道具やら何やらがテーブルから落ちてしまう。

「っ、大丈夫か!? 怪我してないか？」

「え、あ、うん… 落として足にぶつかったただだから…」

「… すまん、鋏使ってたのに驚かせるような事して…」

「だ、大丈夫だよ。気にしないで…」

友架は、恥ずかしがるように椅子を立ち、床に散らばった道具を集める。俺も椅子から立ち、それを手伝う。

そして、ペンを拾おうとした手がぶつかってしまった。

「あつと、ごめん」

「…!!!」

友架は顔を真っ赤にして手を引っ込めた。赤いフレームの眼鏡の、レンズ越しの目がやっと見えた。恥ずかしさで潤い、綺麗な色をしていた。乙女か… 乙女か。

「… お前はやっぱり眼鏡でも可愛いよなあ…」

「… もう、早く終わらせよう…」

「はいはい」

今日は休館のため、誰も居ない図書室。校庭でサッカーやバレーをしている生徒達を声を聞き、窓から流れ込む風を感じながら、俺は目の前の可愛い彼女を眺めていた。

あーあ… もう昼休み終わっちゃう。まだ楽斗君と話していたのに… 楽しい時間はあっという間に過ぎてしまう。もっと昼休みが長くても良いのに、と思う。

昼休みが終わったら、また知らん顔の生活に戻ってしまう。私達が付き合っている事は、周りに秘密なのだ。だから、人前で堂々と楽斗君と話す事は出来ない。私は、自他共に認める根暗だから、明るくて、カッコいい楽斗君とは住んでる世界が違う。楽斗君が楽しそうに友達と話している時、私は一人で本を読んでいる。

そんな、天と地ほどの差がある私が、堂々と楽斗君と付き合っているなんて言ったら、私ばかりか楽斗君にまで迷惑が掛かってしまう。そんなのは嫌だ。だから、秘密なのだ。

「… 何で、私と付き合ってくれたんだろ…」

そんな、誰にも聞かえないように、俯いて呟いたその一言は、やっぱり楽斗君には届いていなくて。ただ楽しそうに私の顔を眺めているだけだ。でも、それだけでも良かった。私と一緒にいて、楽しそうにしてくれるのなら、それで良いのだ。

「… あ、そろそろ終わりだな。片付けるか」

「… うん。また、放課後にね」

昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り響き、私達はテーブルの上に散らばった道具を片付ける。あと4時間も楽斗君とお喋り出来ない。だけど、あと4時間だ。

「うつし。…あれ？ 教室戻らないの？」

「わ、私はここの鍵返してくるから、先行つてて」

「んだよ。そんなぐらいやんのに」

「良いの。ほら、早くしないと… 次音楽でしょ？」

クラスが違うのに、時間割を覚えてしまっている自分が恥ずかしい。

「あ、そうだった。んじゃあ友架、また後で」

「うん」

手を振って、楽斗君は駆け出した。… まあ、良いけど。あれが彼なのだ。一緒にいてあげようとか、もつとゆつくり行こうとか考えてくれない、鈍感で唐変木でデリカシーが無くて。だけど、それでも大好きで、そんなのも許せてしまうくらい、惚れてしまっている。

そんな考えをしていたら、顔が熱くなってくる。それを振り払うように頭を振って、職員室へと向かった。

… やつと終わった。来週にテストあるけど、楽斗君は大丈夫かな。勉強あまり得意じゃないし。また図書室で勉強かな… いかん。それは良いことではないのに、自然と頬が緩んでしまう。駄目だ、こんなところクラスメイトに見られたら、また気持ち悪いとバカにされる。

対等に立ちたいとは思っている。だけど、人間そうは変わらない。変わるための準備も、変わるための環境も、自分では用意出来ないから。

帰りの準備をして教室を出る。教室には部活に入っていない女子が何人か残って話をしていた。

「… あ、神野く…」

「ねーねー、神野くーん今日どっか遊び行こうよー」

「あのなあ…俺一応部活入ってんだけど…」

「だって文芸部でしょー？ やったってやんなくたって一緒じゃーん」

「それに…隣の佐々木さんと二人でしょ？ やめときなつて！」

隣のクラスでは、女子二人と楽斗君が一緒に話をしていた。

… そんな悪口には慣れていている。何度も何度も聞いてきた。

「… 良く言われるよ。根暗だなんだって」

だけど、それを否定してくれない事には、慣れてはなかつた。

私は、声を掛けようと開いた口を閉じる。呼び掛けようとした手を卸す。入ろうとした足を引っ込める。そして、体の向きを変えて、図書室へと歩き出した。

「良く言われるよ。だけどさ…」

その後の、彼の言葉には目もくれないで。

「… 来ないな」

普通は帰りのHRが終わったらクラスに来るんだけど…何かあったのだろうか。

「じゃー良いじゃーん!! 遊び行こうよ!!」

全く鬱陶しい。今はそれどころじゃないんだよ。

「あんな根暗ボツチほつといてさ、さっさと行こうよ!!」

「どうだっていいでしょ佐々木なんて。文芸部も辞めればいいのにー」

込み上げる怒りを抑える。目の前のビツチ共を殴りたくなる衝動を堪える。何のために、友架が俺と付き合っている事を秘密にした

いって言ったのか、俺が一番分かってる。俺に迷惑を掛けないため、俺の面子を潰さないためだ。そう思って、色んな事を我慢しているっていうのに、ここで俺があいつを庇ったら意味がない。

あいつが、いつも辛そうに神野君って呼んでいる事に意味が無くなってしまう。

そう思うと、俺はまた彼女に辛い思いをさせてしまったみたいだ「ごめん、やっぱ駄目だよ。今日は委員会の仕事やんないといけなから」

「えー… そんなに文芸部が大切なの？」

「… 違うよ」

違う。俺が大切なのは文芸部じゃない。

「えっ、じゃあなんで…」

彼女が何かを言いかけたようだが気にしない。俺は鞆を引つ掴み、駆け出す。

またやってしまった。友架が、俺のクラスに来ない訳が無いじゃないか。じゃあなんで、声を掛けなかったのか。決まっている。俺があつた二人と話していたからだ。そして、その話の内容だ。全部、彼女を傷つけるものだったじゃないか。そして、俺はそれを否定したか？ していない。

彼女に迷惑を掛けないという思いは、彼女を傷つけない事と同義にはならないのだ。

俺が本当に大切なのは、友架の筈なのに。あいつの気持ちを考える事が、結果的にあいつを傷つけてしまつては意味が無い。

階段を駆け上がり、図書室へと向かう。そのドアを開けると、そこには…

静かに、窓の外の夕日を眺めている友架がいた。

「… ごめん。遅れた」

「… 良いんだよ、” 神野君」

彼女は、冷たく辛そうな目で俺を見る。

「もう、良いんだよ」

「何が良いんだよ？」

「もう、別れよう神野君。私、辛い。神野君と釣り合わない私が。こういうのは、もうやめよう…。私といたって、神野君に迷惑かけるだけだし…。」

…何言ってるんだよ。

「神野君だって辛いでしょ？ こんな根暗。一緒に居たってつまないだろうし、あの娘達みたいに、可愛くもない。私となんて、付き合うべきじゃなかったんだよ」

そう言いつつ、涙を流す彼女。今、辛いのはどっちなんだ。俺の訳がない。友架だ。

「私がフラれた事で良いからさ、あの娘達のとこ行ってあげて。私といるより、何倍も楽しいだろうから」

俺は、俺の思い上がりで、俺の勝手な解釈で彼女を傷つけていた。迷惑を掛けていたのは、俺だ。友架を傷つけないように、迷惑を掛けないようにしていると思っていたのだ。結局それが、今この状況を作り上げてしまっている。

ならば、やる事は一つだろう。

「…友架、ごめんな。俺のせいで…大きな誤解を生んでしまったらしい」

「…どういう事？」

俺は、頭をがしがしと掻きながら彼女に近づいていく。そして、頭にぼん、と手を置く。

「…俺の彼女は、めっちゃくちゃ可愛い」

「っ…!!!」

「確かに暗いし、インドアだし？ 逆に俺は明るすぎてハゲかってるらいたし、もういつそ外で暮らせやっつてぐらいアウトアだ。だけど

な…」

置いた手で、友架の頭を撫でる。

「俺が本当に大切なのは… お前だよ、友架。俺が大好きなのは、お前なんだ。だから…」

俺より背が低い友架と、視線を合わせるために少し屈む。彼女の目尻には、たつぷりと涙が溜まっていた。

「もう、隠すのはやめよう」

俺は、初めて彼女の唇に、俺の唇を重ねた。心臓の跳ね具合がやばい。こんなチャラチャラしてますけど、俺ファーストキスなんです。こんな感じで良いのかと内心びくびくしてます。

「…ふえ…?」

「もう、秘密にするのはやめようぜ。お前を悪く言うやつなんか気にしないでさ。俺が、お前の事好きなんだって証明してやるから」

友架の眼鏡を外してやり、涙を拭き取る。

「… お前本当に可愛いんだからな? お前の可愛さを全国配信したいぐらいに」

「へ? なななあ、何いってんの!?!」

「まあまあまあ。恥ずかしそうに笑うとか、一気に顔真っ赤にするとか、頭撫でられると嬉しそうにすることとか、美味しい物食べると目が輝くとか、本読んできるとこがすげえ似合うとか… あげ出したら本書けるぐらいある」

本当に可愛いのだ。俺の彼女は。

「だから、俺は迷惑だなんて思わない。俺が、お前が可愛いって知ってるから。寧ろ自慢だよ、友架みたいな可愛い娘と付き合えて」

「… 楽斗、君…」

「だから… ああそうか、こうすれば良いのか」

俺は、改めて彼女に向き合う。

「佐々木 友架さん、正直言ってあなた目当てで文芸部に入りました。俺と付き合ってください」

「… 私目当てだったんだ…」

「ああ」

「…私、根暗だよ？」

「可愛い根暗とかタイプ」

「…インドアだし」

「可愛いインドアとかもつとタイプ」

「…クラスでも、弄られるし、悪口言われるし…」

「もう言わせねえよ」

「…他にも色々あるよ？ じっくりも楽斗君の事考えてるし、嫉妬だって…するし、お弁当作ってきてあげたいとか思うし、じっくりもくっついてたいって思ってる」

「結婚したいくらい可愛い」

「…それでも、良いの？」

「嫌いになる理由が見つかんないな。結婚する理由しかないね」

「…分かったよ。でも…私も、ちよつと変わってみる。せめて…」

「楽斗君と対等になれるくらい」

「気にせんでも良いけどなあ…」

「私は気にするの…これから、もっと可愛くなる、から…よろしく、お願いします…」

「おおーい!! 楽…斗お!」

「おう、どうした章介？」

「…酷いぜ…お前は仲間だと思ってたのにー!!!」

「…なんだ、あいつ？」

「…さあ？」

「…え、神野君の隣の娘誰？」

「転校生？」

「めっちゃ可愛くね？ 神野まじかよ…。」

「… 早速噂になってるな」

「うう… 恥ずかしいよ…。」

「ちよちよ、神野君!？」

「お、昨日の」

「だ、誰その娘!？ 付き合ってるの!？」

「ああ。隣のクラスの佐々木 友架だ」

「えと… 佐々木です…。」

「は、はあ!？ 佐々木!？ だって、佐々木は…。」

今日の友架は、イメージを暗くしていた眼鏡を外し、コンタクトを入れ、縛っていた髪をそのまま卸していた。それだけで、彼女のイメージがこんなにも変わるとは…。

「もう、根暗なんて言わせませんよ」

勝ち誇ったような笑みで、俺の腕に抱きついてくる友架。

「だから… 私の彼氏にもうちよっかいかけないでくださいね?！」

やっぱり、俺の彼女はめっちゃくちゃ可愛いのだ。

## あの彼と、彼女の恋愛小説 アフターストーリー

照り輝く太陽……の下ではなく、冷房が効き涼しくなっている図書館の中、一組の男女が長テーブルの上で、一人は怠そうに突っ伏し、一人は凜として本を読んでいた。

「… ねえ」

「… 何ですか？」

「… 暇じゃないの？」

「… 本読んでますから」

「… 今って何月？」

「… 8月ですね」

「… 夏休みだよね？」

「… 夏休みですね」

「… どっか行こうよ!!」

「鈴木君、図書館ではお静かに」

鈴木は飛び起き、テーブルをばん、と叩く。その大声と大きな音で周りに居た人が怪訝な目で鈴木を見る。慌てて周りの人に謝り恥ずかしさからか、頭を抱えて再び突っ伏した。

「… 可愛いですね鈴木君」

「うるさいなあ… ねえ、葵ちゃん…」

実は、この青山さん。名を青山 葵と言う。鈴木は鈴木 真（まこと）だそうです。

「どっか行こうよー。夏休みなのに図書館に籠りっぱなしとか高校生らしくないよー」

「… 鈴木君、あなたは私を青春の手段に使うつもりですか？」

「なんとという特大ブーメラン」

一月程前、彼らは世にも珍しい予告告白という方法で付き合う事になったのである。青春を送る上で、恋も何も関係なく、自分に寄り添ってくれる彼女に惹かれ、また彼女は自分を肯定し、自分を引っ張ってくれる彼に惹かれ。

そんな事を言ってくれた彼に対して、彼女は絶対的な信頼を寄せて

いるためか、夏休みだと言うのに、いつもと変わらない毎日を彼と過ごしていた。

「… そうじゃなくてさ…」

「じゃあ、何なんですか？」

「… 葵ちゃん、と遊びに行きたい、から…」

恥ずかしげに頬を掻き、頬を染める彼を見て、彼女の心は満足に満たされる。いつも飄々としており、余裕ぶった彼が、焦り恥ずかしそうにするのは、彼女にとって眼福なのであった。

口角が上がって笑顔になってしまうのを、本を口元に持っていき隠し、目を閉じる。

彼女としては、行きたくて堪らない事だったのだ。しかし、いつも図書館に行ったり、本屋に行ったりとインドアな生活をしていた彼女が、突然海に行こうプール行こう等と誘えるわけもなく、誘ってくれるよう誘導していたのであった。

「… ふふ、冗談ですよ。何処へ行きましょうか？」

「え!? 良いの!?!」

「しー…」

またしても周りが怪訝な目で彼を見る。

「… 本当に良いの？」

「ええ。あなたの頼みとあれば」

本当は自分から誘いたかったのだけれど。

「よっしゃー… じゃあ何処行こっかなあ…」

とても嬉しそうな顔で、然り気無く持ってきて、テーブルに置いておいた「夏の定番スポット!! カップルで行くならここ!!」を読み始める彼。彼女の作戦は完璧だった。

「じゃあ… ここ!」 「最恐!! 絶叫お化け屋敷!!」

この時まででは。

「… お化け屋敷、ですか…!?!」

「うん！ 僕こういうの好きだからさー… 行ってみたかったんだよねー」

そう言つて楽しそうにお化け屋敷のページを読み漁る。ちらっと見えたページには顔がぐちゃぐちゃになったゾンビ、血だらけの幽霊、這いずる生霊等々。彼女が見たら一瞬で気絶してしまいそうな物がてんこ盛りだった。

実は青山さん、大の怖い物嫌いなのだ。

「そ、そうなんですか… ほ、他は？」

「んー、まずはここかな！ これ行つとかなないと夏は始まんないよっ…」  
そんな事言われてしまうと断り難くなってしまう。だが。

「鈴木君、はそういうの得意なんですか？」

「結構ね。テレビとか映画とか良く見るし…」

よし、ここで私はあんまり得意じゃないとやんわり断れば… !!

「でも、葵ちゃんは得意だよね！ いつもキリツとしてるし、この前なんていきなり後ろから抱きついたのでに微動だにしなかったし！」

「… え、ええ。当たり前じゃないですか… ???」

そんな事言われたら、断れないのが彼女である。

(いきなり抱きつかれた時はびっくりし過ぎて身体固まっちゃったからなの…)

「うっわあ!! 楽しみだね！」

「… そ、そうですね…」

まずいまずいまずい… このままでは、かつこよくキリツとした葵ちゃんという鈴木君のイメージが、怖い物嫌いの泣き虫葵ちゃんになつてしまう… そんなのになつてしまったら…

『… え？ 葵ちゃん、怖い駄目なの…？ そっか、イメージ崩れたなあ… 別れよ』

なんて鈴木君に思われてしまう!!! それだけは絶対回避しなければならぬ……。

目の前に立ちはだかるのは、古い屋敷をモチーフにした黒い建物。見るからに怖い。

「じゃあ入ろつか!!」

「あ、あの鈴木君」

「ん? どうしたの?」

「えとですね……せっかく遊園地に来たんですし、楽しみは最後にとっておきませんか?」

ナイス私。これは良い回避方法だ。他のアトラクションで時間を潰し、閉園時間まで遊び尽くしてしまおう。

「駄目! 僕、デザートは最初に食べる派だから」

「ええ!? それではデザートは別腹という格言g」

「さあレッツゴー!!」

「ちよちよちよ、鈴木君!」

いつもなら手のひらを掴むだけなのだが、今日は気分が浮いているのか指を絡ませてくる鈴木君。たったそれだけなのに、私の心は幸せで満たされて、目の前に迫ってくる恐怖の入り口の事さえ忘れてしまった。

……いや忘れんなよ私。

「さあどんなのが出てくるかなー?」

「……(ブルブル)」

『グワオオオオオ!!!』

「イヤーーーーー!!!」

『うう……ううう……』

「ひい……!! ひいひいひい!!!」

『(バツ)』

「うひゃあああ!? 鈴木君!? 今頬に冷たい感触が!」

「…」

「ご、ごめん葵ちゃん!! 怖い物嫌いだなんて思わなくて…」

… やつちやったなあ。思えば、あの時何も言わなかったり後回しにしようとしたのは、行きたくなかったからか…。悪い事したな…。

「うう… ううう…」

「あつ、えと、その… は、ハンカチ!!」

まずいまずいまずい泣き出してしまった!! このままじゃ

『女の子にこんな事させる鈴木君なんて最低です。別れましょう』

つてゴミを見るような目で言われてしまう!! でもそのゴミを見るような目は見えてみたい!! じゃない!!

どうしよう… 本当に言われちゃったらどうしよう… 慌ててすがり付くしかないのか…。

どうやら、泣き止んだ葵ちゃんは、気恥ずかしそうにハンカチを太ももの上に置く。

「… あの、葵、ちゃん…?」

「… らわないで」

「え?」

何て言ったのか分からず、聞き返す。

「嫌わないで、ください…!!」

すがり付くような、助けを求めるような目で予想もしないことを言ってきた。

「ええ!? な、何で!」

「だって、怖い物嫌いな私なんて… 鈴木君がお化け屋敷好きだって言ったから、怖いのが嫌いだなんて言えないし… 折角誘ってくれたの

に…私…!!」

「うわああ！ 泣かないで泣かないで!!」

これじゃ、周りからは女を泣かせる最低鬼畜ゲス屑野郎だっと思われてしまう。それもあるけど、葵ちゃんをこのまま泣かせ続けるわけにはいかない。

「…ごめん、葵ちゃん。僕がちゃんと聞けば良かったんだ。ごめんね、辛い思いさせて」

「…お願い、だから… 別れたく、ないです…！」

なんて事を言うんだこの娘は。僕が別れようだなんて言うはずないじゃないか。ていうか怖い物嫌いだからって別れる人いないでしょ… どんだけ心配性なんだ葵ちゃんは… 可愛いなあ。

僕が葵ちゃんと別れるなんて考えられない。だって、結婚したいと思えるほど、僕は彼女に惚れていて、好きになってしまっているから。

「… 言わないよそんな事。可愛いなあ葵ちゃんは」

「… ほんとですか…？」

「当たり前じゃん。寧ろ僕が最低って言われて別れるんじゃないかとひやひやしてたよ」

考えてる事は一緒なんだな。何か、嬉しいな。

「ごめんね、僕はずーっと葵ちゃんと一緒に居たいって思ってるから。だから、嫌いになんてならないよ… 寧ろ、怖がってた葵ちゃん… 可愛かったし」

僕はSっ気があるのかもしれない。

「… 鈴木君は最低です」

… Mかもしれない。

「… なので、私の言う事を聞いてもらいます」

「… なんなりと」

「… か、観覧車に、乗ってみたい、です」

「うわあ…高い…！」

「凄いね、街が大体見えるよ」

「あ、あそこ！ 学校ありますよ！ ちょっと見えにくいですけど」

観覧車の中、葵ちゃんも普段見せないような綺麗な笑顔で周りを見渡していた。珍しく声を大きくして、はしやぐも葵ちゃんは、年相応の女の子みたいで、やっぱり可愛いかった。

「これで許してくれる？」

「…まだです。あと、もうひとつ」

はしやぐのを止め、こちらに向き直る。

「…わ、私と…ここここ、ここで…！！」

「??」

「キス… してください…！！」

空には、照り輝く太陽。夏を感じさせる積乱雲は遥か遠く。木々は生い茂り、蝉は短い生を鳴き声に捧ぐ。街は汗をかけた人々が行き交い、子供達は川や森で大冒険をしているのだろう。

さて、そんな何でもない街の一角、さほど広くもない定番遊園地で、僕らは青春…じゃないな。”僕ら”の1ページを刻む。狭い観覧車の中、僕らは

忘れられない、キスをした。

「…ごめん、歯当たった？」

「…駄目ですね。もう一回」

「ええ!? あ、ちよ…」

幼なじみこそメインヒロインであつて。

「おーい、ヒロ君。あーさでーすよー」  
「…む…」

今日、6月24日。いつもと変わらない朝。夏が近づき、梅雨を感じさせる雨も多くなってきた今日、俺は、誰もが羨むであろう”幼なじみ”に起こされていた。被っている布団を揺り動かし、可愛らしい声を掛けられて。

「全く… 私が起こしに来るからって安心し過ぎだよ」

「ごめんなあ… 迷惑だよなあ」

「め、迷惑じゃないけど… もう。甘えん坊さんだなあ」

この反応見る限りあれである。こいつ俺の事好きである。小説（主にラノベ）で読んだぞ。こういう反応する幼なじみ系ヒロインは高確率で主人公が好きである、と。この場合の主人公は俺である。

だって普通に考えてみる。朝の準備に30分程度かかるとなると、こいつは1時間以上も前に起きて準備しなきゃいけない事になる。この時場合、今7時半だから、6時半だ。それが迷惑じゃないはずが無いじゃないか。

「いくら学校近いからって、油断し過ぎだよ？」

「でもなあ。早めに行つたってやること無いし」

「勉強するとか色々あるじゃん…」

「勉強はお前に教えてもらつてるから、この前の試験だつて61位だ。悪くないだろ？」

「え、本当に!? やつたじゃん!!」

この幼なじみ、運動こそ音痴ではあるが、成績はトップクラス、そして天才系ではなくコツコツタイプのため人に教えるのも上手い。授業を寝てしまう時がある俺にとっては、第二の先生のような存在だ。

よくよく考えると、俺こいつが居ないと何も出来ねえじゃねえか。

「… あ、忘れてた。おはよう、文香」

「うん！ おはよう、ヒロ君」

「今日の味噌汁美味しかったな。黄金比率出た？」

「うん！ 最近良く黄金比率出るからねー。やっと覚えてきたよ」

文香の味噌汁には、料亭か!! と思える程の味が出てくる時がある。俺はそれを黄金比率と呼んでいる。いやほんと美味しいんです。

「今日は体育あるな... 女子はマラソンだっけ？」

「そうなんだよ... 私足遅いから憂鬱...」

「マラソンは最後まで走り切るのが大切なんだよ。最初飛ばして最後へばるより、ずっとペース保ってゴールした方がカッコいいぞ」

ソースは俺。毎回一位になるやつに勝とうと躍起になって走ったら、最後はふらふらになりながらゴールした苦い思い出。走るのが苦手なのなら、無理せず走った方が良い。

「そ、そっか... うん！ 頑張るぞー、おー!!」

「おー。男子はサッカーだっけか。苦手なんだよなサッカー」

ずっとボール触り続ける競技が基本苦手だ。バスケットか何なの？ ボールずつとついてんのもめんどくさいのに、何で相手も気にしながらやんなきゃいけないのさ。その点野球、テニス、バレーは良い。テニスとかめつちや楽しい。

隣で、胸の前に両手を持ってきてぐつと手を握る文香を見ながら、久しぶりに晴れた空の太陽を感じ、夏の到来に胸を躍らせた。サッカーは憂鬱だけど。

「はよーっす」

「おはよー」

クラスに入り、時計を見ると登校時刻15分前。これこそコスパ最強である。

「なんだー高山？ 今日も夫婦登校かー？」

「るせーな。んなもんじゃねえよ」

前の席の佐藤が絡んでくる。幼なじみが羨ましいのか毎日のようにこの会話を朝する。嫌な奴じゃないし、良く遊ぶ中だが、こういう絡みは避けたい。十中八九、俺は文香の迷惑だろうし、俺との噂はあんま立てられたくない。

「ほんと絵に描いたような幼なじみだよなー。成績優秀、眉目秀麗、運動こそ得意じゃないが、それでも頑張ろうとするその姿に男子はメロメロ、と…死ね」

「何でいきなり願望言ってくんだよ」

「それで付き合っていないとかもうなんかさ、死ね」

「最早文句になってんだけど」

「まあぱつとしらない中辺高校生のお前にはもったいない相手だよなー」

「死ね」

「おーしお前ら席に着けー？」

お決まりのセリフで、出席簿を机の上に置く先生。何で席に着いてんのにこのセリフ言うんだろう？ 先生ってよくわかんねえな。

「今日は、お前らに転校生を紹介するぞー」

『うおおおおおおおおお!!』

朝からテンション高いなお前ら。普段通りなの俺と文香、あと大人しい系の人だけだぞ。結構いんじゃないか。

「では、入ってきてくれ」

「はい。失礼しまーす」

快活そうな声で入ってきたのは、長い、茶色が掛かった黒髪をシュシュでポニーテールに縛り、綺麗な白い制服を着て、緑色のミニスカートを履いた、良い具合に日焼けした正に美少女。一瞬にして、男子の視線はその、豊満では無いにしろ、形を強調するバストへ向かつ

た。この変態共め。ああ俺もか。

「えー、\*\*高校から転入してきた篠宮だ。自己紹介を」

「はい。えっと、篠宮 茜です!! あっちの高校では水泳部入ってましたけど、怪我しちゃって引退してました。親の転勤もあってこっちに越してきました。えと、あーとーは…好きな物はラーメン!! 嫌いな物はコーヒーです!! よろしく!!」

『うおおおおおおお!!』

…これは、男子メロメロだな…。まあこんな女子嫌いな男は居ないだろう。誰でも親しみやすいような雰囲気にあの見た目だ、こりや学校で凄い人気になるな…。ラーメン好きはヒロ君的にポイント高い。

「まあ文香の人気下がるからいつか…」

ぼそつと呟き、慌てて自分の愚かさに嘆く。俺は…何て事を…考えてんだ…ふんっ!! と机へと頭を打ち付ける。

「じゃあ席は…高山の隣だな」

「…は? 俺?」

俺の席は窓側の一番後ろ。男子女子の列に別れているがこのクラスは35人で丁度一人余る。それ俺。ハブられたとかじゃないよ? くじ引きだよ? それにこの席人気あるしな。

「えっと…高山、君?」

「…高山 宏和。よろしくな、篠宮さん」

あ、ひろかずです。

「うん! よろしくね!!」

うお、眩しい…。そんな太陽みたいな笑顔初めてみた…。ニコニコと隣の席に座り、バックから教科書やら何やらを取りだし…。てないな。ノートだけだ。

「あー、高山。篠宮の分の教科書は配布されてないから、しばらく見せてやってくれ」

何だそのイベント。男子からの殺気やばいんだけど。おそらくこのクラスで一番ヘイト集めてんの俺。幼なじみに加えて美少女転校生の隣…。女難の相でも出てんのか? 若しくは主人公。

「わわ、ごめんね？ 迷惑掛けて…」

「あー、えと… 大丈夫だから。気にすんなよ、しようがない」

そう。これはしようがない事なのだ。教科書が配布されてないから誰かの教科書を見せてもらう。これは必然で、その相手が俺だったってだけの事。しようがない、これ運命。ディスプレイ。fat e。ライダーさん一筋だぜ俺は。エクステラのライダーend最高だったぞ。

「じゃあHRを始めるぞー…」

どうしたもんかと机に突っ伏そうとしたら、心配そうな、不安そうな顔をした文香と目が合い、どちらも気まずそうに目を逸らした。

『死ね』

「HR終わってからの皆のヘイトが凄い」

恨むならくじ引き作った奴恨めよ…。HRが終わった途端に男子全員が俺の机に群がる。怖いよ、誰か助けてよ。ていうかこのクラスの男子はリア充いねえのかよ寂しいな。

「おま… 幼なじみの相川に加え、転校生の篠宮さんだなんて… 死ね」

『死ね』

「このクラスには佐藤しかいないのか。皆佐藤か」

佐藤です。

「くっそが… そうだ!! 歓迎会と表して篠宮さんとお近づきになろう!!」

「それだ!! 冴えてるな佐藤!!」

「ははっ、あんま褒めんよ佐藤」

佐藤でした。

「… 佐藤は良いよなあ。サッカー男子で」

「あのなあ… 俺としては女子に囲まれるお前の方が羨ましいわ」

「囲まれてはねえよ。挟まれてるだけだよ。何だそれ卑猥。ていうか、篠宮さんの方は隣だからっただけで、挟まれてるわけじゃない。好意持たれてすらいないぞ… それはそれで、何か悲しいなあ。」

「はっはー!! 俺はここでスーパープレイを見せ、篠宮さんにアピールするのだああ!!!」

「今、篠宮さん1000m走だから見てる暇無いぞ」

「なーっ!? あ、外した!!!」

「おーい何してんだ佐藤ー?」

「すまねー佐藤!!」

「お前らそれわざと? コント?」

名前前で呼べよ紛らわしい。

俺は後半組のため暇だ。すまない佐藤、試合中なのに話しかけたりして。」

「…」

女子の長距離走に向き直る… おー… 揺れる揺れる。じゃない。

まあ、運動部でさえやりたくないであろう長距離走を頑張つて走っているってのは、画になるよな。うん。卑猥とかそういうの関係無く。」

「… 篠宮さん速…」

完全にぶつちぎりだ。二位と半分以上も差つけて走ってる。怪我したって言ってたけど、足腰じゃないみたいだな。」

「…?」

「…」

やばい、見すぎて目合っちゃった。目合って百合に見えるね。関係無いね。」

数秒見つめ合うと、照れたようにえへーっと笑いそのまま走り抜けていった… 何だあの可愛い仕草は。何で走ってて可愛い仕草が出

来るんだ。

少し、心臓がドキドキしている自分に腹が立った。

「はっ…はっ…」

そして、文香の方は同じペースでずっと走り続けていて、かなり疲れている様子だが大した物だ。下位グループとはいえその先頭を走り続けていて、周回遅れにされていない。

「…頑張れ」

そう小さくつぶやいて、後半組のサッカーへと戻った。

「…むー…」

篠宮さんが来て数週間。篠宮さんは元からこのクラスにいたかのようにクラスに馴染んでいて、毎日楽しそうに過ごしている。それは良いのだ。

「あ、高山君教科書見せて!!」

「あーうん。ほい」

…教科書を見せる際には机をくっつけなければならぬ。そのため、ヒロ君と篠宮さんは密着した状態になる…。何度も何度も。ていうか何でも教科書配布されてんのに貸してもらってんの…。それに…。

「うーん、良く見えないー」

「うわあちよ…」

何でそうまでしてくっつきたがるの…!? ああもう、気が気でならない…。やっぱり、そうなんだよね…。そうなんだよね…。うう、私もああやってヒロ君とくっ付けたら…。

「えーでは、相川。ここ訳してみろ」

「… え？ あ、はい!!」

慌て授業へと頭を戻し、黒板に書いてある英文を訳す。

『私はあなたと共にいたい』… か。今の私には、心に突き刺さる言葉だな。

「… 珍しいな」

「え？ 何が？」

「ああ、いや。文香が授業中ぼーっとしてるって、珍しいなって思ってた」

あいつは基本すっかりノート取ってるし、先生の話も聞いている。先生の話をノートに書き込んだりもしているらしく、度々その話を一緒に勉強している時に説明してくれたりする。

「… 高山君って、文香ちゃんだけ呼び捨てなんだね」

「あーまあ、幼なじみだしね」

「へー… 幼なじみなんだあ」

篠宮さんは文香を一瞥してから、俺を見る。

「じゃあ、私高山君の事名前で呼んでいい？」

「何でそういう話になるの？」

思わず叫びそうになった。

「いや、他の男子は名前で呼んでるんだけど、高山君は文香ちゃんにヒロ君って呼ばれてるし、付き合ってるのかなって。付き合ってるなら、名前で呼ばない方が良くじゃん？」

「… 付き合ってるよ。ていうか彼女居たことないし」

「じゃあ名前で呼んで良いね」

「お好きにどうぞ」

「じゃあさじやあさ、宏和君、今度遊びに行こーよ」

「… はい？」

篠宮さんが来て、はや1ヶ月。既に7月になり、蝉は短い夏に騒がしきをもたらし、太陽はより強く照り輝いている。そんな晴天下、俺は…

「お、いたいた。宏和くーん!!」

篠宮さんと、待ち合わせをしていた。

「ふう、ごめんね。電車混んでてさ」

「全然良いよ。あんま待つてないし」

「そこは今来たところって言うんだよ」

「男子は女子より早く来るもんなの」

「…へー、良い事言うじゃん」

今日の篠宮さんは、まさに夏の少女といった感じで、丈の長い白のワンピースに麦わら帽子。腰には黒のベルトを巻き、胸をさりげなく強調しながら腰のくびれを出していた。肩にはドーナツの絵柄が描かれたトートバッグを掛けていて、首には月のネックレスをさげている。

「…さあて宏和君。ここで男子なら言うべき事があるんじゃないの？」

「…んまあ制服姿しか見た事無かったから、新鮮だし、似合ってるよ。…可愛いんじゃないですかね」

「…へ？ あ、ありがと…」

俺は何を言ってるんだ…。

「…さ、さあて行こうか!! レッツショッピングだよ!!」

…今日はヒロ君出掛けちゃったし、一人でお買い物。夏服買っておきたいし、それに…水着とか、選ばなくちゃ、ね。毎年ヒロ君の家族と一緒に行ってると…胸、とかお腹周り大きくなっちゃったし…。

でも一人で水着かあ…。でも、ヒロ君には秘密にしておきたかったし。海に行ったらサプライズでじゃやーん、と。似合ってるのか言ってくれるかな？ 何か楽しみだなあ…。会いたくなってきた。ちやった。

「… あれは？」

篠宮さんだ。綺麗なワンピースだなあ…。あんなの私には着れないや。

そんな事を思つて、声を掛けようとした。

「何でこんな買い物に時間掛かるんだ…」

「宏和君、それは女子に対して失礼だよ？」

「… ヒロ、君…？」

何で、何で、何で？ 何でヒロ君が、篠宮さんと一緒に居るの…？ 今日、友達と出掛けるって…。友達つて、篠宮さんの事？ そんな…。何で…。

不安と絶望と…。羨望と嫉妬が入り混じつて、私は声を掛けられないでいた。

その代わり、二人の後を着けていつて。

起こりうるかもしれない、最悪が来ないように、祈りながら。

「ふー、一杯買ったねー」

「… 9割篠宮さんのなんだけどね。これ」

俺は両手に紙袋を持ち、溜め息をつく。いや、荷物持ちはいいんですよ。男子たるもの、女子の荷物は持たないとね。だけどき…。買ひすぎでしょ、これは。服にアクセサリに何かよくわかんない雑貨に…。買う必要あんのか、これとか。

「良いじゃん良いじゃん。代わりに…。このデパートの外にさ、良い

お店あるの。前のおつきな川も見えるし、アイスもあるし。行く？」  
「… はいはい」

まあ、それならいつか。

「おー、美味しい…」

「でしょ？ 宏和君よくコーヒー飲んでるから、絶対好きだと思って  
さ」

俺と篠宮さんは、そのアイスのお店にやってきていた。コーヒー風味のアイスクリームは、カフェオレらしく、ミルクの甘味とコーヒーの仄かな香ばしさがアイスによく合っている。これ開発した人天才じゃなからうか。

「でも、よくコーヒーなんて飲めるよね」

「単に苦いのが嫌いなら、甘いのだって一杯あるよ？」

「え？ そうなの？」

「これとか結構甘いしね」

「へー… あむ」

「… へ？」

一瞬にして、俺が食べていた上の部分が持っていかれていた。その状況が理解出来ず、横を見ると、俺が食べていたアイスのクリームを唇の端につけた篠宮さんが、考え込むように咀嚼していた。

「… あ、ほんとだ。甘い」

「…」

「へー!! 知らなかったなー!! カフェオレも結構甘いんだね… :  
ん? どうしたの?」

馬鹿な… 今のを素でやったというのか… !? なんと言う高等  
テクニク… 俺じゃなかったら落ちてたぜ。

「… ねえ、宏和君」

「… 何？」

「好きな人って、いる？」

「ぶふっ、げほ、げほ…」

しまった。食べられて少なくなってしまうたアイスが、余計無駄に……。

「……どうしたん、いきなり？」

「いや、単純に気になったただだよ。んで？ いるの？」

「……い、ない、けど……」

そう。居ないんだ。俺に好きな人は。俺が、好きって言っている相手じゃないと思うから。それは、多分その人は微塵も思っていないだと思っけど、俺は、そう思う。俺とじゃ、釣り合わないとかそういう事じゃない。

俺は、まだ……

「……私は、いるんだ。多分、初恋」

「へー？ 高校で初恋って珍しいな」

「そうだよね……だから、不安なの」

「不安？」

「初恋は実らないって良く言うじゃん？ だからさ」

「あー、確かにな」

「……ねえ、宏和君」

「私と、付き合って」

彼女は、真剣な表情で、俺にそう告げた。

「はあ…… はあ……」

聞いてしまった。見てしまった。気づいてしまった。決して、聞いてはいけないものを、見てはいけないものを、気づいてはいけないものを。

篠宮さんの表情は、真剣そのものだった。いつもみたいに、ふざけておちやらけた篠宮さんの影は何処にもなく、ただ、好きな人に想いが届いてほしいと願う、女の子の顔だった。

「… そうだよ。お似合いだよ」

そうだそうだ。お似合いだよ。元気一杯で、面白くて明るくて、可愛くて… そんな篠宮さんと、かつこよくて、少しだらしないけど一生懸命で… そんなヒロ君はお似合いだ。

「そっかあ… やっぱりかあ…」

今までの、篠宮さんの行動とか言動とか見てて、気づいてはいた。でも、目を逸らした。そんなわけがないじゃん。ヒロ君は私の物なんだから… って。ヒロ君は、私だけが好きになれば良いって思ってた。

「良かったね、ヒロ君…」

多分、ヒロ君はオーケーするだろうなあ… 凄くでれでれしてたし、今日なんか、珍しくお洒落してきたし… かつこよかったなあ… 白いTシャツに、水色のシャツを羽織って、私と一緒に買った、魔除けの腕輪をして、ジーンズを履いて、お気に入りのスニーカーで…

「… ヒロ君の… バカ…」

私の、馬鹿。

「…」

… いきなり、か。まあ、誘ってきた時点で何かあるかなとは思ってたけど… まさか、とはね。

「… 私さ、前の学校も、中学も小学も、彼氏居ないの。嫌な言い方になるけど、たくさん告白されてね。中には、一度も話した事のない人からだって告白された。でも、毎回思ってたの… 私的事、ちゃんと見てる？ って。少し優しくしたら、少し遊んだら、すぐ告白してきてさ… 嫌だった。好きになるって、もつと、一杯、その人の事見てさ、色々話して、遊んでさ、そして好きになる… って思ってたの」

一度、大きく息を吐いて、吸う。

「… でも、どうにもならないものなんだね。恋心ってさ。少しドキドキしたら… 止まらなくなっちゃってさ… もつと、もつと、一杯お互いの事知ってからって思ってたんだけど… 我慢出来なかった。好きになっちゃったら、もう… どうしようもなくて… だから、今告白したの。これから、いろんな事知っていききたいの、宏和君の事。恋人として… 知りたいの」

「…」

「… いきなりで、ごめんね」

ああ。ほんとだよ。

「… それでさ、返事、聞かせてほしいな…」

多分、俺は幸せものだ。こんな可愛くて、しっかりと考えてくれる女の子に、告白されたのだから。でも、それでも。俺は… 自分の思いを、届けてないから。

「… こんな俺の事を、なんて言うのは失礼だよな。俺の事、好きになってくれたのは… もう天に昇るくらい嬉しいよ。クラスの男子に言ったら、地獄に突き落とされるだろうけど」

「えへへ、そうかなあ」

「… ありがとう、篠宮さん… だけど、俺は」

俺には、届けなくちゃいけない想いがある。

「… 俺には、到底釣り合ってなくて、迷惑ばかり掛けて… 大好きな奴が、いるんだ。やっぱ。この気持ちだけは… 偽れないんだ。だから… ごめん」

「…はー… やっぱりかー」

篠宮さんは、少し笑う。

「…ほんとはね、焦って告白したのもあるんだ。だって…絶対文香ちゃんには勝てないからさ。はー… フラれるのって、キツイね…」

そして、涙を浮かべた。

「初めて、好きになった人には、絶対告白しようって思ってたんだ… 言っとくけど、すっごい勿体ない事したんだからね？ 宏和君は」

「わかつてる。刺されても文句言えないよ」

「…じゃあさ、お願い、聞いてくれる？」

「何？」

「…名前で、呼んでほしいな」

「…茜。これでいいか？」

「うん。ありがとう… それじゃ、行ってあげて」

「え？ 何処に？」

「文香ちゃんのところじゃ決まってるじゃん。多分、今日跡つけてたよ？ さっきここから出ていくの見た」

「は!? まじで!?」

「まじまじ。多分私の告白も聞かれてたかなー… だから、行ってあげて」

「…分かった」

「あとひとーっ」

「何だよ!? まだ何かあんの!?」

「…私、諦めたわけじゃないからね。初めて好きになった人を、簡単に諦められる程、私は強い人間じゃないから。隙あれば… 奪い取るからね」

「…そんな台詞、現実で聞けるなんてな」

「はっはー!! ありがたく思いなさい!! … だから、たくさん油断してね？」

「…望むところだ」

会計を済ませ、店を早々に出る。… あいつが行きそうな所は、もう決まってる。

大好きな奴なんだ。分からないはずがない。

「… あーあ。行っちゃった」

でも、まだバイバイじゃない。終わってない。私の初恋は、フラれてから始まるんだ。

名前で呼んでもらっちゃったら、諦めるなんて出来ない。

「… 好きだよ、宏和君」

だから、ずっとかつこいい宏和君でいて。

「… いた」

やっぱりここだった。昔、よく遊んだ山の神社公園。ここからは、街が一望出来て夕焼けは凄く綺麗に見える。

そこにベンチに、文香は座っていた。

「… ヒロ君」

「おう。文香」

「… おめでとう。良かったね… 初めての彼女が出来て」

何いってんだ。俺はお前以外好きになったことない。

「… 勘違いしてるみたいだな」

「… え？」

「… 今まで、ずっと我慢してた。お前に迷惑ばかり掛けて、お前ばっかりに頼って。それじゃ駄目だと思ってた。それじゃあ、お前と釣り合わないって。だけど… それが幸せだったから。釣り合わなくて、幸せだったんだ」

俺は、お前に迷惑掛けて、頼っている事を幸せに感じてしまった。

「でも、そんなのは駄目なんだよな… それじゃあ、俺は駄目なんだ。だから… もう止める。迷惑掛けるのも、頼るのも。俺は… お前と支えあつていきたいんだ。対等でいたいんだ」

文香の手を取り、両手で握る。

「… 今まで、ごめんな。ずっと好きだったんだ… 幼稚園から、今まで。ずっと、ずっと… 文香の事好きだった。でも、伝えられなかった。俺じゃあ、相応しくないって思ってた。だけど… どうにもならないな。我慢出来ないんだ。この思いが… 好きだつて気持ちだが、抑えられない」

「ヒロ、君…」

「これから、俺頑張るから。頑張つて、文香を支えるから。だから… 俺と付き合つてください」

「… 遅いよ。遅すぎるよ… 私だつて、ずっと、ずっと好きだったのに… でも、私も告白出来なかったから、お互い様か… あのね、ヒロ君」

「なんだ？」

「… 私、迷惑だなんて思つてないよ？ 寧ろ… もつと迷惑掛けてほしい。もつと頼つてほしいの。もつともつと、私を必要としてほしいの… それが、私の幸せだから。大好きな人に、迷惑掛けられて、頼られる事が、幸せなの」

「… お前さ。それ言っちゃったらさ、俺の長年の葛藤はどうすればいいの？」

「えつと… 良いんじゃない？ 私が、そう思つてないなら」

「… はあ…」

「えへへ… ごめんね、ヒロ君」

大好きな人に迷惑掛けて、頼つてばかりで。それは、決して良くない事なのだろう。

だけど、それを俺は幸せに感じる。それが、幸せなんだと思う。

迷惑掛けて、頼って…その何がいけない事なんだ？ 大好きな人が、それが幸せだと言っているのだから。きっとそれは幸せな事なのだろう。

迷惑を掛けるのも頼るのも、その人を必要としているからだ。だから、人は誰かに迷惑を掛けられて、頼られる事は、きっと凄い事なんだ。素晴らしい事なんだ。

だから、大好きな人に迷惑を掛けられて、頼られる事は、きっと幸せな事なんだろう。

俺はずっとこの幸せに浸っていたい。その幸せをずっと掴んでいたい。両手一杯の幸せを、一滴も溢さずに持つておきたい。そうしないと、一滴でもこぼしてしまったら、その幸せが崩れてしまいそうだから。

その幸せに包まれて、俺は生きていきたい。だから、俺も大好きな人を幸せに浸らせてあげよう。両手一杯の幸せをあげよう。幸せで包んであげよう。そうしたら、きっと、そこ幸せは崩れる事はない。一緒に幸せで包まれて、生きていこう。俺達の幸せは、そうなのだから。

「おはよう、ヒロ君」

「おあよう…文香あ…」

「今日もお寝坊さんだね…朝ごはん、出来てるからね」

「おう…いつもありがとな」

「…ううん。好きだから」

「…そっか」

「うん。そうなの。さ、早く早く」

「おおあ、ちよつと待て。鞆とか準備しないと…」

「おっはよう宏和君!!」

「はあ!? 何で茜がいんの!?」「ええ!? 何で篠宮さんがいるの!?」

「あー、言ってなかったね。私、引っ越してきてアパート住んでたんだけど… やつと家の工事が終わってね。お向かいさんになっちゃった♪」

「は——!?」

だからこれも、幸せの一風景である。

喫茶店のあの人へ。

コリコリと、コーヒー豆を挽く音が店内に響く。店内に充満する香ばしい香りは、彼女が注ぐコーヒーからだ。甘く、それでいて鼻を引く苦味。すっぱいというか、苦くないこの香りはマンデリンと呼ばれる豆だ。…多分。

「…薫さん、これマンデリンですか？」

「お、速水君正解。マンデリンだよ」

おっとりした、のんびりほんわかかな声を上げて、にっこり笑う薫さん。彼女はこの喫茶店「ヨースロー」のマスター、佐藤 薫さんだ。砂糖香るとは良い名前だ。

「良い香りですねー…」

「よーし、正解できた速水君にご褒美を上げよう」

そう言っつて、薫さんはカウンターから可愛いラッピングがされたクッキーを出してくれた。チョコや苺等でコーティングされたハートや星型のクッキーがとてもコーヒーに合いそうだ。

「どうぞー。代金は取らないからねー」

「え、どうも… あ、美味しい」

「ほんと？ 良かったー、初めて作ったから上手く作れてるか心配だったんだよー」

…なん…だと？ 手づ、くり…？ 薫さんの手で捏ねて、焼いた…手作りクッキー…？

「め、めちやくちや美味しいです!! お店で出せるくらい!! いやもう出して良い!!」

「あらあらー、嬉しいなー」

…でもそれだと、このクッキーが他の人にも食べられる事に…でも、それでも美味しいから仕方ない。もう一つ摘まみ、その美味しさを噛み締める。サクサクとした食感の中に、パサつきが無い絶妙な水分量の加減。余程繊細な手つきじゃないと作れない。

「…でも、お店には出しません」

「え？ 何で、ですか？」

「それはねー…速水君にご褒美が上げられないからだよ」

少し頬を染めながら、パーマがかかった毛先を弄る。その仕草が、何とも可愛いらしくて…美しくて。俺は言葉を失ってしまった。

「…そ、その、何か言つてよー…」

「…へっ!? そ、その…嬉しい、です」

うああああ…可愛いなあもう!!! 好き!! 好き!! 大好き!!

「あ、あの!! マンデリン、貰えますか…?」

あつぶねえ…勢いで告白するところだった…。

「え? うん! はい、どーぞー…」

白い陶器のカップを出して、そこに黒茶色の液体を注ぐ。それだけで香ばしい香りが店内に広がる。俺はこの瞬間が好きだ。目の前で薫さんがコーヒーを注いで、その香りが広がって、その目の前に俺がいる。その瞬間が、大好きだ。

「…ふう。美味しいです」

「良かったー…もう、ほとんど速水君しか来ないからね」

「…」

そう、この商店街には新しく某有名チェーン店が出来た。高校や大学の帰りで賑わっていたこの店は、今は静寂に包まれてしまっている。ほとんどの客はそちらへ流れてしまい、来るのはご年配の方や主婦ぐらいで、その人達もほとんど来ない。

「どうしようねー…」

「…そうですねー」

言えないよ。二人きりが良い、だなんて。

その言葉を、心の奥底に沈めるかのように、俺はコーヒーを煽った。

「なー凜人ー。頼むよー…」

「嫌だ。駄目だ。行かないぞ俺は」

次の日の昼過ぎ。弁当を食べ終わり、机に突っ伏してぼーっとカフェオレのストローをくわえていると、後ろの席の藤本がまたもやあの話をしてくる。

「良いじゃんかよー、せつかく出来たスタマだぜ？ それに…ほれほれ」

藤本は、教室の端っこで談笑している女子グループをちよいちよいと指差す。そこには、クラスでも人気のある女子グループが、キヤーキヤーと騒いでいた。正直言つてうるさい。あのように騒いだりはしやいだりするのとは全く問題ない。逆に目の保養になったりもする。だがしかし。俺の好みではない。俺の好みは、薫さんみたいな…

「あいつらも一緒に行くんだぜ!? このチャンス逃すとか馬鹿だろお前」

「…一人で行けば良いのに」

「お前俺を死地に追いやる気か」

「何でその死地に俺を連れ込もうとするんだ…」

何処まで行ってもヘタレでチキンな友人に、ため息をつきながら、カフェオレのパックをゴミ箱へ放り込んだ。お、ホールインワン。

「…ってな事がありましたね…」

「…そうなんだ。良いねえ青春で」

その日の放課後、コーヒー香るこの店の、俺の特等席。丁度マスターである薫さんの前に座れるこの席は、今では俺の専用席になっている。…何より、薫さんがこの席に座るのは俺だと決めているように、前にこの店の外から中を見ていたら、薫さんがさりげなくこの席に座らせないよう他の客を誘導していて、そりやもう嬉しさを踊りたかつたくらいだ。

そんな薫さんが、今絶賛不機嫌中なのである。

「えと、薫、さん？ 何で…ブラックなんでしょう？ 俺、カフェオレ頼んだはずなんですけど…」

「…あれれー、おかしいですね… 私ちゃんとカフェオレを淹れたと思つてたのになー」

マグカップを拭きながら、目を瞑りながら棒読みで応対してくる薫

さん。ふええ… 何今の薫さん… 尋常じゃないぐらい怖いんだけど。黒いオーラが可視化されそうなくらい。

「… うっ、しかもこれ、苦い…」

「あら、速水君の好きなマンデリンだよ？ … 苦いところしか淹れてないけど」

「もはや完全な嫌がらせ!? 声に出してるし!!」

うう… 何でこんなことに…。何か怒らせるような事したか、俺…？

「… あ、もしかして」

「…」

「俺がスタマに行こうとしてるから怒ってます？」

お店の客を減らした原因である商売敵だ。そんなところに常連である俺が行こうとしているんなら、怒るのも当然か。これは悪い事をしたなあ。

「… 君って、コーヒーの味しか分からないんだねえ…」

遂に君呼ばわりされてしまった。やっべえ。

「全く… もう…。君なんて知らないんだからね」

「へ？ え!?!」

「… 私、ね… いいや。やっぱりやめた」

「ええ!?! な、何ですか?! 気になるじゃないですかあ!!」

「ふうんだ。薫さん今激おこぶんぶんなんだからね」

「それ結構古いですけど…」

「… 薫さん今キレたんだからね」

「ええええー!?!?」

「… 全く。速水君のバカ」

お店も閉じ、店内の掃除中。頭の中は速水君でいっぱいだ。彼の喜んだ顔、怒った顔、困った顔、悲しそうな顔… 私のコーヒーを飲んで、美味しそうにしてる顔。その全てが、私の頭の中を埋めつくして

る。

「… 何でここまでして、気づいてくれないかなあ…」

もう20歳を越えて、22歳まで来てしまった私が、高校生の彼に告白するだなんて… 恥ずかし過ぎる。その前に、彼の前ではお姉さんキャラで通しているのだ。そんな私が告白なんてしてしまったら、カッコ悪過ぎ。

本当は、好きって言いたいの。子供っぽい私のプライドは、それを許そうとはしない。本当は、大好きで、可愛くて、抱きつきだくて、キス、したくて… 手を繋ぎたくて、頭を撫でたくて… 恋人になって欲しくて堪らないっていうのに。そんな事を考えていたら、顔が真っ赤になってしまう。

「… 早く、掃除終わらせなくちゃ…」

明日も、来てくれるかな… でも、明日は、その女の子達と… 一緒に行くのかな… やっぱ、速水君も恋とか、したりしてるのかな…。

何も始まっていなくて、何もしていないはずなのに。私の物が取られてしまうなんて思うのは、何でなのかな。

教えてよ、凜人君…。

届いて欲しいと願うその言葉は、届くはずがなくて、私しかない店内に、寂しく響いた。

何で、薫さんあんなに怒ったんだろう…。いつも温和で、優しい薫さんが、珍しく…。まあでも怒ってるところもかわいかったから眼福っちゃ眼福なんだけど。

「… 凜人？ どうした？」

「… 怒らせちゃった人がいてさ」

窓辺に寄りかかって、ブラックを飲んでいると藤本が話しかけてく

る。

「怒らせた人？」

「うん。今日、お前らと一緒にスタマ行ってくつて話したら、急にな…」

「…どんな人なんだ？」

「喫茶店のマスターさん。女の人なんだけどな。やっぱ、スタマに行ってくつて話したのが間違いだったかな…」

「…お前馬鹿か」

「…は？」

「はあ… お前なんか連れてつたら、何か白けそうだな… 皆には話しておくから、お前、その人のところ行ってやれ」

「いいの？」

「ああ。んで、ちゃんと謝ってこい。そんで… そつからは自分で考えろ」

「考える？」

「おう。一つだけ言っとくぞ… 気づけない男は最低だつて事だ」

気づけない男は最低… か。じゃあ、俺は何か見落としてて、それに薫さんは怒ってるってこと、か。それに気づいてない俺に、怒ってるってこと…。

んだよ… そんなわけないじゃんか… そんなわけないって思ってるから、その可能性を排除したんだ。でも、もしかしたら、それに怒ってるのなら…。

俺は、気持ち伝えなきゃいけない。

「…薫、さん？」

珈琲喫茶ヨーソローの前。外からは店内が見える。薫さんは、一人の男の人と、話していた。

…ぎつつけんな…!!! そこは…俺の場所だろうが…!!!!  
「薫さん!!」

「っ、速水君!？」

ドアを乱暴に開けたのにびっくりしたのか、驚いたように俺を見る。つられて、男性も俺を見る。端正な顔立ちで、髪は染めている。ネックレスやら何やら色々と身につけていて…見てるだけで腹が立ってくる。

「え、えと…速水君…その…」

「…なるほどね。この子か」

慌てている薫さんを尻目に、男性は俺に近づいてくる。

「…俺の方がいけてると思うんだけどな…やっぱ付き合いの長さには勝てんか」

「…何の、話ですか」

「いや、ただ…ちゃんと、大事にしてやれよ。んじや、ごちそう様」

そう言うと、その男性は店を出ていった。

「えと、速水君!! これは、違うの!! その…」

…あーもう。馬鹿。俺の馬鹿。一足遅いじゃねえか。何してんだ。あの人に一步出遅れた。いくらでもチャンスはあったのに。でも  
もう、迷わない。多分、だけど。あの人は…俺を認めてくれたんだ。

「好きです、薫さん。俺と付き合ってください」

「…ええ!？」

「絶対俺、幸せにします。大好きです。お願いします」

「え、ちよ、そんないきなり…」

「…昨日、怒らせてしまつて、ごめんなさい…でも、そんなわけないって、決めつけてたんです。まさかあの薫さんが…俺が女の子と一緒にスタマに行く事に怒ってたんだなんて!」

「ギクウ!？」

ギクウって自分で言う人初めて見た。

「いやそりやもうそれが真実だったら可愛い過ぎて1日中悶えていますけど、あの薫さんに限ってそんな筈ないって思ってたんです。あのお姉さんキャラである薫さんに限って!!」

「ギクギクウ!?!」

「...でも、そうだったら良いなって思ってたんです。俺に、他の娘といてほしくないって、嫉妬してほしかったんです...そういうの、可愛いって思うんです」

「...何で今になつて、そんな事言うの...?」

薫さんは、困ったような、嬉しそうな、ぎこちない笑みを浮かべる。  
「...そう、だよ。昨日、速水君が女の子と遊ぶって聞いて、私、みっともなく嫉妬したの。私の物を取られるって思った。でも、そんな事言えなくて...だから、怒っちゃったの。気づいてほしくて。でも速水君、気づいてくれないんだもん」

薫さんは、怒ったような顔をして、俺を抱き締める。薫さんは、俺より少し背が高いから、俺は薫さんの豊満な胸に埋もれてしまう。つては!?

「ちよ、薫さん!?!」

「やだやだ!! 絶対離さない!! ずっとこうしたいって思ってたんだから... やつと、叶ったんだからあ...!!」

声が少し震えて、俺の髪に顔を埋めてくる。肩が震えていて、とても脆そうで、すぐ崩れてしまいそうで... だから、抱きしめ返した。

「... そういえば、さっきの人は?」

「うう... 何か、前から好きだったって告白されてね... でも、私には好きな人がいるって、断ったの」

「... それって...」

「... 速水君、だよ。好き。大好き。好き好き... 愛してるの... やつと、言えた」

「えと... 俺も、です」

「... 私、めんどくさいからね。また嫉妬するだろうし... ずっと傍にいたい。いつも君の事考えてるし... その... そういう妄想し

て… お布団で悶えてるの」

何だこの可愛い生き物。

「… 可愛いですよ、薫さん… 俺も、好きです」

「… もう絶対、離さないから。離れない。やっと、抱きしめられたんだから… 誰にも渡さないから。もう、私しか、見えなくするから…」

「… 俺、ここに初めて来た時から、薫さんしか見てないんですけど」

「… じゃあ何でもっと早く告白してくれないの」

「えっと… 恥ずかしくて…」

「… バカ。ん…」

「はい!? 薫さん!？」

「マーキングだよ!! 私の物だっていう、マーキング!!」

「マーキングって… 犬じゃないんだから…」

「うー、うるさいうるさい!! 速水君もマーキングしてよ!!」

「えええー?!?!」

「それに、ずっと私の傍にいてもらうために… ね？」

ある街の。ある商店街に佇む、小さな喫茶店。そこでは、とても素敵な香りが店内を包んでいます。

そんな喫茶店に、少しぎこちなくて、まだ未熟だけれど、とても良い香りが、一つ増えたそうです。

その二つの香りは、仲良く、寄り添うように。今日も店内を漂っているんだそうです。

「あ、いらっしやいませー」

「やあ、見事に玉砕した男が来ましたよ… ん? 何か… 違う香りがするね」

「うふ… 分かります?」

「んー… 新人でも… ああ、そういうことか」

「はい♪ お弟子さんのコーヒーですよ」

「へえ、弟子、か」

「えへへ… とつても、可愛い可愛い、お弟子さんです」

今日も、珈琲喫茶ヨーソローには、二つの香りが漂っています。

ヤン（キー）デレ？な彼女

金髪か黒髪か、って言われたらどう答えればいいんだろう。

僕は、どちらかと言ったら清楚な人が好きだし、結構暗めな奴だからあまりチャラチャラされたり、激しすぎるのは好ましくない。ということは、僕にとっては、黒髪の方が合っているのだろう。

だけど、金髪を捨てるわけにもいかないのだ。見た目普通、頭脳は、まあ上の方を取っているけど、運動は得意じゃない。クラスじゃ皆に混じって騒げない引っ込み思案な僕だけけれど。

何でかって？ そりゃあ、これですよ……。

「なあ、晴k…晴。あの女誰だよ？」

金髪ヤンキー幼なじみに迫られてるからで……。ああちよ、怖いよ詩乃ちゃん…!!

「ねーねー晴輝くん、奢ってよー」

「…そんな事、言われてもですね…」

ああもう、何でこんなに怖いのかJK… やっぱアニメなんて信じない。

二年生になり、クラス替えをした空気も徐々に活気に溢れる6月。クラスでは、グループ等が形成され、他グループ間との間も良好に進んでおり、クラス内での気まずさは無くなっていった

そんな、楽しい学校生活を送っている皆を羨ましい目で眺めながら、僕はクラスで結構目立つグループの女子に迫られていた。もちろん脅迫です。

「良いじゃーん。一本だけ！ ね？」

「…」

前もそれ言われたなあ…。目が早く奢れよおらって言ってるよ……。

「…なる？ 奢れって…早く」

遂に脅迫口調になった。誰か助けてください。

クラスでグループ間の仲が良いとは言っても、やはり目立つ奴らはクラスの上位層にいるわけで。僕がこうして脅迫されていても皆は見てもぬふりをする。

…まあ、僕は何処のグループにも入れなかったけど、それぞれのグループに中途半端に入っている、半分ぼっちなんです。が、今回地の文多いね。

「なあ？ うちら喉渴いてんの。分かってる？」

「…はあ」

仕方がない、今回は仕方ないんだ。次、ちゃんと断れば良いじゃないか…今回、だけは…。

そうして、財布を取りだそうとポケットに手を入れた瞬間

「おい、晴k…西宮 晴輝つてのに用があんだけどさあ、いる？」

教室のドアに、かったるそうに寄りかかっている、髪金髪、制服は何処もだらしなく着崩れていて、その鋭い目は僕に迫っている女子に向けられていた。

学校一の、不良少女であった。

「…しし、しーちゃん！ どうしたのお？ 西宮君だっけー？」

僕に迫っていた彼女は、コロツと態度を変え、可愛らしく駆け寄っていく。おおう…凄いな女子つて。ここまで変えられるものなのか…。

まあ、とりあえず助かった…

「そう。そいつ…ああ、いた。ちよつと来な」

「し、しーちゃんが西宮君に用事つてなーに？ あたしちよつと気になるなー？」

「ああ？ 関係ねーよ。どいて」

…今日は災難ばかりだなあ。

クラスの皆の、同情の視線に晒されながら、僕は彼女に着いていっ

た。… 何なのさ、詩乃ちゃん。…。

「…」

「…」

場所は、体育館倉庫。体育の時間にしか使われないため、ほとんど人の来ないスポットであり、彼女達のような人達のたまり場となっている。

「… ”ねえ”」

「… は、はい？」

彼女の顔を見ると、顔を真っ赤にして、涙目になりながら唇をきつく結んでいる、可愛らしい顔が見えた。

「… あ、あいつ… と、何かあったの？ 何言われたの？ 晴k… 晴輝!!」

「え、えーつと… 何も無いよ？」

「な、何も無いわけじゃないじゃん！ めっちゃ怖そうにしてた!! ねえ？ 何かあったんなら言つてよ！ うt… 私なら何とかしてあげられるかもしれないし!!」

「いや、だから…」

「晴k、晴輝が私なんか頼りたくないんならしょうがないけど… だだだ、大丈夫だよ？ 確かに髪染めたり、制服こんなだけど、怖くないよ？ 昔のうt、私のまんまだから！ ね？」

「… 大丈夫だつて、”詩乃ちゃん”…」

ああもう… 良い人だなあ、詩乃ちゃん。

彼女、東山 詩乃は… 僕の小学生からの付き合いだ。昔っから強がり、新しいものに目がなく、小学、中学と目立つ存在だった。それに比べ僕は、そんな詩乃ちゃんに着いていけず、こんな暗めになつてしまった。いや、詩乃ちゃんのせいじゃないけどね？

「ほ、本当に!? じゃ、じゃあ何であいつとあんなくつついてたの？」

何も無かつたんなら、あんなにくつつかないよね？ やっぱり何か

あつたんだ…。」

「し、詩乃ちゃん…?」

「… ねえ、ねえ、”晴君”… あの女… 何なの? 隠さないで言つてよ… ”うち”なら何でもしてあげるからさ…? 苛められたんなら潰すから… 脅されてても潰してあげるから… ね?」

「怖いよ詩乃ちゃん!」

こんな感じで、詩乃ちゃんは昔から僕に対して過保護な部分がある。少し小さな怪我をしても大事のように心配してくれるし、今みたいに、何か心配な事があると、何でも自分で解決してくれようとする。そんな優しさに、今まで何度救われてきた事か。

「だ、大丈夫だから… 本当に。心配してくれてありがとね?」

だから、何でもかんでも詩乃ちゃんに頼っちゃいけないよね。

「ほ、本当に大丈夫なの? 何でも言つてよ… うちが全部助けてあげるから…。」

「あはは、詩乃ちゃん。うちに戻つてるよ?」

「へ? わあ!?! ごめん晴君… 私、だね。うん」

僕の前では私を使うと決めているようだ。何でも公私を使い分けてるそう。

「さ、さあつて。詩乃ちゃん、ジュースでも飲む?」

「え!?! そんな!?! いいよいいよ! てか、私を買つてあげる! バイト代入ってきたから一杯買つてあげる! 何飲む?」

何だこの子嫁にしてやろうか。

「そう言えばあそこの自販機に新しいの入つてね、時々ハートの片方が書いてあつて、それを二人が片方ずつ当ててハートを完成させると、幸せになるっていう桃のジュースが…」

今日もヤンキーデレな詩乃ちゃんは可愛いです。

「… ふうなるのかー」

「何一人でぶつぶついつてんの？ キモッ」

放課後、予想出来た筈の事態が起きた。完全に桃ジュースを飲みきるのに時間使つてて頭回らなかつた。ハート完成出来た時の詩乃ちゃん可愛かつたなあ……。いつもの怖いヤンキーな感じと違うギャップ萌えつてやつか。

「ねえあんた、しーちゃんの何なの？」

「しーちゃんに連れていかれて何も無いってのは怪しいよねー」

ハート完成させるために桃ジュース完売してたなんて言えない。

学校でも多大な影響力を持つ詩乃ちゃんだ。彼女達に疑われても仕方ない。彼女達でさえ、頭の上がらないビッグボスに連れ出されたのだ。

「ここで何か弱み握れたらしーちゃんの上に立てるかもしれないしねー？」

「きやはは！ それ良いねえ!!」

「いっつも調子乗ってるあいつに、一泡吹かせられるな!!」

……こいつら……!!

「だからさ、ほら？ ゲロつちやえよ！」

「っ……!! ぐほえっ……」

彼女達の一人に、いきなり腹を蹴られる。僕が男だからって、多勢に無勢。しかももやしの俺に、徒党を組んでる彼女達に勝てるわけがない。

「だけど、口だけは割らない。詩乃ちゃんを……裏切りたくない。」

「……うえっ……！」

だからって、これは殴り蹴りすぎでしょ…… 身体中痛い…… 口切れてるし……。

「ちっ…… まだ言わねえのかよ」

「もつと痛い目見ないとわかんねえのかなあ!？」

「…おい、何してんだ…？」

場が凍りつく、静かだけど、怒りに溢れたその声に、彼女達は一斉に振り向いた。

「し、しーちゃん!? 何で、ここに…!?」

「たりめえだろ… 倉庫はうちも良く使うからよ… んで、だ」

いつになく鋭い眼光で彼女らを見る。

「もう一度聞く… 何してんだ、お前ら…!?」

その一声で人を竦み上がらせる程の怒り。その恐怖に、彼女達は戦く。

「…な、何言ってるの!? こんなどうでもいいやつリンチしてて何が悪いのさ!？」

「そうだよ！ しーちゃんには関係ないでしょ!？」

「… お前にとつてはもうでも良いだろうけどさ… うちにとつちや… 命よりも大事な人なんだ… いいから、どけ。な？」

その言葉に、彼女達は我慢出来なくなったよう。

「… は、はあ!? こいつが、命よりも大事なやつ!？」

「うわー、しーちゃん幻滅ー。まじあり得ないんですけどお」

と、好きなだけ罵声を浴びせる… こいつら… 人が黙ってりや好き放題言いやがって…

俺なんかどうでもいい。確かにそうだ。だから、詩乃ちゃんだけは… バカにするのは許せない。

「… あんたら、さ。僕に言えよ。僕なんかが、東山さんとつるんだ。僕に好きなだけやれよ。東山さんは、巻き込むな、よ…」

「… アツハハハハ!! 何かっこつけてんの!? だっさ!!」

「ださくたっていい。東山さんだけは、傷つけんな。傷つけるんなら… 僕だって、やるぞ」

詩乃ちゃんに守られてばかりだったんだ。たまには、良いとこ見せ

てやりたい。

それで、もう終わりにしよう。詩乃ちゃんなんか、俺と一緒にいたらまたバカにされる。そんなのは、嫌なんだ。

だから…!!

「ださくなんてないよ。カッコいい。ありがと、晴君」

そう言っつて、詩乃ちゃんは優しく微笑む。

「…今から連絡すれば、男は何人か来れるっつてさ。何でも好きな事やっつていいっつて伝えてある」

詩乃ちゃんは、携帯を取りだし、そこに並んでいる大勢の連絡先を見せる。

「…は？」

「ちよ、ちよっとしーちゃん何言っつてんの…？」

「軽く退学はしないといけないだろうなあ…？で？まだやるか？」

…詩乃ちゃん、それはちよっつとカッコ悪いよ…。

「いてて…」

「だ、大丈夫!? まだ痛む!？」

「大丈夫だよ、染みただけ…」

負け犬のようにここそこ去っていった彼女達。それを見ながら、何故かバックの中に常備してあるらしい救急箱を広げて、せつせと詩乃ちゃんは手当てをしてきてくれた。

「…詩乃ちゃん上手いなあ…」

「…ごめんね、晴君」

「え？何が？」

「…私のせい、だよ。私が、あんな連中と一緒にいるから、晴君

が…」

そう言つて、ポロポロと涙を流す。

「今日、晴君の教室にいったら、晴君も、あの連中もいなくて…もしかしたらつて思つて…急いで来たんだ…ごめんね、晴君」

「いや、詩乃ちゃんのせいじゃ…」

「私のせいなの!! 私が、私なんか、晴君と仲良くしちやつたら…晴君が…」

詩乃ちゃんは、涙を流しながら、僕に抱きつく。

「…だから、お別れを言いに来たの」

「…え?」

「だって、私と一緒にいたら、また晴君が酷い目に遭う。そんなのは嫌なの…本当は、お別れなんてしたくない。もつと、ずつと一緒にいたい。だけど、それじゃまた晴君に迷惑がかかっちゃう…だから」

「…詩乃ちゃん、ちよつと、僕の話聞いてくれないかな?」

「…?」

「…今日さ、一緒にハート完成させた時、詩乃ちゃん凄く可愛かったんだ」

「…ぴっ!」

ぴっ!?! つてなんだ。

「それだけじゃない。いつも、詩乃ちゃんは可愛い。僕に優しくしてくれて、僕がつまんない事言つても笑つてくれて、僕が失敗しちやつても励ましてくれて…僕と一緒にいると、本当に楽しそうにしてくれて、嬉しかったんだよ」

彼女の笑顔が、どんなに僕の救いだったか。

「詩乃ちゃんの笑顔を見る度に、僕は…どんどん詩乃ちゃんを好きになつた」

「…ひゃう?!?!」

「…だから、詩乃ちゃんとお別れしちやつたら…僕嫌だなあ。寂しいなあ」

「で、でも!!」

「お別れなんてしたくないよ。僕は、詩乃ちゃんとお付き合いしたい」  
「… ぴいっ!?!」

可愛い。

「僕、もっと強くなるから。あんな奴らに負けないように、強くなるから。だから、僕とお別れしないで?」

「… い、良いの…? 本当に…?」  
「うん」

「わ、私こんなだし… 不良だし… あんな友達しかいないし… バイトばかりだからあんまり時間ないし…」

「それでいいよ… そう言えば、何でバイトばかりしてんの?」

「… その… 大学生になった時、晴君と、一緒に暮らすためのお金を…」

先読み早すぎない!?

「あと、結婚資金とか、子育て資金とか… 色々、あるから」

「そ、そこまで考えてたのに、お別れしようなんて言ったの…?」

「晴君に迷惑かけちゃったら、意味ないし…」

彼女は、金髪の枝毛をくりくりと弄り、ぷいっとそっぽを向いてしまふ。

どこまでも健気で、優しく、可愛くて、僕の事を考えてくれる、不良な彼女。

そんな彼女に惹かれるのは、当然だろう。

「それでも、良いの…?」

「うん。大好きだよ、詩乃ちゃん」

大好きになるのなんて、当たり前。

「… 私も、大好きだよ…」

「… ていうか、ここまで来るのに随分時間かかったねえ」

「だ、だって… 私不良だし、卒業まで我慢しようって思って…」

「… 何で卒業まで?」

「… 高校、中退したくないし…」

「… え?」

「… もう、鈍感」

そう言つて、頬を膨らました彼女は、僕をマットの上に押し倒す。

「え、あの、詩乃ちゃん!？」

「初めてはベッドが良かったけど…良いよね？」

「何がいいのさ!？」

「えへへえ、大好きだよ…晴君…」

「たでーまー」

「あ。あなた、お帰りなさい」

「パーパー!! お帰りー!!」

「おおー、息子よ元気で何よりだあ！」

「ねえねえ!! 今日ね今日ね!! ママがこれ買ってくれたの!!」

「おおー、良かったなー。後でパパにもやらせてくれよ?」

「うん!! 一緒にやろ!!」

「ええー、ママも混ぜてよー」

「当たり前だろ? 家族一緒だ」

「ママ出来るかなー?」

「何おう? 言ったなあー!？」

あるところの、あるマンション。そこにいる冴えないパパと、金髪  
のママ。そして、元気一杯の男の子の笑い声は、幸せそうに、楽しそ  
うに、今日も響き渡る。

無表情で素直な妹。

妹。アニメを見ている同志ならば誰しもが憧れるであろう、妹。エ  
○漫画先生面白いよね。アニメ化してくれて嬉しいです。

その種類は多岐に渡り、ツンデレ、ヤンデレ、ロリ、黒髪、金髪、貧  
乳巨乳、e t c . . . 時代の発展と共に、妹の種類も発展してきた。

さあ、そんな妹可愛いに溢れる今日。実は俺にも妹がいる。品行方  
正、容姿端麗。頭脳明晰とまでは行かないし、運動もあまり得意では  
無いが、何でもそつなくこなす我が妹。

我が妹は、そんな妹業界には無い、新しい属性を持っているようだ。

「… お、おはよう。麻衣」

「おはようございます。兄さん」

「…」

「… 何ですか、そんな見つめて。朝からテンション上がっちゃうん  
で止めてください。嬉しいです」

「…」

何時も仏頂面。面白いテレビ番組を見ても笑わない。兄である俺  
に敬語を使い、何時も口角をひくつかせ、素直なのか何なのか分から  
ない解答を放ってくる。不思議な妹。

「… あー、麻衣。俺お腹空いたから、朝ごはんくれないかな?」

「全く。たまに手伝わなくていいですから全部私に任せて座っててく  
ださい」

「どういう事なんだ。」

「いやいや、今日はごめんな。たまに手伝うからさ」

「何ですかたまに手伝って私の好感度上げようって作戦ですか。もう  
MAXなんで必要ないです」

「ア、ソウデスカ」

まあ、よく分からないが、妹は俺の事が大好きらしい。

「アスパラガスとベーコンって最強だよなあ」

「はい。兄さんの好みは全部把握済みです」

香ばしいタレで炒めたアスパラガスのベーコン巻きをおかずにご飯をかきこむ。ご飯が進むこの味い!! やはりこのタッグは最強!! 「そうやって豪快に食べる男らしい兄さんまじカッコいいです。ぱしやり、と」

「食事中に写真撮るのやめようね?」

「安心してください。そこら辺の店に行けば写真撮りまくる人達一杯いますから。もう一枚、と」

大事そうに携帯を見つめながら口角をひくつかせる麻衣。可愛いんだよ。可愛いんだけどさ。何かこう、何か違う。

「…」

「…………… 兄さんに見つめられ過ぎて息するの忘れてました」

「死ぬよそれ!?!」

「んはあ… 朝は低血圧なのに… もう血圧MAXです」

「絶対死ぬからなそれ!?!」

「… うし、と。もう夏服かあ」

「半袖の兄さん… 今年も私の夏が来た…」

ピンクのエフエクトが見えそうなくらい幸せそうな無表情。今日も妹は平常運転です。

「ティッシュが何枚あっても足りません」

「お前出血多量で死ぬんじゃないの。鉄分しっかり摂れよ」

「そうやって細かいとこまで心配してくれるとか何なんですか。これ以上メモメロにさせてどうするつもりなんですか」

「普通の事だと思っただけど」

「普通にそれが出来る兄さんまじカッコいいです。好き」

「おもつきし言いやがったよこいつ… いいから行くぞ」

「あ、兄さん。ネクタイ忘れてますよ」

そう言つて、赤色のネクタイを持ってくる麻衣。ワクワクウキウキと俺の目を、そして首もとを見ているが…ごめんな、麻衣…。実は…

「…ごめん、麻衣。夏服にはネクタイいらないんだ」

「…私の春が終わった」

表情全く変わってないのに、何で沈んでるのが分かってしまうんだろうか。黒いオーラが可視化されてるみたいだ…。

肩を落とし、項垂れながらネクタイをしまいに行く。そんな後ろ姿に罪悪感を抱きながらも、可愛いなんて思ってしまう俺は、シスコンなのだろう。

「麻衣ー？ 行くぞー？」

「待つてください兄さん。一秒でも離れたら萎みます」

「授業中どうすんの…」

「…そういや、一緒に登校するのは初めてだな」

「はい。あんな部活止めてやります」

仏頂面ながらも怒りを示す麻衣。怒りマークがおでこに見えるぐらいの怒気を放っていて、心なしか、眉間にシワが寄っている気がする。あと眉毛がつり上がってる。可愛い。

「俺は麻衣と一緒に登校出来て嬉しいなあ」

「…やばいです。立ってらんないぐらい嬉しいです」

鞆で口元を隠し、目だけはこちらを見てくる。よく見ると凄く赤い。顔が。

「本当ですか？ 毎日一緒に行つて良いですか？」

「当たり前だろ。じゃなきや嫌だ」

「…朝からもうテンションゲージオーバーです」

「ドラ○エだったら最強だなそれ」

「兄さんの甘言は正に口トの剣ですね」

妹とゲームの話出来るって幸せだよな。妹とはドラ○エ、ポケ○ン、モン○ンから白猫までやってます。モン○ト？ ガチャ運無くて止めました。ええ。何で麻衣ばっか単発で当てるんだよ…。俺10連でも爆死だぞ。祭だったんだぞ。ワルプルギスナイチンゲール寄越せやおら。

「だから兄さんと私とデータ交換しましょうって言ったのに…」

「妹相手にんな事出来るかよ。俺は俺の力でゲームやるんだ」

「…また兄さんに一目惚れしてしまいました…」

熱の籠った視線を向けてくる麻衣。可愛いなあもう。

「…お。おーい謙二ー、おいつ…その子誰？」

「おう。章介、おいつす」

「おはようございます、坂本さん」

校門前で出会った、同じクラスの坂本 章介。幼い頃からの付き合いで、まあ腐れ縁でところか。

「…んー？ どっかで会った事あったっけ？」

「あー。妹だよ妹。中学では髪伸ばしてたからな」

「あー!! 麻衣ちゃんか!! おひさー」

「お久しぶりです」

「彼女ついたらどう地獄に送ってやろうかと…」

ふう、やれやれといった具合で首を振る章介。リア充撲滅委員会委員長でもある。恐ろしい。

まあ、麻衣には猛烈アピールされてるけどな…。妹相手だとしても容赦無さそうだし、ここは上手く誤魔化して…。

「そんな、”まだ”早いですよ…。もっと兄さんのお相手に相応しくなれるよう精進致します」

「何いってんだ。もう十分相応しいぞ、麻衣」  
「兄さん…」

やっちまった。

「うう… 酷い目に合った…」

「やっとお昼になりました… 兄さん成分補充させてくださいい…」  
ムギユーツと抱きついてくる麻衣。こんな所誰かに見られたら…  
屋上はご都合主義によつて誰も入つて来れない障壁が貼られている  
ので大丈夫か。

「おお… ニイサンジウムが溜まっていく…」

「何だそれ… 早く飯食べようぜ」

「ああ、はいい… すみません… お腹空きましたよねえ…」

幸せ成分を補充出来たのか、猫なで声の緩い声で弁当を用意する麻衣。

「今日はですね… 回鍋肉とお… 青椒肉絲とお… 色々中華料理  
作つたんですよお…」

「麻衣、アーンして」

「はい兄さん。少しお待ちください。直ぐにお箸の用意を致します」  
キリッ

よし。

「そそそそそそ、それでは… ああああ、アーンをさせていた  
きます」

「無表情でそこまで噛むのも凄いよな」

「口角の震えがばないんです理解してください」

「はい」

よく見るとめっちゃ箸震えてるな… 何で溢さないんだこれ…  
「ああああ、アーン…」

「アーン」

「おーい謙二くん！一緒に弁当食べようぜ…って…」

「ご都合主義の障壁は、たった一人の快活少女によって吹き飛ばされた。」

「ねえ謙二君…その子初めて見るなあ…私にも紹介してくれないかなあ…!?!」

「ええ、私も初めて見ますね…兄さん…私にご紹介しては下さいませんか…?」

「は、はは…これが俗に言う主人公って奴…?」

おい、こんな主人公生み出したやつ出てこい。原稿用紙10枚分ぐらいで説教してやる。

〜後編へ続く〜

ご主人様と私

痛い。

辛い。

怖い。

暗い。

誰か、助けて……。

「……嫌だ、よお……」

長い夢を見ていた気がする。鞭で叩かれて、炎で焼かれて、怒鳴られて、酷い暴力を受ける夢。ああ、でも、これは夢じゃないか。いつもの事だ。いつも通りの日常だ。

でも、今日なんか暖かいなあ。いつも粗末な毛布にくるまってるだけだから、こんなに暖かいはずなのに。それに、柔らかい……？ あれ、これって……

「……ベッド……？」

間違いない。ベッドだ。ふかふかの毛布、真つ白な枕。夢みたいだ、こんな立派なベッドの上にいるなんて。いやいや、これこそ夢だ。奴隷の私が、こんなベッドに寝られるわけがないじゃないか。私は、自分の頬をつねってみた。

「…痛い？」

次は、自分の腕。

「…痛い…」

おかしい。痛い。目が覚めない。いや、こんな幸せな夢なら覚めてほしくないんだけど。でも、じゃあこれは…？ 誰かの、お家？

身体を起こし周りを見渡してみる。綺麗なお部屋だ。家具もきちんと揃っている。壁紙もしっかり貼られていて、タンスやテーブル、化粧棚等が配置されている。

「…これは…」

ベッドの隣にあった棚の上に、羊皮紙が置いてあった。

『おはよう。目は覚めたかい？ 慌てないでくれ。ここは領主の屋敷じゃない。僕…と言つても分からないか。一応僕は商人なんだが、僕の家なんだ。道端で倒れていた君を、ここに運んで来た。お腹が空いているなら、そこに食事を置いておいたから、食べてくれ。怪しいと思うなら、食べなくても良いよ。僕は夕方頃に戻る。ここを出ていくなり、そのまま居るなり好きにしてくれ』

と書かれていた。とても、綺麗な字で。

「…商人、さん」

手紙から目を離し、棚を見る。そこには、パンとスープ、お水が置いてあった…。久しぶりに見た。奴隷になつてから、まともな食事をしていなかったから。

…もしこれに毒が盛られていても、私は後悔しないだろう。

私は、パンに手を伸ばし、かぶりつく。パン特有の甘味と香ばしい香りが私の口内を覆い尽くす。スプーンを手に取り、スープに口をつける。野菜たっぷりスープだ。どっちも、美味しい。

「…えぐっ… ひぐっ…」

パンを食べるなんて、いつぶりだろう。こんなにも、暖かい涙が出

てくるなんて、思わなかった。

出ていくなんて、出来ない。見ず知らずの私に、ここまでしてくれる人に、お礼一つしないです…。そんな事出来ない。例え、何かの罠だとしても、私はここで待とう。

いつからか、忘れてしまった、淡い胸の高鳴りに身を任せて。

「うーん、文章ちよつとキザ過ぎたかなあ」

あれはないわ。うん。でも、事実だけ伝えた業務連絡みたいな文章よりかは増しな筈だ。うん。そう信じよう。

昨日運んで来たあの少女…。服装や身体の痣を見るに、奴隷だろう。しかも、ここの領主のこの。あのクソ領主…。また奴隷を捨てやがったな。使うだけ使って、後はポイ、か…。どう殺してやろうかな。

「おやおや？ 旦那、悪い顔してやがりますねえ」

「…へ？ ああいや。僕も商人ですからね。悪い顔くらいしますよ」

「へっへっへ。計画が練れたら、あつしもお手伝いさせてくださいませ。旦那には世話になってますからね」

「ええ。これからもよろしくお願いしますよ」

「いやあ、あつしは旦那に出会えて幸せですなあ！」

全く。気の良い人だ。だからこそ、信頼出来る人だけど。質の良い布を仕入れてくれるし、商売のセンスも天下逸品…。領主に一泡吹かせるのに、良い人材かもしれないな。

「では、僕はこれで」

「ええ！ 今後ともご贖員に!!」

「さて、仕事も一段落ついたし、帰るとしますか」  
あの娘、待っててくれるかなあ。

「… うむむ、緊張するなあ」

家に帰ったら、あの娘が待っているかもしれない…。うん、正直に言おう。下心が無かったわけじゃない。怪我や汚れのせいで目立たないが、とても綺麗な顔をしていた。可愛いかった。だけど、それだけじゃない。

「… 奴隷、か」

ため息をつき、ドアノブに手をかける。僕一人の力は、ほんとうにちっぽけな物だ。だけど、あの娘を助けたいって思う気持ちは、絶対、ちっぽけじゃないはずだ。

「あ、えっと、お帰りなさい、ませ…」

… いて、くれた。

「この度は… 奴隷である私を助けてくださり、ありがとうございます、ありがとうございました。お望みならば、私の身体を」

「良かったああああああああああああああ!!!」

「ひゃっ!?!」

「いてくれるって思ってたからああああああ!!! 良かったああああああ!!!」

思わず彼女に抱きついてしまった。

「さあすぐにお茶にしよう!! そうしよう!!」

「ええ!?! ええええええ!?!?」

僕は、久しぶりに胸が高鳴っていた。こんなに楽しいと思ったのは、いつ以来だろうか。

「いやあ申し訳なかったね。良い年して子供のよう騒いでしまつて」

「は、はあ……いえ」

「……よし。はいどうぞ」

「……」

「怪しまないでくれよ。どれ、僕が飲んであげよう……ふふ、我ながら美味しい茶だよ」

「……いただきます」

彼女は、少し茶を見つめながら、意を決したようにカップを傾ける……口に合うかな……。

「……美味しい」

「良かった！へへ、これ良いところから仕入れた自慢の茶葉で淹れたんだ!! 口に合ったようだね」

「……あの」

「ん？なんだい？」

「……何で、私なんか……ここまで？」

彼女はカップを置いて、自分の腕を見せる。様々な傷痕が見える。そして、手首には痛々しい赤い痣が輪状に出来ていた。恐らく、手錠の痕だろう。

「……私は、奴隷です。こんな……こんな事、しなくて良いんです。何がお望みなんですか？ 身体ですか？ 働けばいいんですか？」

絶望に染まった、綺麗な筈の瞳。汚れてしまったその瞳の中の僕は、嫌悪の対象として写っているんだろう。何でだ。何で彼女が、こんな瞳をしなければならぬ。

僕は、許さない。彼女に、こんな瞳をさせるこの世界を。

「……何も望まない」

「…は？」

「…僕はね、奴隷が大嫌いなんだ。絶望に染まった瞳をして、みずぼらしい服を着て、汚い肌をして、全身に痣を作って…そんな奴隷が、大嫌いだ」

「…」

「だから、君を奴隷から解放してあげたいんだ」

「…え？」

「まずは服を買おう。それから美味しい物を一杯食べよう。次は綺麗な景色を見に行こうか？ 買い物が見たいかな？ 遊びに行くのも良いね。いや、女の子だからおしやれしてみようか？」

「ちよっ、何を言ってるんですか!？」

「何って、そのままさ。君はもう、奴隷じゃないよ」

「でも、私は…!!!」

ああ、そんな事言わないでくれ。君の…君達の、悲しい言葉は聞きたくない。絶望に染まらないでくれ。そんなみずぼらしい服を着ないでくれ。そんな酷い痣を隠しながら生きないでくれ。君達は、堂々と生きていいはずなんだから。僕が、君達を救ってみせる。

「君は、今日から僕のお友達さ」

「…友…達？」

「そう。僕の家に住む、一人の友達。僕は、故郷が遠い所にあつてね。友達と呼べる人は一人もないんだ。だから、僕の友達になつてくれ」

「…」

「…嫌かい？」

「…嫌です」

そんなきつぱりと…。

「…私、奴隷だから…領主様のために、働かないといけないから…」

「なんだ、働きたいのかい？」

「…ここで、働かせてください」

「…なるほど」

「そんな、私なんか、そんな都合の良い思いをしちゃ、いけないんです…どんなにこき使ってくれても構いません。私の身体だって差し出します」

「そそそそそそ、そんな事するはずないじゃないか!？」

「だから…ここに置いてはくありませんか…?」

「うーん…そんな形は嫌なんだけどね…じゃあ」

僕は、彼女の頭に手を置く。優しく、優しく。彼女の暗い思いを、解きほぐしてあげられるように。

「君はこれから、僕のお手伝いさんだ。買い物も、仕事も、何でも着いてくるように」

「…はい。ご主人様」

「ぐほう!!!」

ご主人様は…破壊力高いなあ…。

こうして、私とご主人様と私の生活が始まりました。この日から、私の生活は一変してしまいました。

「おはようございます、ご主人様」

「おお。おはよう。早いんだね」

「…これが当たり前だったので…勝手に掃除させていただきま

したが、よろしかったでしょうか？ ご不満なら、どうぞ殴ってください」

「いやいやいやいや!? 殴んないよ!? ありがとうね、掃除してください。僕は掃除苦手だから」

「… いえ」

「よし、じゃあ朝ご飯にしようか」

「… 私、料理の仕方は…」

「はは、仕方ないよ。じゃあ一緒にやろうか。料理は得意なんだ」

「は、はい！」

あ、ちよつと… 頬が緩んだかも。

「じゃあ僕は仕事に出るよ。お昼は保存庫にあるのを好きに食べてくれ。夕飯の前には戻るから」

「… い、行つてらっしやいませ」

「うん。行つてきます」

… 行つてしまわれた。なんだろう、夢でも見ているかのような気分だ。こんな綺麗な服を来て、美味しいご飯を食べて、行つてらっしやいを言つて… 大きなお家に、一人。何をすればいいんだろう… あ、お掃除の続き… お料理の練習… やることは一杯だ。

箒で掃きながら、ぼやーつと考える。自分は、ここにいて良いのだろうか、と。

私は、幼い頃に奴隷商に買われた。私の両親は移民だったらしく、運悪く奴隷商に捕まつてしまったらしい。両親の顔も覚えていないし、本当にいたのかも分からない。

そして、領主に買われ、長い間そこで働いてきた。沢山の暴力を振るわれたし、罵倒され、粗末な食事しか与えられず、下手したら殺されてしまうかもしれない、あの地獄。

なのに、今のこの状況はなんなのか。天国なのだろうか。でも、私は今、確かに生きています。

「…ご主人、様」

不思議と頬が熱くなる。胸がとくん、とくんと高鳴る。

「…あ」

いけない、掃除してるんだった。少しでも綺麗にして、ご主人様の心地の良いお家にしてあげよう。お料理だって頑張って覚えなきゃ。ご主人様が帰ってきたら、温かくて美味しいお料理をご馳走してあげられるようにしなきゃ。

そして、ご主人様の笑顔が、溢れるお家にしてあげたい。

ご主人様の、くらくらするくらい眩しい笑顔が、見たいから。

そんな事を考えながら、ぼーっと、私はご主人様の笑顔を思い出すのでした。

これもまた、後半に続きます。

魔王幹部のお姉さんが強すぎて敵うわけがない。

「あら、目覚めましたか？ おはようございます…。ここがどこか分からない？」

暗い暗い部屋の中。

「ふふふ…。じゃあ今自分の置かれてる状況、分かる？ …分かった？ 手錠で繋がれて、目隠しされて、壁に寄り掛かってるんです…。あら、次は何で分からない？」

手首には冷たい感覚。視界は何も見えず、暗々たる暗闇が広がるばかり。

「はあ…。あなたは勇者、私は魔王幹部。あなたは、魔王様のお城に攻めこんで来たんですよ？ そして、幹部である私に敗れ…。お仲間は退散、そしてあなたは一人、私に捕まってしまったわけです」

その言葉に耳を傾け、心の中で反芻する。

「ふふ、お仲間を捨てられてしまいましたね…。あら？ そんな事ない？ お仲間を信じていらつしやるのですね…。妬ましい事です。そのお仲間はあなたを置いて逃げたというのに…。」

違う。否定したいだけ。そんな事、あるはずがないと。

「…。まあいいです。あいつらは私がどうとでも出来ますし…。問題はあなたですよ、勇者様。あなたは仮にも勇者、そして形としては私に匿われてる状況です。ここが誰かに見られてしまったら、あなたも私もただじゃ済みません。今はどうか、じっとしていて下さい」

ある一つの疑問が、心の中に浮かぶ。

「…。何で匿ったか、ですか…。それはですね…。あなたを愛しているからですよ、勇者様」

「やっと、長年の願いが叶いました…。始まりの街であなたを見かけたその日から、私の心はあなたの色で染められ、今も隅々まであなたの色で彩られているのです…。覚えていませんか、そうですね。本当にちらつと見かけただけなんですから。でも」

何も見えない暗闇、視覚が封じられている中、他の四覚が鋭敏になっている。

だから、唇に触れた柔らかな感覚が、身体中に痺れ渡る。

「…… たったそれだけで、私の人生は狂わされてしまったのですよ、勇者様。こうして、口づけするのも躊躇わなくらいにです。責任を取れとは言いません。私が勝手に見かけて、勝手に惚れてしまっただけなのです。私の身勝手、私の我儘です。でも…… その身勝手、我儘に付き合ってもらいますよ…… 色んな意味でね」

よく分からない。新たに入った情報が多すぎる。だけど…… 何故か。魔王幹部のこの女性が、僕に恋をしているという事だけは分かった。

「…… ええ。私はこれから魔法の研究に入るから…… はあ？ 資金が出ない？ ふぎけないで…… 分かったわ。私が後で進言しておくから…… あなたは悪くないわ。気にしないで。ええ、ご苦労様」

彼女が誰かと話している声が聞こえる。ここに捕まって…… 何日だろうか。今が何時なのかも分からない。何日経ったのかも分からない。今が朝か、昼か、夜か。何曜日か…… ああ、それはいつも分からない。賢者がいつも教えてくれた。日の出方とか色々で何曜日とか、何月かとか分かるらしい。

「…… そろそろ気付き始めたかしら…… 魔王も鈍感ね……」  
戻ってきた。

「お待たせ…… 何を話していたか、つて？ ふふ、あなたを私にメロメロにさせる魔法の研究よ。冗談なんか言っていないわ？ 本当よ？ …… 誰も作った事のない物を作るって、とても楽しい物よ」

「…… 目隠しを取ってほしい？ …… うーん、それは難しいわね。だって、あなた魔族が嫌いでしょう？ 姿を見るなり襲いかかってきては切り刻んで身ぐるみ剥ぐってこつちでは有名なのよ？ …… 身ぐるみ剥がされちゃうのは、憧れるわね…… え？ …… 何だ、よく分

かってるじゃない」

空気が揺れるのを感じる。顎に人差し指が添えられる。

「そ。あなたは私に勝てないの。あなたの聖力は、あらゆる魔力を断ち切る力、「断絶」。でも、私の魔力はあらゆる魔力増幅、加速、増量する「無限」の魔力。単体魔力には最強の力だろうけど、私はいくら斬られようと斬られた所から魔力で蘇生出来るからね。あなたの力は私には届かない」

目の前にいるのは、圧倒的絶望。僕がいくら剣を振ろうとも、絶対に彼女には届かない。紙一枚程の薄さの魔力壁でも、僕の剣はそれを割る事が出来ない。…恐らく、彼女

「だって私、魔王様より強いからね。単体火力なら劣るけど、攻撃が通らないわけだしね」

…圧倒的過ぎる。一国を支配し、数多くの魔族を従え、僕達の国をも支配しようとしている魔王を超える存在が、目の前にいる。絶対的な、愛を持って。

「ふふつ。じゃあ始めるわよ、魔法の研究。まずは…そうね、あなたの好きな物を教えて？ …なあに？ 言ったじゃない、誰も作った事のない物だって。しかも、これは精神魔法よ？ ただ魔術回路を作って、魔法式を組むだけじゃ無理なのなの。まずはあなたの精神を知らなきゃね」

…何なんだ、この人は。

「…良い子ね。素直な…あなたが好きよ。うん、大好き…もう何回も言ってるでしょう？ まだ照れてるの？ …可愛いなあ…」

頭が柔らかい手で撫でられる。

「…だから、知りたいの。あなたの事。大好きな人の事を、もっと知りたいんだ…あは、教えてくれるんだ。第一段階はクリアだね…魔王幹部に心を開いた時点で、もうあなたの負けよ。観念してね？

…ふうん、クリームシチューね。具材は？ …結構平凡ね。私でも作れそ…あら？ 賢者が作ってくれたんだ…」

…暗闇が、より黒くなった気がする。

「…嫉妬しちゃうなあ。私の前で、他の女の話するんだ… あは、まだ自覚ないんだね、自分が、今、どんな状況にいるのか。何？ 自分が聞いたんだろ、だって？ …好きな女の話聞いた訳じゃないんだよね、私。ねえ？ 私、あなたの事好きなんだ。大好き。愛してるの。だから… もう抑えられなくてね。あなたを、全部私で染めてあげたい… あなたが、私にそうしたように」

首が絞められる。呼吸が出来なくなり、弱々しい吐息が喉奥から漏れる。

「… あ、ごめん。苦しかった？ ごめん、ごめんね… あなたが死んじゃったら元も子もないのにね。私、あなたの事になると止まらなくなっちゃって… もう一度聞くね？ あなたの好きな物は、なあに？」

「ただいまー… あら？ 寝てる？ そっか、もう時間の感覚も無くなっちゃったもんね… 今なら、外してもいいかな。よつと… ふふ、本当に可愛い顔してる… 夢、見たの。あなたと私が… 魔族も人間も関係なく、幸せに暮らしてる夢… やっぱ、私の事嫌い、かな。心開いてくれたって言っても… 安心してるって事じゃないし… 何聞いたつけ。好きな食べ物、音楽、本、場所、遊び… 色々聞いたな。君の事、いっぱい知れた」

「嬉しかったんだ。君、その時は少し安心した顔だったよね… 君の事、もつと知って、もつとお話して、もつと一緒にいれば… 君は私の事、好きになってくれるかな？ なってけるといいな… 好きだよ、私は。何でかな、君を一目見た時、運命を感じたんだ。この人だ、って… まさか、私に立ち向かう勇者だとは、思ってたなかったけどね」

「… 怖いんだ。君が、私を見て、怖がっちゃうのが。私ね、角が生え

てるの、頭に。背中にはおつきな翼があつてね、とても…怖いと思うよ。…私も、人間に生まれたかつたな。そうすれば、姿を隠す事も、こうして、暗い部屋に閉じ込める事もしないのに」

「人間とか、魔族とか…そんなの無ければ良いのにな。そういう意味では、君が魔王を倒そうとする事は、良い事なのかもしれないね。まあ、そっちの王様が共存、なんて事考えるわけないだろうけど」

…この人は、本当に僕の事が好きなんだな。正直なところ、僕は彼女に心を開いていた。彼女と話している間、僕も彼女の事を知った。魔族が到底考ええないような、平和的思考、その聡明さ、何より、人柄の良さ。自身の部下であろう人を労い、失態を許し、鼓舞する。魔族には…ああ、そうか。僕はもう、分からなくなってしまっているんだ。

魔族と人間の違いは何だ？ 何故対立するのか。彼女と接してきて、分からなくなつた。魔族は人間に対して絶対悪であり、敵である、と、そう考えてきた。だけど、魔族にも家族がいて…恋人がいて…僕らと何ら変わらない姿が、僕の前にはある。

もしかしたら…魔族と人間は…僕と、彼女は…

「はい、魔法は完成したね♪」

一瞬、息を飲む。気づかれてないと思つていた。まさか、自分の心の中まで知られているとは思つていなかったから。

「最初から起きてたのは知つていたし、君が私に心を開いている事も分かつてた。だから敢えて、気づかない振りしてたの。君が自分から、開いてくれるのをずっと待つてたのよ…言つたでしょ？ 魔法だつて…嬉しいなあ。やっと、私を見てくれたね。最初は勿論怖かつたよ？ だけど、日に日に、君が私に心を開いてくれるのが…嬉しくて、楽しくて…日に日に、もつと君を好きになつた」

彼女の姿は、魔族とは思えない程美しかった。整つた顔立ちは、城

の美女達の中でも見た事がない。紫色の瞳、桃色の髪、漆黒の双角。そのどれもが、恐怖ではなく、ただ、美しいと感じた。

「…良かった。綺麗だって、思ってくれるんだ。嬉しいなあ…ほら、魔族と人間なんて、変わらないでしょ？ …あら、私の方が綺麗？ …じゃあ、今度は私から聞こうかな…ねえ、勇者様、私…あなたが今まで出会ってきた、どんな女の人よりも、綺麗？」

「あは、あはははははは…そっか、そうなんだ。あははははは…ありがとう、勇者様。私、あなたを好きになって良かった。あなたは…人間よりも、私を選んでくれるんだね。私…勇者様の一番なんだ…嬉しい、嬉しいなあ…本当に…こんなに嬉しいと感じたのは、初めて」

「じゃあ、今から言う事がどんな事でも…私を選んでくれる？ 約束よ？ …うん。ありがとう。私ね、あなたの仲間、全員殺しちゃったの。うん。本当に」

「勇者を返して!!」

「あら？ 随分と来るのが遅かったわね…えーっと、魔法使いに、賢者に、武闘家…見事に女ばっかりね」

「…返さないと、どうなっても知りませんよ!？」

「…勇者様がいないと、何も出来ないんだね。の割には、道具としか思っていないっぽいけど…」

「彼がいないと、魔王を倒した栄光が手に入らないじゃないか!! 早くあいつを取り返して、魔王を倒して…そして…」

「…勇者様は私に惚れているみたいでしたし、報酬も栄光全部…」

…清々しい程にクズしかいないな、このパーティー。勇者は、こ

んな奴らのために、身体を張って… ああ、バカらしい。

「… 良いわ。まとめてかかっつきなさい」

「言われなくても!!! ファイア!!!」

「死になさい」

「!? いやっ…」

「… 助けっ、勇者s…」

「いやいやいやいやあ!!! ふぎ、何で、こんな… !?!?」

「永劫回り続ける輪廻の輪、円環の果て、死にさ迷い果てぬ者達が紡ぐ、怨恨の歌…。死んで悔いなさい、あなた達は…。勇者に相応しくない」

「… ってわけだね。あの世でもこの世でもない…。罪人がさ迷う世界に飛ばしてあげちゃった…。恨んでる? 今回ばかりは、仕方ないわ。あなたに…。ここまで、来て、あなたに…。き、嫌われちゃうなんて…。死ぬほど嫌。だけど…。あなたは知らなければならぬとも思った…。勇者が、何なのか」

「… 勇者は、神の恩恵を受けた、選ばれし者。それ故に、魔王を倒す力がある…。それを狙う者もいる。今回、あなたは利用されたってわけね…。救ってあげられて、私は良かったと思ってるわ…。私は、あなたを利用しようなんて思ってない。隠した顔を持つてるわけでもない。そのままの私を、あなたに好きになってもらいたかったから。そして…。あなたは好きになってくれたわね」

「…さて。私はこれから、魔王を倒しに行くわ。…ねえ、着いてきて、くれる？…ありがとう。やっぱり私、あなたの事、大好き」

「…無理しなくていいわ。好きだった人に、そんな風に思われていたんだもの。…今だけは、許してあげる。…その女のために、泣きなさい。でも…あなたは私の物よ。泣き終わったら、もうその女共を思うのは許さない。…記憶から消してあげてもいいわ。…よし、強い子ね。…じゃあ行きましょう」

「この、下らない争いを、終わらせるために」

「…ご機嫌よう、魔王様。気付いてらっしゃいましたか、私が、裏切る事を。ええ…私は、あなたより強くなってしまうから。…では、さようなら、魔王様…勇者様、手を貸して下さいますか」

「…うん、良いよ。…そう言えば、名前を聞いてなかった」

「…それを言えば、私も聞いていませんでしたね…勇者様、あなたのお名前は、何ですか？」

「僕は…ルーク。ルーク アークテティア レストティアナ」

「…光の休息地、ですか。とても良いお名前…私は、アスタナ。アスタナ フェニキアス」

「永遠の黒。君らしい名前…じゃあ、行くよ、アスタナ」

「ええ、ルーク」

「… 呆気なかつたですね、数千年という争いが… こんな一瞬で終わるなんて」

「僕もそう思うよ… ありがとう、アスタナ。僕を救ってくれて」

「… いいえ。私は… あなたの事が好きになっただけですよ、ルーク」

「… いや、それ以上の事を、君は僕にしてくれた。これからは… 僕が返す番だ。僕は、一度国へ帰る。そして… 王国をぶっ壊す」

「あら、いきなりですね」

「うん。そして… それが終わったら、結婚しよう、アスタナ」

「… いきなり… ですね…」

「そうかな？ 君はそれを望んでいたんじゃないの？」

「… あなたから言われるとは… 夢でしか見た事なかったので… んむう… !?」

「… 僕も、キスする事には躊躇いは無くなったんだ。少し待っててくれ… すぐ終わらせるから」

「… あは、ご立派になりましたね… 初めて見た時は、あんなにも可愛らしくて… 弱々しかったのに」

「君と出会えて変わったんだ… 君の魔法は、世界一さ」

「あは、嬉しいです。では… 私はここで待っていますね」

「ああ。待っていてくれ、アスタナ… 終わらせるから」

「僕は… 君には敵わないよ、魔王幹部のお姉さん… そして、僕の姫君」

「あは♪ ごめんなさいね…。私、やっぱり待つなんて出来ない…。一緒に言つて、一緒に…。結婚式、しましょう?。」

小さな、小さな始まりの街。小さな小さな出会いの物語。  
ほんの小さな出会いから始まった、大きな大きな、恋の物語。

完全他人頼みな、何書こうかなのコーナー。

1. 『すれ違う二人』

すれ違い。人と気持ちを通じあわなかつたり、思いがどちらも噛み合わない事。それが原因で喧嘩してしまう事もあったり、そのままずっと通じ合えなかつたり…。何かと悲しい出来事である。のはずだが…。

「…むう。さつきから何をボヤッとしてるんだよ」

「ん？ ああ。今日はあつたかいからな。眠いんだ」

「まだ二時間目だよ？ そんなんでどうするのさ」

「寝たら起こしてくれ。『渚』」

「全く…」ボク”だつて寝ない訳じゃないんだからね？」

隣の席の『久川 渚』。肩に触れそうなぐらいの、短いショートカット、健康的に薄く焼けた肌、主張の少ない胸。端から見れば女の子らしさのない、だけど、俺にとっては誰よりも可愛い女の子。

そんな、『久川 渚』は勘違いなボクっ娘だ。

2. 『おつきなちっちゃな女の子。』

「…」

「…」

でっかい…。いや決していやらしい意味ではなくてですね…。彼女、随分と背が高い。180近くあるんじゃないかな？ おつきいな、羨ましい。

クラス替えして暫く経つけど、一言も会話したことない。いつも、その大きな体躯を隠すように教室の隅で本を読んでいる。長い前髪で、その表情は上手く見えなかつた。

「…ん？ 誰見てんだ？」

「あ、いや。何でもないよ」

「…あ、分かったぞ。太刀川さんだろ？」

「ぐう」

「ぐうの音ってほんとに出るんだな…」

ただ単にタイピングミスってうになっちゃったけどお、ええやんって思っただけのままにしたってのは内緒だ。何の話だ。

「最近よく見るよな。何が良いのやら…」

「…良い本読んでるなって思っただけ」

「本だあ？」

彼女が読んでる推理小説、俺もよく見るシリーズの奴だ。軽快なトークと読者の度肝を抜くかのような痛快な推理は、どの巻もひきこまれてしまうかのような面白さだ。

そんな事をぼーっと考えながら見ていたら、不意に太刀川さんがこちらを見た。

「!!」

「…」

因みに、驚いたのが彼女。黙っているのは僕である。

… 迷惑だっただろうか。

「…？」

何故か、こちらを見たまま動かない。というか、徐々に赤面しているようにも見える。目が右往左往しながら、口をぱくぱくさせている。本当に迷惑だったようだ。怒らせてしまったか。

「ごめん。僕トイレ行ってくるね」

「ん、おう」

太刀川さんに申し訳なく思いながら、視線を切るように席を立った。

背中に突き刺さる、熱い視線には気づかぬまま。

3. 『隣のお姉ちゃん… お姉ちゃん?』

「そんじゃ、行ってきまーす」

「はいはい。行ってらっしゃーい」

今日もかなり冷える。玄関のドアを開けるとそこには、降り積もった雪の世界が広がっていた…。また降りやがってこのやろう。まじで冬嫌いだ。

でも、最近。そんな嫌いな冬にも少し変化が起きた…。ちっぽけなんかじゃない、とんでもない変化が。

「お? おつす少年。今日も寒いねー」

「… おはようございます、日向さん」

玄関を出た先、家のフェンスを挟んで隣の家の車の前に立っていたのは、黒いコートに暖かそうなマフラーに身を包んだ、綺麗な女性だった。

「じゃ、今日も乗つけてこっか?」

「…」

「はっはー! 恥ずかしがっちゃって。遠慮しないでほらほら」

「… じゃあ、よろしくお願いします」

… 何なんだこの人。朝から太陽オーラ放ち過ぎでしょ。

彼女は隣の家に住んでいる日向さん。話によると、妹さんと二人暮らししているらしい。

「いやー、今まであまり話した事無かったからね。仲良くなれて嬉しいよ」

「う、うす」

何なんだこの人ー!!!  
年頃の男子高校生を揺さぶるような発言ばっかしやがってええええええええ!!!

「よーしすっ飛ばしてくぞ少年!!」

「はあ!? 雪と氷だらけなんだからゆっくり行ってくださいよ!!!」

「はっはー!! やつと元気になったな少年!! 朝は元気が一番だよー!!」

そんなこんなで、俺と日向さんの朝は始まったのである。

おつきなちつちやな恋

僕は、高校生の平均身長より低い。164...だと...? 何処の日向○陽だ。僕あんな飛べないよ。しかもコミュ力もない。この身長のおかげで、随分とマスコットにされた。男子からはチビだの何だの馬鹿にされ、女子には「小さいのはちよつと...」とガチトーンで距離を置かれる始末。中身を見る中身!! 身長という外面を気にしてるのはお前じやい! だつて?!

「... 勘の良いガキは嫌いだよ」

「何処の錬金術士だお前は」

思わず口に出していた。

「まあ確かに小せーよな」

「うっさいな。人の倍は飯食べてるのになあ」

飯を食うのは好きだ。白米も良いし、麺なんか特に好きだ。肉も魚も良く食べる。正直弁当一個なんかじゃ全然足りない。パンとかおにぎりとかを売店で買ってきてモシヤモシヤ食べ、必ず買う牛乳を飲みお昼を食べ終わる。

「...」

だから、一杯食べてる俺がでかくならないのに、全然食べてない人がでかいのは、何か納得いかないというかなんというか... ”彼女”は別だが。

「... 今日もパン一個、か」

いくら女子高生でもそれは少ないだろう。お腹減んないのかな?

それに一口一口が小さい...。それでも手はあまり大きくない。開く口だってほんの僅か。ちぎったパンをゆっくり静かに口に含む。その仕草が嫌に扇情的で、気恥ずかしくなり目を逸らす。

「... どした?」

「何でも」

最近、自分でもよく分からない事をするようになった。

「... あっ」

彼女はパンを食べ終わり、静かに席を立つ。

「えっ…う…」

伸ばしかけた手を引っ込める。開きかけた口を閉じる。紡ごうとした言葉を切る。

最近、僕はどうしても…彼女に近づきたいらしい。

「… くんくん?? お前今… 太刀川見てたのか?」

「うええっ!? そ、そんな事ない… よ」

「ほほーん? … 太刀川って、何かこう… 謎だよな。背たつかいし、暗いし、何考えてんのか分かんないし… 何か怖い」

多分、クラスの皆がそう思ってるだろう。実際そうだと思うし、そういうとこしか見たこと無いからそうなってしまっても仕方ない。だけど

「… そうやって決めつけるのは、好きじゃないな」

「ん? 何かいった?」

「いや、別に」

決めつけられて傷つくのは、自分もよく知ってる。何も知らないのに、何かを自分で知ったわけじゃないのに、決めつけて、遠ざけて、傷つけて… そうやって、涙を流した人を知っている。

「何しろ、やっぱさ… 女ってアレだよな。うちのクラスは直接的にじゃねえけど…」

「… ほんと、嫌だよな」

自分達とは違うから、だから排除しようとする。自分達の縄張りから遠ざけようとする。それだけならまだ救いようはあるけど、頭悪い人は攻撃しようとするのだから質が悪い。頭の悪い人は、自分達が頂点だと思っっているから、下だと決めつけた奴を攻撃出来る。自分が、底辺だという事も知らずに。

「… ご馳走様。僕プリント出してくるね」

「おう、行ってらっしゃい」

これは、同情なのかな? 可哀想だと思ったから? やっぱり自分じゃ分からない。けれど、これだけは言える。僕は… 彼女を救いたいのだ。

今日も学校か。めんどくさいな。晴れなのに、異様に暗く感じる。自分が、他の子と違うのは分かっている。そして、一緒になれない事も。自分と彼女達には、大きな隔たりがあつて、どう頑張つてもそれを越えられない事を、私は知っている。

だけど、何故か彼女達は平然と、その壁を壊そうとしてくる。こんな私なんか気にしてないで、楽しくお喋りしてればいいのに。そっちの方が、よっぽど楽しいと思う。若しくは、暇なのかな？

直接的な、所謂イジメという物はまだやられていないけど、机に座っていると感じる、嫌な視線。それが嫌で、ただでさえ丸まっている私の背は、さらに小さくなる。

「…早く終わんないかな…」

もう、自分の身体は何度も恨んだ。恨んで恨んで恨みきつた。この身体が無ければ、私は普通になれていたのかな？ まあ、自分の性格がこんなだから、例え普通の身長でも変わらなかつたかもしれないけど。

お昼を食べ終わり、屋上の鍵を開けて外に出る。バックから、ブツクカバーが被せられた小説を取りだし、目を通す。この時、この瞬間だけは、嫌な事を忘れられる。今だけは、明るい太陽の光を素直に受けられる気がする。心地よい風は、私の汚れを流していくようで、そして、目の前に広がる本の世界は、私の世界を、ちよつとだけ明るくしてくれる気がした。

私の救いは、これだけなんだと思つてた。

「… あ、いたいた」

この時まででは。

「えっ…」

「こんにちは太刀川さん。今日は… えっと… 良い天気だね」

くらくらするくらい、眩しい笑顔を向ける、王子様が現れるまでは。そんなのはおとぎ話で、王子様なんていうのは、夢の世界にしかないな  
いと思つていたから。

みずぼらしい私に手を差しのべてくれた、私の王子様。

「えと、僕の事分かる？ 安藤 圭。同じクラスなんだけど…」

「あう… し、知つてます！ 安藤君、安藤君、ね…」

この時は、まさか彼が王子様だなんて、思つてもいなかつたけど。  
ああ、家族以外の人とお話するのなんて久しぶりだなあ。声変じや  
ないかな？ ちゃんとお話出来てるかな…。

「良かった。あの、太刀川さんつて美術の担当委員だつたよね？」

「そ、そうですけど…」

「僕、芸術教科美術だから、作品の構成プリント書こうと思つてたんだ  
けど… 全然良いのが決まらなくて。相談出来る人が太刀川さんく  
らいしかいなくてさ」

「な、何で… 私…？」

「… ええつとおお… ほら!? 僕の男友達つてアレな奴ばかりだ  
し、女子の友達なんていないし… だから…」

慌てて説明する彼をみて、くすつと笑いが溢れてしまう… 可愛  
い…。

「… 良い、ですよ？ 私で良ければ…」

「ほんと？ やつた!!」

… によくよく考えてみれば、こんなに近くに男の子がいるなん  
て… 初めて…？

それを理解した瞬間、身体中が熱を帯びる。特に顔、耳。口はせわ  
しなくはわはわと動き、手なんか扇風機かつてくらいぶんぶん回して

る。

こんな胸のドキドキ、久しぶり。全然仲良しでも無いし、ちゃんと喋ったのなんて、初めてかもしれない。

でも

「ここは、いっぱい色使った方が、良い、かも」

「そうなの？ 出来るかな…」

「色重ねてみたり、薄く伸ばしてみたりすると、綺麗に見えるから、簡単だと思うよ」

「… うん、やってみる」

彼との間に、壁は無くて

「凄いね太刀川さん、めっちゃくちや進んだよ！ やっぱ頼んで良かったあ」

「そ、そんな… 事ないよ… えへ…」

最初は怖くて敬語だったけど、話しているうちに普通になって

「そう言えば太刀川さんって、いつも本読んでるけど、どんなの読んでいるの？」

「へっ!? あ、えと… れ、恋愛小説とか、推理小説とか…」

触れて欲しくないところには踏み込まず、そっと心に寄り添うように

「へえー… 意外だな。推理小説読むんだ」

「うん… まあ、あまり推理とか、よく分かんないんだけどね」

「それ読んでる意味くないっ!？」

私の話を、とても楽しそうに聞いてくれて。それだけで、心がぽかぽか暖かくなってくる。

ああ、優しいね、安藤君。

「… よーっし、これで良いかな？」

「うん。後は… 授業で完成させるだけ、だね」

「そうだね。ありがとう太刀川さん！ お陰で上手く出来そうだよ」

「お役に立てて良かった…」

だれかの為にとって、初めてかもしれない。ずっと、周りには誰もいなかったから。それがとても嬉しくて、楽しくて。誰かと一緒に喋

りすることが、誰かと一緒に笑うことが、こんなに楽しいなんてしかなかった。

ありがとう、安藤君。

「じゃあこれ先生に提出してくるね。」また、太刀川さん

「えっ… あ、はい。また…」

ドアを開けて飛び出して行く安藤君。

もう少し一緒に居たかったなんて、鳥濱がましいだろうか。

もう少し一緒に笑っていたかったなんて、私には相応しくないだろうか。

でも、そう思ってしまったのだからしょうがない。この気持ちは、私の心に閉まっておく事にする。

大事に、大事に。いつか、そう言えると良いな。

「… 緊張したなあ…」

私の胸は、まだとくん、とくとんと早鐘を打ったままだった。

「緊張したあ…」

まさかあんなに緊張するとは。笑顔がひきつらないか心配だった。

小さな口から漏れ出る声は、小鳥の囀りのように美しく。

長い前髪で見えにくかった瞳は、何よりも綺麗で。

時折見せた優しい笑顔は… 僕の瞼に焼き付いて離れない。

「… やっぱ… 心臓やばいよ…」

どうやら、僕はどうしようもない程、強烈な恋をしてしまったらしい。

「… おっ、やっと戻ってきたか」

「うん。美術のプリントに手こずってね」

顔は赤くないだろうか。変なにやけ顔になってないだろうか。さっきの事が頭から離れない。

「なんだ、嬉しすぎる事があってそれを隠そうとするけど顔に出てしまっているか心配でにやけ顔と赤面してないか確認するような顔をして」

「お前勘良すぎねえ!？」

ガキとかそういうのじゃなくてそれも超能力者の領域だぞ……。ていうかそんな顔に出てたんだ……。

「はっはっは……。まあ頑張れよ、周りの目線なんか気にせずさ」

「……勘の良いガキって、ほんと嫌いになるんだね」

「言うて結構ばれだつたぞ？ 大抵目で追ってるわ、さっきの話で微妙な顔してたしな。まあ趣味は理解出来ねえけど」

「うっさいな」

赤面が止まらない。くっそ腹立つ。

「でも……頑張れよ。俺はマジで応援してるぜ？」

ウインクをしながら、グットサインを送ってくる親友。うっさいなうっさいな……。ありがとな。

「……上手くいくと良いな」

「どうだろうな。人と積極的に関わらないし、でも……ちゃんと女の子だと思っぜ」

「僕もそう思うよ」

彼女は、他の女の子と全然変わらない。恋愛小説が好きで、推理小説も好きで。絵を描くときは楽しそうで、時々見せる笑顔は、とても可愛らしくて。

どうしようもなく、好きになってしまった。

「クラスの奴らには根回ししとく……。別に悪い奴ばっかじゃねえさ。それに少人数と仲良く出来れば、何も問題ねえと思うし」

「だよね……。喜んでくれると良いけど」

これが余計なお世話だったのは重々承知。他人に何かしようとして、それが相手の望んで無いことだとしても。彼女には、笑っていて

もらいたい。

「うし… じゃあ始めるか。名付けて、「太刀川さんと皆を仲良くさせて、あわよくば安藤君付き合っちゃおう作戦」!!!」

「恥ずかしいから止めろよバカ!!!」

ほんっつとにうっさいなこいつ!!!

「… やつと終わった」

お昼休みが終わってから長かった… 楽しい時間は、本当に過ぎるのが早いんだな。本を読んでも、あんなに早いと感じた事は無いのにお陰で授業がとて長く感じてしまう… 安藤君は酷い人だ。

今日は部活も無いし、本屋さんに寄って帰ろうかな。

安藤君は本とか読んだりするのかな。漫画の話はよくしていたけど。どんなのが好きなんだろう。

一緒に、本を選べたら。一緒に、本を読めたら。どんなに楽しんだろうか。それこそ、一瞬で時間が過ぎてしまうかもしれない。そんな、幸せな時間を一緒に過ごせたら。

… 何を考えているのだろう、私は。そんなの高望みじゃない。私と違って、いっぱい友達がいるし、いっぱい笑ってる。私とは、住んでる世界が違う。だから、少しでもいい。ちよつとだけ、私と接してくれれば、それで、私は…

本当に、そう？

私は、それだけで良いの？

そんなわけ、ないじゃない。だって、だって… 私は…

「太刀川さん!!」

「ひゃい!」

びびびびつくりした…いきなり声を掛けられるなんて…。

「ご、ごめん!? そんなに驚くとは…。」

「え、あの、すみません! 何か、御用でひよ… しょうか…?」

話かけてきたのは… クラスメイトの、確か土屋さん… 快活そうな元気な人だ。

「あはは、何そんな慌ててんの? 可愛いね」

「か、かわ…。」

「あはは!! 照れてる照れてる!! あのね、今日遊びに行こうと思つててき、太刀川さんも来ない?」

「え…?」

何で、私を…?

「あの、えと…。」

「大丈夫大丈夫!! そんな人数多くないし、てか女子は私だけだしね。それに…。」

ニヤーつと悪い笑みを向ける… 何でそんな顔も可愛いんだろ…。

「… 安藤、来るよ?」

「… つ!!!」

安藤君… が…?

「それに、実は誘つてつて安藤にお願いされたんだよねー? … 大丈夫だよ。私、太刀川さんと仲良くなりたいな」

… そんな、優しい笑顔は卑怯だなあ。なんで… 私に優しくするの… こんなの、断れるわけない。

「… 分かり、ました」

「ん!! じゃあ決まりい!!」

「あの…。」

「え?」

「…ありがとうございます、誘ってくれて…」

「… た、太刀川さんめつちやええ子やん!!!」

行きなり抱きついてくる。え、ちよ、凄く良い匂い、柔らかい…のぼせ…

「… 何でそんな引っ付いてんの」

「この子私の妹にするから」

「血縁、無いです」「汚い」

… あ、安藤君と… あれ… この人誰だっけ、同じクラスなんだけど… 名前覚えてないや。

「来てくれてありがとね、太刀川さん」

「い、いえ… 私も… こういうことに誘って貰えるの、初めてだから…」

今も、気が動転してしまいそうなくらい、嬉しい。安藤君とあの時お話出来たから、今一緒に居られる。それが、とても幸せな事に感じる。

HRが終わり、学校の昇降口。そこには、困った笑顔をしている安藤君と、… えと… 安藤君のお友達B君が待っていてくれた。

「よしそれじゃあ行こう!!」

「場所決めてないでしょ」

「う? うー… スポツチャとかあれだから、普通にデパートとか行こっか」

「うん。二人もいい?」

「俺はいいぞー」

「私は、どこでも…」

「じゃあ決まりい!!」

「これとか絶対似合うでしょほら!!」

「いや、私そういう服はあの…!?」

「だめだね絶対似合う絶対着させるから」

「こ、怖い…!!!」

「女子って怖いね」

「いやあれは土屋に限るだろ」

「本が苦手なら… こういう短編集とか読みやすいですよ？」

「… 眠くなりそう」

「本を読んでから眠るって、結構安眠出来るんですよ? … オススメです」

「ホント!?」

「じゃあ読んでみよっかなあー♪」

「太刀川さんって本の事になると結構喋るな。意外だ」

「… 僕も行く」

「じゃあチョコパフェとカフェオレとバナナケーキとー」

「食べ過ぎでしょ…」

「んー? ふっふっふ… 太刀川ちゃんにアーンするためだね!!」

「ふえっ!? あ、アーン!」

「覚悟してね太刀川ちゃん!」

「… 疲れた…」

なんと言うか… 怒涛？ 短い時間で色々な所に行ったから、余計疲れた… 何であんなに元気なんだろ、土屋さん… 私なんかといて、楽しいのかな…？ でも、あんな楽しそうな笑顔… 見ていても心がぽかぽかする。楽しんでくれているなら、嬉しい…。

「大丈夫？ 太刀川さん」

「… あ、安藤君。えへ、大丈夫です… ちょっと疲れちゃって」

「ごめんね、土屋が… でも、あいついつもはあんなじゃないよ」

「… そうなんですか？」

「よっぽど太刀川さんを気に入ったぽくてね… 仲良くしてくれるかな？」

「… こんな私で、良いのなら…」

私なんかには、もったいないくらい可愛くて、優しくて、いい人なんだ、土屋さんは。そんな彼女が、私と仲良くしてくれている。人生って、分からないものだ。

「… 人と違う事って、辛い事だよね」

「… え？」

「太刀川さん、自分を卑下し過ぎだよ… 僕は、太刀川さんに笑顔でいてもらいたいんだ」

「… だって、私は…」

ずっと、心の奥底に沈めていた感情が、溢れだす。

「他の子より背が高く、ずっと馬鹿にされ続けたんです… それに暗いから、不気味がられるし… そんな私と、皆さんは…」

涙が溢れだす。嗚咽が漏れて、言葉にならない声が出る。

「…好きなんだ、太刀川さんのこと」

信じられない言葉が、耳に届く。

そんなのは夢物語で、私なんかにはありえなくて。

高望みだと、烏滸がましいと思っていた、その言葉。

「…僕も、周りと比べて背が低くてさ。よく馬鹿にされたよ…でも、僕は恵まれた。えっと、あいつ…坂本とか、あと土屋とか…そんな、見かけだけで人を見ない人に、僕は恵まれたんだ」

「…安藤、君…」

「だから、背が高いとか、そんな事は」太刀川さんには関係ないよ。僕は…太刀川さんが好きだ」

「だから…僕と、付き合ってください!!!」

顔を真っ赤にしながら、手を震わせながら。それでも必死に言葉を紡ぐ。

そこに嘘偽りはなく、そこにあるのは、ただ真っ直ぐな、純粋な気持ち。

「…私、暗くて、人とあまり話せないし…」

「僕と一緒にいてくれれば、それで良いよ」

「…背が高くて、不気味で、怖くて…」

「全然だよ…というか、僕はその…可愛いつて思うし」

「っ…嘘、ついてませんか？」

「嘘なんかつかないよ。絶対に。僕は、太刀川さんが好きだ」

「じゃあ…強く、抱きしめられますか？」

「…は、恥ずかしいけど…はい」

小柄な身体が、強く、きつく、私の身体を抱きしめる。

「…私も…私も…好き、なんです…!!」

もう、止まらない。止められない。好きだって気持ちだが、溢れて止まらない。

「好き、です…安藤君…好き…好き…」

「うん。僕もだよ」

「もう離さないでください…いや、私が離しませんから…後悔しても、知りませんよ?」

「するもんか。だって…今こんなに幸せなんだから」

---

「…あ、おはよう太刀川さん」

「はひゃい!? お、おはようございます安藤君…!!」

「え、えと…改めて…あは、恥ずかしいね…」

「そ、そうですね…」

「おっつはー太刀川ちゃんーん!!!!」

「うわあつ!! つ、土屋さん!!」

「今日も可愛いなあ太刀川ちゃん!! ぎゅーん!!!」

「わぶ…く、苦しいですう…」

「… よう。良かったな、安藤」

「うん。ありがとね」

「ほとんど何もしてねーっての。… これで、クラスの奴も太刀川に近づきやすくなったろ」

「… 良かった」

「んじや、俺は退散すると思いますかね。土屋は… もうちよつとああさせてやれ」

「… うん」

世界が変わるって、多分こういう事。

私は、全然何も出来ていないけど、これから、恩返ししたいな。

私の世界を変えてくれた、私の… 大好きな王子様に。

何が、出来るかな。私に出来ることは、多分とても少ない。

だけど、精一杯。私に出来ることを、したい。

だから、今は。

「安藤君… 大好き、です…」

大好きって、叫ぶんだ。

ご主人様、愛しています。

こんにちは。皆様お久しぶりです。覚えていらつしやいますでしょうか？ 私です。名前は…もうありません。奴隷だった頃の私と、今の私は…全くの別人になつてしまいました。暗くて、痛くて、苦しかったあの頃では、考えられないくらい、幸せだから。

今は、明るくて、楽しくて…そして、何よりも大切な方がいますので。

箒を掃く手を止めて、赤くなつた頬を撫でる。今の私は、みずぼらしい麻の衣じゃなくて、立派なメイド服をご主人様に頂きました。綺麗な濃紺のワンピースに、真っ白で可愛いフリルのついたエプロン。汚さないように大切に着させてもらっています。

「…良い匂い…」

ご主人様と一緒に匂いがします。柑橘類を使った、とても落ち着く匂い…。この匂いを感じるだけで、心があつたかくなつて、心臓がドキキします。

いけない、ご主人様が帰ってくる前に、お掃除とお料理とお洗濯を終わらせておかないと。

私、ここに来てからいっぱいお勉強しました。お掃除の仕方、お料理の仕方、お洗濯の仕方。どれも最初は全然出来なくて。お皿は割つちやうし、調味料の量は間違うし、汚れは全然取れないし。

でも、ご主人様は、少し困つた笑顔をしながら私の頭を撫でてくれました。

だから、そんな優しいご主人様に恩返しがしたくて、いっぱい頑張りました。私に出来ることは、それくらいしかないから。

「…あれ？」

玄関から足音が。この音は…ご主人様…？

「そ、そんな…予定の時間より早いじゃないですかあ…!!」

あうう…私の完璧な計画があ…

そんな事を思つても、足は浮き足立つ。頬が熱くなり、心臓は早鐘を打つ。それでも、嬉しきで心がいっぱいになる。

だって、大好きな人に会えるんだから。

「ただいまー？」

「お帰りなさいませ、ご主人様」

「うん、ただいま。」 ティナ」

あ、言い忘れておりました。私、名前はないと言っていました。つい最近、名前をいただいたんです。大好きな、ご主人様に。私を、この名前で呼びたいと。

だから、今の私はティナ。ご主人様の、ティナです。

「随分と予定より早くお戻りになられましたか？？」

「ああいや。商談が弾むように上手くいったね。早く終わったんだ」

「左様でございますか？。申し訳ありません、まだお食事もお風呂の用意も終わっていませんので？」

「謝るのはこっちの方さ。連絡出来なくて悪かったね」

にこーつと優しい笑顔で頭を撫でてくれるご主人様。撫でやすいようにヘッドドレスは外しております。大きくて、優しい手で撫でられると頬がじんわり赤くなっていきます。

「…じゃあ久しぶりに一緒にやろうか。ティナのお手並みを拝見しよう」

「…え？」

「一緒にご飯作る？」

「…?!?!?!? そ、そんな!? ご主人様の手を煩わせるなんて、ティナは…?!?!?!」

頭を撫でる手を止め、次は大きな手で私の両手を包み込む。心臓がとくとくと高鳴り、顔の熱がより高くなって、ぼーっとしてしまう。ご主人様の手、温かくて、大きくて…優しくて…

「ご主人、様…」

「いつもティナ頑張ってくれてるからね。それに…あれだ。どれだけティナが上手になったか見てみたくてね。そんなに多くやる訳じゃないから、ね？」

「…そ、そういうことでしたら…」

あう… そんな笑顔で言うなんて卑怯です… 逆らえなくなっ  
ちやいます…。まるで、人格全てを掌握されてしまうかのよう  
に…。 やっぱり、私の全てはご主人様の物、なんですね…。

「で、では… 台所に行きましょう… 今日、ミートパスタと… え  
と… 小松菜と玉ねぎのスープ… ですかね」

「良いね。じゃあ行こうか」

「… それでは、ご主人様は火をお願いします。私、まだ上手く出来な  
くて… 火が怖いんです…」

火は、私にとって嫌な思い出しかない。前の領主には火で炙られそ  
うになったし、マッチの火を押し付けられたりもした。あのパチパチ  
という音と、不安になるような熱さは、今でも怖い。

「… そっか。じゃあ俺がやるよ… 大丈夫？」

「は、はい。今は… もう”違う”から。これから克服したいです」

「… テイナは強い子だな」

「そんな… ご主人様のおかげです。ご主人様が、私を変えてくれた  
からです」

ご主人様がいなかったら、こうしてメイド服を着る事も、台所で料  
理する事も、名前も呼ばれる事もなかっただろうから。

「そう言われると、照れるな… うわっちちち!!」

「!! だ、大丈夫ですかご主人様!? お怪我は!?!」

「あ、あはは。大丈夫大丈夫。これじゃあ手際はもうテイナの方がい  
いね」

ご主人様の手が、少し赤くなっていて痛そう… 私が、余計な事を  
言ったから…。

「ご主人様、手を」

「え? はい」

「…ん、ちゅ」  
「…」

私の種族は、回復魔法に優れたエルフという種族らしい。今はもう数が少なく希少なため、奴隷売買される事も多いそう。私もその中の一人だった。

そして、エルフの体液には治癒効果があると、ご主人様から頂いた本に書いてありました。少しご主人様の手を舌で舐めると、赤くなった炎症が消えていく。

「あ、痛くない…」

「…ふはっ。どう、でしょうか？ 痛くありませんか？」

「う、うん… テイナ、積極的になったね…」

「…」  
自分がやった事の恥ずかしさに気づいて、顔が真っ赤になってしまいました。恐らく、軽く湯気でも出てるかと。

「… テイナ、包丁上手くなったね」

「そ、そうですか？ お料理では一番使うので、頑張つて練習しました」

「小松菜はさつとお湯にかけて、ざく切りに… あ、玉ねぎは皮を剥いて四つ切りにしたら、一口大に切っていきまして…」

「… おー…」

「ご主人様は、パスタは固めの方が好きらしいのでさつと茹でますね。ミートソースはホールトマトと塩コショウ… あと保存しておいた干し肉を使いましょう。塩コショウと東洋の珍しい調味料… ショーユ？ と言うのでしょうか。それで漬け込んで保存しておい

たんですよ」

「…何か、すごいなティナ。完全に俺を超えてるよ」

「出来ました!!」

「すげえ美味そう…」

我ながら上手く出来たのではないのでしょうか？ ご主人様と一緒にやったから、少し舞い上がっているのかもしれませんが。固めに茹でたパスタに、干し肉を加えたミートソース。小松菜と玉ねぎ、余った干し肉を使ったコンソメスープ。そして、ご主人様の大好きな葡萄を使ったエール。エールというのは、ビールに近いワイン、でしょうか。果物とアルコールを使って醸造した、ご主人様の知り合いの商人さんから頂いた美味しいお酒です。

「ど、どうでしょうか？」

「…もう台所はティナに任せとけば間違いないね」

「…！ほんとですか!! 嬉しいです…」

褒められただけで、頬が緩んでしまう。にへらあつと弛む頬を両手で抑えて、真っ赤っ赤な頬を隠す。

「美味しい… 凄いやティナ。良いお嫁さんになりそうだ」

「へっ?!?」

お、お嫁さん!! お嫁さんって…

お嫁さん…か。奴隷だった頃、領主の娘さん結婚式を見たことがある。真っ白いドレスを着て、両手一杯の花を持って、幸せそうな笑顔で…私とは、真逆の存在で、眩しすぎる世界。

自分には見れない夢、自分には相応しくない場所。考えるだけで罪になるような、許されない事だった。

でも、それでも憧れるのです。大好きな人と結ばれる事が、どれだけ素晴らしい事か。大好きな人と一緒にいるだけでこんなにも幸せなのに、結婚なんてしたら、きっと私は幸せで死んでしまう。

「…そんな、私には勿体ないです… お嫁さん、なんて」

「…ティナ」

「？ つ、ふあい!？」

いきなりご主人様に両方の頬つぺたを摘ままれる。

「… また昔の事考えたね？」

「… ふあい…」

「いいかい？ 君はティナ。奴隷だったあの頃は違う、君なんだ。夢を見たって良い、叶えたって誰も文句は言わないさ。君は自由だ… 本当は、誰にでもあるべき権利だ」

ご主人様は、辛い顔をする。ご主人様は、奴隷が嫌いだ。奴隷だって、種族は違えど同じ生きている存在。それを使役し、過酷な労働や辛い待遇を課す事を許せない。

こんな顔を、ご主人様にさせてしまうなんて。私は、メイド失格だ。

「… ごひゅひんひやま… てふお…」

「… え？ あーすまん」

「ふへっ… ご主人様、申し訳ありません… 分かってはいるはずなんです。私は、奴隷じゃなくて… ご主人様のメイドだと。分かってはいるはずなんです… でも」

今でも、時々夢に見る。あの頃… 奴隷だった時の夢。

「… 今でも、怖いんです。これは、全て夢で… 私の、都合の良い妄想なんだって考えが、止められないんです。そうじゃなくても… つか、この幸せが消えてなくなってしまうんじゃないかって…」

奴隷である自分が、こんな幸せで良いはずがない。根底に根付く、奴隷としての自分が消え去らない。

「だから… 幸せになり過ぎると… つか後悔して… 死ぬんだと思います」

その時、自分は命を絶つだろう。こんな… 大好きなご主人様と一緒にいられる時間が消え去ってしまうのなら、命なんていらんから。

「… 俺は、後悔していない」

「… え？」

「お前を、救った事だ。俺は… お前と、ティナと一緒にいられて幸せだ。自分が、今まで一番幸福の中にいると思う。勿論これからもだ。

お前と一緒にいるだけで、幸せだ。こうして一緒にご飯を食べる時も、話す時も、仕事をしている時だって…… ティナの事ずっと考えてる」

私の両肩を掴んで、真っ直ぐ私を見る。その瞳は、何よりも真っ直ぐで。少し赤くなっている頬が可愛らしい。

ああ、やつぱり…… 私は……

「仕事だって、ティナに料理を作って貰えるって思えるから頑張れる。ティナが家で待っているから帰ってこれる。ティナに好きな物買ってあげられるから金だって稼げる…… 全部ティナのためだ。だから…… そんな悲しい事言わないでくれ。頑張ってる俺が馬鹿みたいじゃないか」

少し涙声になりながら、私をぎゅーっと抱き締められます。暖かくて、優しく…… とっても、嬉しい。天に昇るくらい。こんな素敵な人が、私を一心に思ってくれているなんて。本当に…… 私には勿体ない幸せ。

だけど、今の私が自由なら。今の私が、幸せで良いのなら…… 一つだけ、一つだけ叶えたい願いがあ。それは、さっきまで自分には相応しくない、自分は願ってはいけないと思っていた夢。

それを叶えてくれる人が、許してくださったのなら…… 私は、自分に正直になれる。

ご主人様の背中に手を回して、抱き締める。

「…… 私、は…… 一つだけ、叶えたい夢が出来ました」

「言っでごらん。俺が全部叶えてやる」

「…… 真っ白なドレスを着て、美味しいお料理とお酒と…… ご主人様のご友人達に囲まれて…… ご主人様と、結婚式をあげたいです。ご主人様の…… お嫁さんになりたいです」

私の、奥底にあった願い。それはきつと、もつと昔からあって、ずっとずっと押し込んできた願い。

「大好きなご主人様の…… 奥さんになりたいです。メイドじゃなくて、妻になりたいです。ご主人様の家族になりたいんです。私は…… ご主人様を愛しています…… 自分には烏澁がましい願いなのは分

かっているんです。ご主人様は素敵で、かつこよくて、優しくて……こんな私より相応しい人が沢山いるはずです」

少し、胸が痛くなる。自分は、他の人より劣っていて、ご主人様は何処かの貴族の令嬢とか、街で一番人気の女性とか……相応しい人が沢山いる事実が、私の胸を締め付ける。

許せない。そんな女性が全て滅べば良いとさえ思う。憎い、恨めしい……悔しい。

「でも、でも……それでも、私を選んでほしい、です。私が、ご主人様を一杯知っています。ご主人様の好きな料理、お酒、本、音楽、絵画や景色……全部、知ってます」

だからこそ、ご主人様に相応しい女性になろうと努力した。私は何もかもが足りなくて、劣っているから、誰よりもご主人様のために努力した。ご主人様を一番知っているのは私で、一番愛しているのは、私。

「大好きな人と、結ばれる事は……私にとって何よりも幸せで……何よりも譲れないんです……だから……ご主人様のお嫁さんになりたいです……!!!」

私の、全てはご主人様の物。ご主人様のおかげで、私は今ここにいます。ならば、この生は全てご主人様に捧げ、この身体は、ご主人様のためにある。

「……ティナ」

「……は、ん……」

いきなり、ご主人様の顔が目の前にあった。と思ったら、いきなり唇を塞がれる。柔らかい感触が唇にあたり、少し経ってから、それがキスだという事に気づく。

「……良いんだな？　俺で」

「っはあ……はい……私には……ティナには、ご主人様しかいません……」

「……俺もだ。俺も、ティナしかいない。俺が世界で一番愛している

のは、ティナだ。でも、ティナは自由になりべきだと思った。俺に縛られず、自由に生きるべきだと思ったから。でも……お前がそう望むなら……俺も、もう我慢しない」

再び唇が塞がれる。先ほどよりも深く、強く……それでいて優しく。

「二目見た時……運命だと思った。救わなければいけないと思った。……全て、俺の物にしたいと思った。君と暮らせたらどんなに幸せか、ってね。下心丸出しだったよ。君は、奴隷だった時でさえ、誰よりも美しかったんだ。それを今……全て手に入れられる……。俺だって、幸せだ。幸せ過ぎて……おかしくなりそうなくらい」

「結婚しよう、ティナ。君の全てを、俺が貰う」

「……はい……私の、ティナの全てを……ご主人様に捧げます……」

「かーっ！ 旦那最近見ないと思っていたら、まさかこんなべっぴんさんを嫁に貰うなんてねえ!!」

「はは、すみませんね……。ティナ、お世話になっている商人さんだ」

「はははは、初めまして!! 私、えと……ティナと、申します……。この度は、”式”に来てくださって……」

「はっはっは!! 何の何の!! 旦那のためなら何処にだって飛んでい

きやすよ!! それにしたってええ娘さんですなあ…。こりやあ、アレの方も捗るでしょうなあ」

「あ、アレ…。？」

「さあーティナ次のお客さんだ!! 行くぞ行くぞお!!!」

「… 旦那、良かったですなあ…。 あっしも、頑張ったかいがありやした」

「ねえ聞いた？ この領主、馬車が崖崩れに巻き込まれて…」

「聞いた聞いた。それで財産の全てが領民に分け与えられるって…」

「そうそう。そして…。 あんなにいた奴隷が、全部施設に引き取られたって。ほら、今日来てるあのメイド服やら作業着着てる連中。何でも今ここに来てる商人や貴族が資金を出しあつたってねえ。世の中捨てたもんじゃないね」

「はあ…。 流石、こんなでっかいパーティーを開くご主人様は格が違うわ」

「旦那、あんたが見たかったのは、これだったんですねえ…」

「… ティナ、手を」

「はい、”あなた”…。 やっぱり、少し恥ずかしい、ですね」

「はは…。 俺だつて緊張してるさ。まさか新領主決定と結婚式が重なるなんてね」

「… あなた、やっぱり…。 凄い人です。私が、まさか領主夫人になつちやうなんて…」

「… 夢、叶えてやれて良かったよ。そして… 俺の夢も叶った」

「じゃあ、行こうティナ」

「皆様!! 今日はお集まりいただきありがとうございます。今日は… 私の領主着任式並びに、結婚式に出席してくださいまして、改めて感謝を申し上げます。さあ、ティナ」

「はひゃい!! え、えと… 領主夫人となりました、ティナと申します…」

「… 私は、奴隷の解放を目標に日々生きてきました。それを、今日この日に達成出来た事、嬉しく思います。これから… 領主として、この領土を任された身として、皆さんを失望させないよう、日々努力していきます… ティナ、俺は、いついかなる時も、苦しくて、辛い日も、健やかなる日も、君を愛し、君と共にいる事を誓う。だから… 俺と結婚してください」

「… はい。私… 今、幸せです… あなた… !!!」

奴隷の少女と、商人の青年が紡ぐ、幸せの物語。

それは、何よりも幸せな1ページで綴られる。

これから始まるのは、家族になった、幸せのその先の物語。

この先もずっと、その幸せが続きますように。

「あなた…愛しています…!!」

ずっと、少女の笑顔が、幸せに包まれていますように。

## ちよつと昔の話。

こうやって、出会いとか別れとか。春とか桜だとか。今まで一緒だった人との別れ、新たな人との出会いの季節が近づいて来ると、俺はどちらかと言うと、別れのイメージが強い。

その別れがあまりにも衝撃的であり、自分の人生に影響が出るくらい驚きが起こったから、それは仕方のない事かも知れないな。まあ簡単に言うのと、付き合っていた彼女と別れたのだ。あまりにもあつさり。そして…

「…は？ 何死んでんの？」

「…すみません…」

今は、一緒にゲームをする仲になっている。

「うつわC取られたじゃん… あー負けだ負け。回線ぶちーっ」

「いや、何でお前Cいねえんだよ！ 残り一分はC守るだろ普通!!」

「あんだタンクじゃん!! ジャンヌ使って連続で死ぬとか馬鹿なの死ぬの？」

「あんなテスラコイル上手いだなんて思うかよ!! 一回死んで蘇生したら逃げらんねーんだよ!!」

別れたとは思えない会話をする仲だ。正直言って付き合った頃より仲良いとさえ思う。ほら、喧嘩するほど仲が良いって言うじゃん？

え、言わない？ さよですか…

でもまあ、距離は離れたり近づいたりする事は無くなった。何か、一定の距離を保つようになったと思う。俺とこいつには何か… 見えない壁があつて、それにどちらも気づいてて、それに触れないでいるかのよう。そんな距離感がある。こいつには、ここまで近づいていい。だけど、これ以上行ったら… 何か壊れる。そんな予感がする。

「ちっ、またS4のままか… こりゃああたしがルチ使うしかない？」

「そうだなー… そろそろ他のやろうぜ。シャドバとか」

「超越バース（笑）」

「うつせえ今度こそ俺の援護射撃ロイヤルでぶっ飛ばす」  
「それ絶対勝てないと思うんだけど…」

彼女は俗に言うゲーマー。現実には居るのか、という疑問を持つ人も多いと思うが、まさに目の前にいるのだからそうだとしか言えない。実際、彼女のゲームの幅は広く、のめり込む量は深い。

CODやBF等のFPSを始め、最近はPUBG等のTPSもやる。シャドバやバトスピ等のTCGもやるし、なんならスマブラは俺より強い。暇があつたら#コンパスでポイント稼ぎに勤しみ、FGOでは周回で毎回

「ステラアッ!!!」

って言いながら周回してる。何？ それあんたも死んでんの？

そんでもって性格は最悪。ずぼらでぶつきらぼうでがさつ。正直こいつ男かっついてくらしい性格は女性らしくない。料理は出来ないし掃除は俺に任せつきりだし。俺も得意じゃないけど。

そんなだから… まあ友達は少ない。しかも男嫌いとか来たもんだからゲーム仲間さえ出来やしない。ネットを通じた画面の向こう側の友達を愛し、その友達とチャットする時は、年相応の無邪気な笑顔を見せる。

… まあその笑顔が可愛い。見た目は確かに良い方だ。ぼさぼさの髪を直して化粧くらいすれば男は釣れるだろう。それくらい見た目は整い、見せる笑顔は人を魅了する。

だからこそ、外見でのみ判断する人に巻き込まれ、人を嫌いになった。近づいてくる者は敵とみなし、決して気を許したりしない。

じゃあ何で俺はこうして近づけてるかと言うと… まあそれは小説のような物語だ。

最初はあるネットゲームだった。初めてパソコンを手に入れ、ネットゲという物の素晴らしさを実感した俺は、まーそれにのめり込んでいった。寝る間を惜しみ、モンスターの行動原理や、リキャストタイムやらの検証につき込んでいった。

そんな時、あるギルドに出会った。人数はあまり多くなくて、のんびりまったりとした正にエンジヨイ勢といった感じ。俺はレイド…：あーっと、大きな戦闘に参加したりするガチ勢側だったんだけどな。そのギルドメンバーは、とにかく装備が凄かった。歴戦の戦士達といった豪華絢爛の防具や武器。何でそんな人達がエンジヨイ勢なのかは甚だ疑問だった。

まあそれは、引退間近だったからだそう。そこに突然俺が入ってきちゃったってわけだ。

「…残るのは五人だけ、か」

その中でも、残る奴は残るそうで。俺を含め六人がそのギルドに残る事になった。

正直、今人数の少ないところにいる理由はないし、なんならスカウトやら掲示板やらで傭兵をやるのも悪くない。だが

『知ってる人とやる方が楽しい』

そいつの声が聞こえた。

『ていうか“あたしら”はガチ勢復帰するし。あんな凄い人達の中にいたんだから、まあ強いし。残ってかない？』

彼女は寂しがりやだった。自分から人を遠ざけ、人に近づいていこうとしない彼女は、一度仲良くなつた人、一度近づいてしまった人に対しては酷く脆かった。自分の心に触れた人には、絶対の信頼と友情を押し付ける奴だった。

実際、彼らが抜ける時、涙しながら感謝を伝え、ギルドマスターの座を受け取っていた。ゲームにそこまで真剣に…いや、会った事も

ない、見たこともない人達にそこまで真剣になれる彼女に、俺はどこか感動を覚えていたのだろう。

いつしか、彼女は…誰よりも信頼出来る相手になっていった。

『…ねえ』

「ん、どーした」

月日が経ち、ギルドメンバーも増えちゃんとしたガチ勢に復帰した彼女は、休日は日夜深夜まで潜り、ギルドメンバーの誰よりも貢献していた。正直その集中力には、恐怖を感じる程に。

『…あんたの声、どっかで聞いた事あんだよね』

「え？ まじ？ 気のせいじゃね？」

『…始業式いつ？』

「んーっと、明後日だな」

『…あたしも。じゃあ住んでるところは？』

「そんな簡単に…まあ良いけど。——だ」

『…近いな…ねえ、まさかあんだ…——中？』

こんな偶然が、あるのかと。俺達二人は深夜だというのに大声で笑った。そう、まさかの。彼女と俺は同じ中学だった。しかも、一年の時同じクラス。本当に驚いた。こんな近くにいるだなんて思わなかったから。

それからというものの、彼女と俺の距離が近づくのにそう時間は掛からなかった。部活が終わったら一緒に帰り、休み時間はゲームやアニメの話に華を咲かせた。普段全然笑わない彼女が、こんなにも綺麗な笑顔をしているのだから、驚いている奴等もちらほらいた。

俺の目に、彼女は眩しく映った。誰よりも人生を自由に謳歌し、誰よりも人を好きになっていく彼女は、正しく太陽のようだった。まあその自由は狭く、好きになった人は数える程しかないけど。

「… お疲れ様」

「… おう」

中体連は見事惨敗。それなりに努力と時間を費やしていたから、それが一瞬で崩れ去った時は涙が溢れた。届かなかった悔しさと共に流れる涙は、俺の足元に数滴垂れていった。

それを彼女は、黙って、静かに、俺の頭を撫でてくれていた。その時の顔はよく分からなかったけど、優しい声音と手つきから、少し微笑んでいてくれる事は感じていた。

多分この時、俺は彼女を好きになったんだと思う。あまりにも唐突で、いきなりだったけど。それは俺の心にすーっと入ってきて、染み渡っていった。

「… なあ」

「ん？」

「俺さ… お前の事好きみたいだわ」

「それで？」

「それでって… 相変わらずだな。まああれだ… 付き合ってくれね？」

「良いよ」

「随分とあっさりだな…」

告白ってこんなあっさりで良いのかと思わず笑ってしまった。

「まああんたがあたしの事好きだなんて分かってたことだし」

「はあ!？」

「… あたしは、恋人とか良く分かんない。てかりア充は嫌い」

「正しくお前が今そうなんだけど」

「だから、普通のリア充にはならない。あんな奴等と一緒にされてたまるかっての」

それからというもの、彼女と俺はあまりにも特殊なりア充生活を送っていた。

「… 何で外側撮るの」

「だってリア充は自分側撮るじゃん。じゃああたしは外側撮る…。あんと見た景色を撮るよ」

時々良い台詞を吐くのが腹立った。

「… は？ あいつらー高来んの？」

「ん？ あーあのカップルね。そういやお前と一緒にだな」

「… 嫌だ」

「は？ 何が？」

「あんなクソリア充と一緒にの高校なんて嫌だ…。あたし勉強する」

「お前馬鹿だろ」

とか言いつつ、彼女は目指していた高校のレベルを一つ上げるまでに勉強し、先生を驚かせていたのを覚えている。

「… まあ、お前さ…」

「…」

そして、クリスマス。俺は彼女に覆い被さっていた。いや正確には押し倒した…。まあクリスマスだしね。

「… 何か言えよ」

「キスでも何でもしてみなよ」

「…」

思えば多分ずっと前から、彼女に対して壁を感じていたのだろう。こいつは自分とは違う、対等な立場でいるべきは自分じゃないという劣等感を、俺はずっと感じていた。

それに、彼女は気づいていた。だけど、敢えて何もしなかった。彼女も、その壁を分かっていたから。

その壁を壊す事も、飛び越える事も、俺はしなかった。その距離が、あまりにも素晴らしく、尊い物だったから。俺は彼女を見ているだけで楽しかったし、それで良いと思っていた。それが、彼女にとっては気にくわなかったのだろう。

そしてクリスマス当日、俺はそれを完璧に自覚したのだ。少し手を動かせば届く所に彼女はいる。だけど、俺は指の一本も動かさず、何も出来なかった。ここで、その壁を壊せれば、何か変わっていたのかもしれない。だけでも、その時の俺は、それをすれば彼女との壁は、違う何かになると感じた。

今とならば、こうして文章に出来るから色々わかるけど、その時はただ、動けなかった。壁とか距離とか、そういう事は何も分からなくて、ただただ、俺は彼女に触れる事が出来なかったのだ。

彼女に触れる事、あまつさえ傷つける事は、俺にとつては何よりも重い罪で、許しがたい事だったから。俺は、彼女から離れた。

彼女はただ、空虚な瞳で俺を見つめ続けていた。

「… ねえ、あたしってそんな魅力ない？」

「… そんな事ない。正直又ける」

「それは聞きたくなかったわ…」

「だけど… 何でだろ… な… わがん… な、い…」

ただ、涙が流れた。彼女に触れられない事、踏み込めない事、そして、それを肯定している自分が、ただ情けなかった。嗚咽を漏らし、溢れでる涙を抑える。だけど、いくら拭いても拭いても収まらない。栓が壊れたみたいに、大粒の涙が流れた。

「… はあ、あんたってヘタレだね」

「… うっせえ… よ…」

後ろから抱き締めてくる彼女。彼女は、こんなにも簡単に自分に触れられるというのに。何で俺は…。そう思うと、余計涙が溢れた。

多分だけど。俺だったんだ。壁を作っていたのは。それは誰に対してもで、それが崩れた事は一回も無いのだ。

誰に対しても踏み込まず、入らず、飛び越えず、近づかず。必ず一定の距離を置いて、誰に対しても接する。それが俺。

俺の心は誰も知らず、誰も入り込めない。いや、入り込ませない。

それは、俺しか開けてはいけない扉だから。だから、扉の鍵は、自身が大事に持って、それを誰にも触れさせた事はない。

唯一、自分に近づいてくれた彼女に対しても、自分をさらけ出し、親友となってくれた人にも、家族にだって、誰にも触れさせた事はない。触れてしまえば、壊れてしまうという確信がある。開けられてしまえば、それはその関係の終わりを示すから。だって、自分自身が触れてほしくないから。開けてほしくないから。この心は、自分だけが知っていれば良い。

それを彼女は、理解してくれたのだ。踏み込まず、近づかず、ただ俺を見て全てを理解してくれた。だから

「別れようぜ。あたしらじゃ…。何したって駄目だ」

「… おう」

彼女は、自分から離れてくれた。踏み込み過ぎたから、正しい距離に戻してくれた。俺はただ、その気遣いを嬉しいと思った。同時に、彼女と俺を繋ぐ、恋という糸が切れてしまった事に、深い悲しみも感じた。

「… 泣くなつての。あんた泣いてばっかだな」

「だーっもううっさいの!!」

これは俺の我が儘だ。近づか過ぎたら困るんだ。あまりにもやりづらい。自分の全てを知られると不安で仕方なくなる。彼女がいなくなったら俺はどうなってしまうのか。自分の全てを知り、受け入れてくれた人が居なくなったら？ 考えるだけで恐ろしい。

だから、自分の全ては教えない。ただ、俺という人間を知ってくればそれで良い。彼女は、それを理解したのだ。

「ほれ、バレンタイン」

「毎度毎度凝ってるな…。ごちそうさまです」

「お粗末様…。チョコあげるのも、あんただけだな」

「良い男いねえの？」

「…んー…いない…全部、あんたと比べる。それで全部見劣りする」

「お前ってほんと俺の心揺さぶるよな」

「あつたり前じゃん？ こんなクソゲームアニメオタク男女なんて好きになる奴いねえよ!! あんただけだ!!」

彼女は、あんな別れかたをしたにもかかわらず、以前と同じ笑顔を俺に向ける。それは何よりも眩しくて、輝かしくて、切ない。今すぐにも抱き締めたいってのに、俺の腕はぴくりとも動きやしない。

「…それと、受験頑張ったね。偉いぞ、偉い」

「…ああ。駄目だったけどな」

「でも、あたしはあんたが頑張ってたの知ってるから…それで良いんだよ」

「…おう…」

彼女はきつと、今も昔も変わらない。彼女は彼女なのだ。それは、誰よりも魅力的で、誰よりも眩しい存在。

そんな彼女に、俺は今も、何処かで恋をしているのだろう。

それを、誰にも言った事はない。心の深い深い底に、大事に鍵を掛けて眠らせている。

きつともう、こんな恋をすることはしないのだろう。誰よりも俺に踏み込み、近づいた彼女を、俺は今でも愛しているのだ。そして、それが終わる事はない。

だから、俺は今も、あるはずのない恋を探している。俺の鍵を見つけ、扉を開ける誰かを、ずっと探している。

それがきつと、悲しい思いをさせてしまった彼女への、せめてもの報いになると信じているから。

「ようし… はい超越ーーwww」  
「はあくそ死○このくそ○○○!!!」

昔でも今でも、彼女と俺の距離が縮まった事はない。きっと、これ  
からも。

その甘美なる誘いは、甘くはなく。

「…先輩？」

「あら、黒瀬君。どうしたの？」

「いや…今日は何やってんすか」

ここは『文化部』部室。窓の外からは野球部やらサッカー部やらの掛け声や金属音が鳴り響いている。そういえば…もう最後の夏に差し掛かる頃か。俺がこの部活に入って一年…色々な…いや特にないな。先輩が色々やってただけで俺には何も無いや。

「これ？ 手芸部がやっていたエプロン作りよ」

「…すっげー合わないっすね」

「あら失礼ね」

先輩が針だの鋏だの糸玉だの持ってるのは全然似合わない。いやそれあんたやらせる側だから。あんたがやるのじゃないから。

「私だつて女の子よ？ 裁縫ぐらい出来るようになってないと」

「女の子って…」

「…黒瀬君最近遠慮なしに失礼になってきたわね」

…やべえ軽口が過ぎた。先輩のバックにつく輩に殺されてしまう。親衛隊とか黒服の男達とか。

「まあいいわ…それだけ、距離が近くなったという事だし」

「っ…」

最近先輩がポツリと呟く、独り言のようなもの。ワードだけ聞けば胸が張り裂けそうになるくらい可愛らしく、男心を揺さぶるように聞こえる。

しかし、何故だ。俺は彼女から…恐怖と寒気しか感じない。

「…そ、そうですね？ 流石に失礼過ぎじゃあ…」

「問題無いわ。寧ろもつと言ってくれても良いのよ？」

それは俺がもたねえ。

「…ねえ、黒瀬君？ 汗が酷いわよ？」

「え…」

慌てて額を拭ってみると、手の甲にべつとりと汗がつく。いつのま

にこんなかいてたんだ…？ 先輩の独り言聞いてから…？

「…そのままだと冷えてしまうわ。クーラーも効いてるし」

そう言つて、先輩は胸ポケットからハンカチを取り出す。

「拭いてあげる。いらつしやい？」

どくん。心臓が飛び上がる。

それが、ただ緊張によるものなのか、恐怖によるもののかは判断しかねた。

「い、いや良いっすよこんくらい」

「だつて黒瀬君、ハンカチ持つてないでしょう？」

…!? 何で、知つて…？

「つべこべ言わないの…ほら」

先輩が目の前まで来る。そんな近づかなくて良いと思うくらい。先輩の綺麗な前髪、そこからふわりと香る、柑橘系の清々しくも、甘い香り。そして、造られた物かと思うくらい綺麗な肌と整った顔立ち。美しいという言葉を体現しているかのような…

「…うふふ、顔真っ赤…可愛い」

しかし、その笑顔は。悪魔か死神か。そんな事を思わせるくらいに邪悪を孕んだ、歪んだ笑み。少しでも動けば喰われるくらいいさされてしまいそうな、恐怖を感じさせた。

「せん…ぱ…」

「固まっちゃつて…黒瀬君、やっぱり君…」

あと数センチ。少しでも前に出れば唇と唇が触れあつてしまいうる距離。鼻腔をくすぐる香りはより一層強く、心の底から沸き上がる恐怖は、より強く。

まるでメデューサにでも睨まれたかのように、俺の身体は固まっていた。

「どうもこんちはー!!! って…あら？」

心臓が口から出た。いや出てないけども。突然扉を開ける音とそこから響く元気な声のせいで俺は上へ飛び上がった。前出なく

て良かった…。

「っ… どちら様かしら？」

先輩は怒りと憎悪の籠った視線を、声の主に向ける…。ふええ…。そんなのに睨まれたら動けなくなっちゃうよお…。

「うわこっわ…。あ、どうもすみません。私黒瀬と同じクラスの杉崎なんですけど」

「…それで？」

変わらず先輩の怒りと憎悪は静まらない。ていうか余計燃え上がってる気がする。えなに怖い。死ぬ。石になっちゃう。石になっちゃえ！ シヤド○のメデューサ可愛いよね。どっちも好き。

「じゃねえよ!! 杉崎いきなり来んな!!」

「えーだってさー。黒瀬に話があつたんだもーん」

「話？」

何で今なんだよ…。部活終わってからで良かっただろ…。いや、よくよく考えれば、先輩との間を離してくれた事には感謝すべきなのか？

…ん？ 何で感謝なんだ？ 何で…離れたかったんだ？

「それは部活が終わってからで良いでしょう？ 私達はまだ活動中です」

「そんな固い事言わないで下さいよせんぱーい。どうせ殆ど何もしてないんだらうし、暇でしょ黒瀬？」

「…っ!!!」

途端、先輩の眼が見開かれる。今まで見たことのない怒りと憎悪が、余計恐怖を煽っていく。

「ああなたに部活の事を言われる筋合いは無いわ!!! 出ていきなさい!!!」

びりびりと、空間が痺れるかのような怒号。あの大人しく、静かな先輩からは考えられない程の大声と怒りだ。それに杉崎は驚いたのか、身体をびくつとさせて、縮こまらせた。

「ひいっ… す、すみませんでしたー!!!」

勢いよく扉を開け、閉め、走っていった…。何でそこだけは律儀に

やるんだ。

「はあ、はあ…」

… 大声出しただけで息切れすんのか。いや、普段あまり音量高くないから、余計疲れただけなのかも知れないけど。

「いきなり大声出すからですよ… 俺、飲み物でも買ってきます」

「… 待って」

この気まずい空気を何とかしようと思えば、部室を出ようとしたら、先輩に腕を掴まれた。それは弱々しく、震えていたけれど。前に進む事の出来ない力強さも含んでいた。

「… 傍にいて」

「… はい」

こんな、弱々しくて不安になりそうな先輩を、一人置いていく事は出来なかった。

「… ねえ、黒瀬君」

「… な、何でしょうか先輩…？」

何だ。何なんだこの状況。先輩が腕に抱きついて離れない。顔を腕に埋め、加えてそこに抱きついていて。何だ。何なんだまじで。

「… 黒瀬君は、この部室にいて… 暇、なの？」

「え、えーつとですね…」

まあ、確かにやる事は少ない。先輩は何でも出来るから、沢山やれる事があるだろうけど。だからこの部活を立ち上げたわけだし。でも俺は、出来る事が少ない。先程までやっていた裁縫なんて大の苦手だ。

だけど、暇ではない。楽しくないわけでもない。

「… 先輩を見てるのは楽しいですよ」

「… え…」

「先輩が、色んな事やって、つまんないって言って机に突っ伏したりとか。時々黙々と集中してやっていると… あと、先輩と話すのも好きです。だから、暇じゃないです。寧ろ楽しい」

と言つて、くしやつと笑う。俺はこの空間が好きだ。何でもない、この平和な空間が。そこに、先輩と居られる事が好きだ。だから、暇なんてあつてはならない。この空間は、楽しい事で満ちている。

「黒瀬、君……」

「杉崎には、俺からキツク言つておきます。だからあんま気にしないで下さい」

ぽたり。顔を上げた先輩の瞳から、一粒の涙が零れた。それは雨の雫を溢す葉のように、清らかで、美しい物だった。

「せ、先輩!？」

「あ、これは……嬉しくて……嬉しくて……!!」

溢れでる涙を拭い、顔を隠すように手で覆う。

「私……今までずっと一人で……誰も、私と一緒に居てくれなくて……黒瀬君っ、だけだったの……私と……一緒に居てくれたの……だからあつ……」

嗚咽を交えて、途絶え途絶えに言葉を紡ぐ。そんな姿さえ、先輩は美しい。

「あなたまで……他の人と同じなんじゃないかって、思ったら……私……私……!!」

「そ、そんな事無いですから……！ えと……うわハンカチ無いんだ……」

あーもうこんな時に俺はあああああつ!!!

「……あ、先輩の……」

机の上に、さつき俺の汗を……ああああ俺の汗着いてるから駄目じゃねえか……!!!

「……そ、それで良いから……拭いて、くれないかしら?」

「えっ、良いんですか?」

「寧ろ拭い……いや、構わないわ」

何言おうとしたんだ最初。

ハンカチを手に取り、泣きじやくる先輩の、顔を覆う手を離させる。

涙で頬は濡れ、美しい瞳はその涙でより輝いていた。口元はわなわなと震え、溢れでる涙は止まる様子もない。俺は、そんな先輩を綺麗

だと感じた。

ハンカチで目元を押さえる。零れる涙を止めるように。もう片方の腕は自然と先輩の頭に伸びていて、優しく、優しくさすっていた。

「…大丈夫ですよ先輩…俺はここに居ますから…」

「うん…うん…ずっと居て…居なくならないで…」

恐らくこの時。俺は間違ったのだ。ここで踏み越えてしまった。先輩の心の壁を。誰も寄り付けず、誰も触れられなかったその壁を、俺は容易く踏み越えてしまった。

だけど、それを後悔しているか否かと言われたら… 答えは出しかねる。

「…落ち着きましたか？」

「…ええ。ありがとう」

夕日が遠方に見える山に消え行きそうになる、夕方。先輩の頭を撫で続けていると、先輩は徐々に落ち着きを取り戻していった。

「恥ずかしい姿を見せたわね」

「いえいえ。先輩も、熱い所あるんですね」

「…全く失礼ね…」

ぷいっとそっぽを向いてしまう。あんな姿を見た後で、しかも顔が赤くなっていると可愛いという感想しか出てこない。夕日と相まって先輩の頬は余計赤く見え、綺麗な横顔が、俺はとんでもなく恥ずかしい事をしている上、これ程までの美女と向かい合っているという現実を呼び戻した。

「え、えっと…」

「まあ良いわ…ありがとう、ね」

ちよつと唇を尖らせながら、お礼の言葉を述べる。

「お安い御用ですよ」

「…はあ。すっかり日も暮れてしまったわね。そろそろ終わりましようか」

最後にハンカチで目元を一拭きすると、すっと立ち上がる。その姿は、いつも通りの凜とした先輩に戻っていて。何だか寂しいような、安心するような。

「…黒瀬君」

「はい？」

…ああ、またこれだ。夏も近いってのに、一気に寒くなる。それはクーラーのせいだと思いたいけど、そうもいかない。

横を向いているのに加え、暗くなった部屋のせいで全く表情は見えない。でも、その声音は氷点下のように凍え、だけど…甘美なる優しさも含んでいて。それはもう…恐怖以外の何者でもない。

「あなただけは…居なくならないでね？ 私、もう…黒瀬君が居てくれるだけで良いの…」

「…それも愛の告白ですよ」

素知らぬふりして冗談を言ってみる。こうでもしなきゃ…平静を保たなくなりそうだったから。

「…あは。それでも良いわよ？」

「え」

「冗談よ…でも、あなたが居てくれるだけで良いっていうのは、本当よ」

先輩の顔が目の前にあった。

それはとてもとても美しく、吸い込まれていきそうで。

そして、その先に行ったら、後戻りは出来ないような、深淵の暗闇がそこにあった。

「…あなた以外、いらないかもね」

「先…輩…？」

「うふふ。黒瀬君はからかうと良い表情をしてくれるわね」

にこーつと、楽しいな笑顔をする先輩…良かった、もう怖くな

い。

「じゃあ戸締まりは私がやるから。もう遅いから帰りなさい」

「え、でも…」

「もう大丈夫よ。これ以上迷惑は掛けられないわ」

「…分かりました」

先輩がそう言うんなら、もう心配する必要はないな。もう、大丈夫  
そうだし。

「じゃあ先輩、また明日…明日も、来ますから」

「ええ。ありがとうね、黒瀬君」

多分先輩は、寂しかったんだろうな。今まで、ずっと一人で。なら  
部活なり入れば良かったのに…そういうの苦手だったんだらうけ  
ど。

…俺だけでも、傍にいてあげないと。あんな、不安定で脆い人を、  
一人にするわけにはいかない。明日も、明後日も…先輩が卒業する  
まで、一緒に居よう…なんだ、俺先輩が好きなのか？

「…それはない、な」

これは、恋なんだろうか。何か違う気もするけど。

「…」

許さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許  
さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許  
さない許さない許さない許さない許さない許さない許さない許



「…え…?」

「うー… だから! 私と付き合って!!」

部室から出て、昇降口。靴を履き替えて、そこで待っていたのは… さつき出ていった杉崎だった。

「え、なに。どつきり?」

「はあ!? あんた乙女の一世一代の告白をどつきりとかで片付けようっての!?!」

「… まじで言ってるの?」

「… まじ」

… ちよつと待て。理解が追い付かない。え、なに、俺今告白されたん? 杉崎に?

「… 何で?」

「かーつ、この男はあつ…」

恥ずかしそうに顔を片手で押さえ、溜め息をつく。え、何か俺不味い事言っちゃった?

「… 黒瀬、あたしと楽しそうに話してくれるし、笑顔がカッコいいし… 一緒にいると、ドキドキして、もつと一緒に居たいって思っで… それで…」

… あーなるほど。これ聞いている方も恥ずかしくなるやつだ。

「え、えーつとだな… うん、気持ちは、嬉しい」

「! … やっぱり、あの先輩が好きなの?」

「え”っ…」

うわ変な声出た。

先輩の事が、俺は好きなんだろうか。さつき杉崎が言ったことを基に考えると… 俺は先輩と居て楽しいか? 楽しいな。さつきも言った。笑顔が綺麗か? 綺麗だな。てか彼女以上に綺麗な笑顔を見たことないわ。一緒に居てドキドキするか? … 顔近づけられ

たり、身体触られたらドキドキするな。

もつと、一緒に居たいと思うか？

… 最近の先輩には、言葉に出来ない恐怖を感じるようになった。低い声音や、歪んだ笑顔を最近する事が多くなつた。そんな時、先輩は一番楽しそうで嬉しそうだ。そんな先輩が、今は怖い。

でも。それでも一緒に居たいって俺は思ったんだよな？ ……でもそれは、先輩が可哀想だつていう同情が入ってなかったか？ ……うん。今は答え出せないな。

「… それもわかんねえ。だから、少し時間くれ。ちゃんと返事はする」

「… 分かった。待ってる」

考えれば考える程、先輩への感情が分からなくなってくる。好きか嫌いかで言えば好きだ。でもそれは、恋とか愛とかじゃない。もし、先輩への思いが恋に変わったら…… もう後には戻れない恐怖を感じる。

「… んじゃあ、また明日な。早めにするから」  
「うん」

杉崎には申し訳ないが、やっぱり考える時間は必要だ。

もし杉崎と付き合ったら、部活に割く時間は圧倒的に減るだろう。その時、俺は先輩に何て言えば良いんだろうか。

じゃあ付き合わなければいいんじゃない？ でも、杉崎だって魅力的な女子だ。明るく、時に優しい。スタイルも良いし笑顔は可愛い。多分同年代だったらトップクラスじゃなからうか。

… やべえ頭。パンクしそう。

まさかどちらの女子か選ぶ事になるとは…… 前の俺じゃ考えられなかったなあ。

「… 優柔不断な奴」

まあそんななよなよした所も、守ってあげたくなるような可愛さもあるけど。

あの先輩と比べられたら、あたしなんか勝てる見込み無かったけど… まだ好きなわけじゃないんなら、まだ負けてない。… あたしだって、黒瀬が好きなんだから…

「杉崎さん」

「え」

「… 寝てしまった…」

まずい、何も考えずに寝てしまった。… うーん…。

結局、答えは出ないまま、学校へ向かう事となった。… 杉崎と顔合わせづらいな。… あんまり長引かせるのも失礼だよな。どうしよう。

「おえーっす」

扉を開けて教室に入る。… あれ？

「なあ、今日杉崎は？」

「え？ あー来てないね」

近くの、杉崎と仲の良い女子に聞いてみる。… えーちよつと杉崎さーん？ 何でイベントキャラが居ないのー？ ルンフアクみたいイベント発生させたいのに来てくれないみたいな。… あ、分からない？ あっ、ふーん…。

「… まあ、都合いいか」

まだ決まってるないし。休みになるんなら時間作れるし。

結局その日、杉崎が学校に来ることは無かった。

「… こんちはー」

「あら、いらっしやい」

授業も終わり、部活に入る。いつものようにそこには先輩が… あら？ 今日は何もしてないのか。

「先輩？ 今日は何もやらないんですか？」

「ええ。今日は… そうね…」

考え込むように、顎に指を当てて視線を宙に投げる。そんな姿も画になり、何故そこまで容姿が優れているのか学会で論争したいと思う

くらいだ。

「今日は文化部らしい事をしましょう。それじゃ、お茶でも淹れるわね」

「あ、どうも…」

ポットからカップにお湯を注がれると、コーヒーの良い匂いが漂ってくる。

「…そういうば、杉崎さんのお話って何だったの？」

「え」

「聞かれたくない話だったの？」

… どんどん声音が下がっていく。前髪で瞳が見えないけれど、その口元は薄く微笑んでいるように見える。正直言っただめちやくちや怖い… 告白された、なんて言ったら…

「え、つとお… あ、コーヒー貰いますね」

あれだ。とにかく時間稼いだ。

「…」

あつついけど、とにかく飲むしかない… あ、おい… し… い…

「せ… んぱ…」

あれ、なんだこれ。目蓋が重い。思考が止まる。身体が… 沈んでく…

「あらあら。結構効果早いのね。まあ一気に飲んだようだし、ね」

「え…」

「ふふ、お休み… 黒瀬君」

目蓋が完全に閉じる。身体が机に放り出され、身動きがとれない。朦朧とする意識が、どんどん遠くなる… あ、これあれだ… 睡眠

薬って奴…？

「… それじゃあ、丁寧に運びなさい」

「は」



「ここは私のお家。そして… 黒瀬君と私の部屋よ」  
「…？」

「黒瀬君は、今日からここで私と一緒に暮らすのよ」  
「… は!？」

あら、やつと意識がはつきりしたいみたいね。それも、私と一緒に暮らすって聞いた時だなんて… よっぽど私と暮らせるのが嬉しいみたいね。頬が緩んじやう。

「え、ちよ、先輩!？」

「ふふ、慌てすぎよ。いずれこうなるのが早まっただけ」

「いずれ!？ 先輩どういいう… なっ…!？」

無理やり起き上がろうとする黒瀬君。しかし、腕と脚がベッドの柱から伸びた鎖で固定しておいたから、動く事は出来ないでしょう。

「痛かったらすこしだけ緩めてあげるわ。ちゃんとやってね?」

「先輩!？ 状況が全然分かんないんですけど!？」

「? ここは私と黒瀬君の部屋って言ったじゃない」

「じゃなくて!! いやそれも分かんないんですけど、何でこうなってるのか聞いているんですよ!!」

「… そうね。じゃあ説明してあげるわ」

私は机の上からノートパソコンを取り、再びベッドの端に座る。キーボードでパスワードを打ち込み、起動させる。

そして、何の味気もない青の背景が現れ、左端にあるファイルをクリックする。

「じゃあまずこれを聞いて」

『私と、付き合ってください!!!』

「… これ…」

「そう。昨日の… あの女の声」

「でも、あの時先輩は…」

「ふふ… 盗聴したのよ」

私は、ポケットから黒瀬君のスマホを取りだし、カバーを外す。そして、薄く貼られているチップを剥がし、黒瀬君に見せる。

「凄いでしょう？ 最近のはこんなに薄くて小さいのよ？」

「… 何で…」

「黒瀬君の生活をチェックするために決まっていますでしょう… まったく。あんな泥棒猫が入り込んでいるなんて、気づかなかったわ」

だから消したのだけれど。

「それじゃあ、次はこっちなね」

「… え？ ー( )ど( )？」

「… 杉崎!？」

今度のは映像で、椅子に縛りつけられ、目隠しをされている女の映像が出てきた。

『おはよう。泥棒猫さん』

『な、先輩!? 何するんですか!! こことどこなんですか!!』

『勝手に喋らないで』

ゴスツ

『うう… うげ…』

思い切り腹を殴られ、唾液を漏らす。

『私の黒瀬君に近づいて… 加えて想いを寄せるなんて… ね』

『私… の… ? ふぎけん!! 黒瀬は誰の物でもっ… うええ…』

勝手に口を開いたために、再び腹を殴られる。

『二度も言わせるなんて… まあ良いわ。とりあえず… あなたにはお仕置が必要ね』

『ひう… 何、するの…』

『あなたの汚い血なんて見たくもないけれど… 仕方ないわね』

カッターナイフを取りだし、刃をチキチキと出す。

『まずは何処が良いかしら… 顔は目立つから止めてあげましょうか。まずは… 腹ね』

『…つつつつつつつ いたあああああああああああいいいいいい!!!』

肉を絶つ、繊維の逆から斬っていく。刃はなかなか進まず、ぷつぷつと血を流しながらゆっくりと進めていく。

『いたいたいたいたいたいたいたいいいいいい!!!』

『これ結構大変なのね。こちらへんにしましょう』

『はあ… はあ…』

『リスカっていうのかしら？ 腕を切る人が多いそうだし… 腕も斬りましょう』

『いっつ、ううううううううう!!!』

『…さて、じゃあこれからは我慢するか、諦めるか選ばせてあげるわ』

『え…？』

『もう金輪際黒瀬君に近づかないか、痛い想いをしてまで彼を好きでい続けるか… 見物ね』

『そ… そんな…』

『いや、痛いだけではつまらないわね… 尿を我慢させるのはどうかしら？ それとも… 虫でも大量に用意しましょうか？ 水攻めも良いわね… さあ、楽しませてね？』

「あら、黒瀬君？ どうして顔を伏せているの？」

「…先輩… 何で…!!!」

「まあ、仮にもクラスメイトだし。見たくないのも分かるわ。止めてあげる」

再生メニューの停止を選び、映像が停止する。

「私の黒瀬君に近づいた罰よ。当然の報いだわ」

「… 杉崎、杉崎は?」

「ああ… 尿を我慢して、盛大に漏らして… 虫を大量に持ってこさせた所で諦めたわ。情けないものよね。まあ私としては好都合なのだけど」

「無事… なんですか…?」

「ええ。この映像を撮っている事と、私の家で脅して家に帰させたわ。両親にでも話されたら困るから、そこもまた脅すけれどね」  
「…」

「何であんな女が無事かどうか気にするの? … まさか…」

黒瀬君が横たわっている上に、馬乗りになる。

「あの女が好きなの? 違うわよね? 言ったでしょう? あなたは私のものだと。それに、たかが痛いだけの怖いだけです。黒瀬君を嫌いになる女なんかにあなたは渡せないわ。私なら、どんな事をされたつてあなたを好きで居続けるわ。だってこの想いは本物だもの。私は何があるうとあなたを好きだし、好きで居続ける。だからあなたは私の物なの。他の女なんて近づけさせないわ。この部屋から一步も出さない。あなたは私とずーっと一緒にいるの。あの学校には私以外の女がたくさんいるもの。そんな所にあなたを行かせるわけにはいかないわ」

「ちよちよちよ先輩!」

「大丈夫よ。食事もお風呂も夜の営みだって私がお世話してあげる。夫のお世話をするのは妻の役目だもの。あなたは何も考えずに私を愛するだけで良いのよ? 幸せでしょう? 嫌な勉強も、したくない仕事も、汚い他の女と接する事もしなくていいの。ただ私と一緒にいるだけ。絶対に後悔なんてさせないわ。私の全てをもつてあなたを愛して幸せにしてあげる。だから…」

「やべえ結構魅力的… じゃねえ!!!」

「何よ?」

「先輩… おかしいですよ、こんなの…」

「? 何もおかしくないわ? 当たり前前の事でしよう?」

「当たり前前って… こんなの普通じゃない…!!!」

「普通じゃないことの何が悪いの? 普通に愛するだけじゃ… あなたも私も幸せになれないのよ?」

「… 先輩、どうしちゃったんですか…」

「もとはと言えばあなたのせいよ? あなたを好きになってしまった

から、あなたは今こうなっているの」

「そんな、勝手な…」

「勝手じゃないわ。あなたがかつこよすぎるから、あなたが可愛い過ぎるから、あなたが優し過ぎるからよ。ずっと一人で、誰にも優しくされず、誰とも一緒に居られなかった私に… あなたが近づいてしまったから、よ」

間髪をいれず、彼の唇に私の唇を触れさせる。そして彼の唇を私の舌で挟み開け、口内を堪能する。歯茎、歯の裏、ざらざらとした舌、彼の甘い唾液。彼の全て。

「んむ…!?!」

「んちゅ、ちゅる… ちゅぴ… ぴちゃ… んむう… んは」

唇を離すと、彼と私の唇の間に唾液で線が出来る。それがあまりにも扇情的で… 濡れてしまう。

「あは… 黒瀬君、今のでおつきくなっちゃったの?」

「っ… これ、は…」

「私で興奮してくれたのね… 嬉しいわ。私も… あなたとキスしたら、濡れてきてしまったの… 私も初めてだから、大丈夫よ… でも」

少しだけ後ろに動いて、ズボンのジッパーに手をかける。

「あなたを壊してしまうかもしれないわ」

この部屋に来て、どのくらい経っただろうか。もう分からない。日にちも確認出来ないし、窓は朝日も射し込まない。だけど不便はして

いない。お腹が空いたら先輩が作ってくれるし、お風呂に入ろうと思ったら先輩が洗ってくれるし、暇だと思ったら先輩をお喋りやゲームや遊びが出来るし、性欲が溜まったら先輩が出させてくれるし。

俺はもう、先輩無しじゃ生きられなくなってしまった。

「ただいま、黒瀬君」

「お帰りなさい、先輩。ずっと待ってたんですよ?」

「あらあらごめんなさいね? 何かあったの?」

「...これ」

「... あらあらまあまあ。昨日あんなにしたのに、もうそんなにして  
いるの?」

「先輩最近、身体エロくなってきてませんか? もう全然収まんないで  
すよ」

先輩は優しい。おかげで俺は何もしなくても幸せに暮らしている。  
昔の事なんかとうに忘れてしまった。先輩との暮らしが、あまりにも  
平和で、幸せだから。

あれ、俺って... 先輩の事好きなんだっけ。

「ふふ、愛してるわ。黒瀬君」

先輩の笑顔、綺麗。でも、何故か心は凍ったまま。

「はい、俺も愛していますよ。先輩」

あれ、俺って... 幸せなんだっけ?

――Bad End――

電話彼女 case 1 『帰省中の地味っ子彼女』

『… あ、もしもしく？ 私、私だよー？ 元気してる？ って言っても、こつち来てから半日しか経ってないけどね、えへへ』

『ん？ そーだねえ… 田舎だからほんとに何にも無いんだ。何にも。車で通るとこ畑、田んぼ、畑、田んぼ… 時々家があるくらい。景色が全然変わんなくてね、飽きて寝ちやったよー。私達の住んでるとこもそんなに都会じゃないって思ってたけど、ここと比べたらどこも都会かもね』

『こつちに居るのは3日くらいかなー。お盆になると、いつも親戚皆集まるんだー。皆でお寿司食べたり宴会したり… まあ私は端っこでちよこちよこ摘まむだけけど… え？ 好きなの？ んー… サーモンとかかなあ。あ、君と一緒に食べたとろサーモン！ 美味しかったねえ』

『あとは皆お酒飲んだりしてるよー。子供は結構暇だね。ちっちゃい頃はスマホもゲームもなくて、ひたすらゴロゴロしてたり寝ちやったりしてたなあ… 今は、君とこうして電話出来るから、暇な時間なんて無いね… あ、迷惑、だった…？ ほんと？ 良かったあ』

『君とこうして電話出来るなんて、夢にも思ってたよ… 今も、ちよつと夢なんじゃないかなって思うんだ。君の声が、こうして耳元で聞こえるなんて… あの頃の私だったら、鼻血吹いて倒れちゃうよ… 今も時々出るけど』

『ほんとだよー。君の声が、私の耳元で聞こえるんだよ？ 嬉しさと幸せでもうおかしくなりそう… えへ、嘘じゃないってば』

『え？ 私結構喋る？… 君だからだよ。他の人とは緊張で全然喋れないけど… 君とは、いっぱいお話したいから、いっぱい喋るんだ。緊張するし、胸のドキドキ止まんないけど… それ以上に、君とお話したいから…』

『え、可愛い？ えへ、えへ… そんな照れちゃうよ… じゃあもつといっぱい喋るね。そーだなー… あ、蝉の音がいっぱい聞こえるね。みーん、みーんて。ここ結構カブトムシも採れてね、虫いっぱい

居るんだ。あ、居たら写真撮って送ってあげるね。君、カブトムシとかそういうの好きだったでしょ?』

『あー…。んーとね、君が友達とムシキ〇グの話してるの、聞いちゃってき…。いや、盗み聞きするつもりは無くてね…。その、お話ししたいなーって思ってたんだけど、緊張して声掛けられなくて…。えへへ、お恥ずかしながら…。』

『うん、見つけたら教えるね。後は…。んーと…。あ、私が普通ってた小学校があるんだー。私、中学生からそっちに引越してね。だから小学生まではこっちで暮らしてて…。全然人居なくてきー、多分ークラスしか無かったんじゃないかな。そっち行ったら人多くてびっくりしたんだよー』

『多分そこで私の人見知りが発動してね…。まあめでたくぼっちになりましたと。いやあ懐かしい話ですよ…。でも、君が居てくれたんだよね。二年生の時だよな? 初めてクラス一緒になって、隣の席になって…。初めは凄く怖かったんだよ? ほんとだよー』

『仲の良いグループはクラスを中心だったし、君、明るくてカッコいいから…。私とは、住んでる世界が違うんだなーって、ずっと思ってた。君が校庭で友達と遊んでる時、私は図書館で本読んでたんだよ。いつも図書館の窓から君の事眺めてたっけ。』

『…。あれ、話した事無かったっけ。そうだよー、ずーつと見てたんだよ、君の事。サッカー上手かったよね、ずばずばーって抜いていって、シュート!! かつこ良かったなあ。汗いっぱいかいてき…。その頃から、好きだったんだよ、君の事』

『…。君は、いつからなのかな…。私の事、す…。好きになったの…。って…。わ、ごめん、恥ずかしい事聞いちゃって…。嫌だったら、答えなくても…。え、隣になった時? ひ、一目惚れ!? う、嘘でしょ!? だって、私…。髪とか全然整えてなかったし、暗かったし…。ぼっちだったし…。』

『…。き、綺麗? 私か?…。うー…。君は何回私をドキドキさせれば気が済むのさ…。こんなんじゃないよ…。え、ちよ、駄目! もつと言つて! 止めないで!…。そういうの、言われるの

は、嬉しい、から……』

『よ、欲張り？ い、いーじゃん！ 私だつてか、彼氏さんからそういう事言われたいよ！ 私だつて女の子なんだもん…… 恥ずかしいけど…… 何か、むずむずするっていうか…… こそばゆいっていうか…… 嬉しい、というか……』

『……!! 可愛い？ 世界で一番？ うー…… きよ、今日はお仕舞い!! 今日はもうお腹いっぱい!! だつて…… そういふの、いっぱい言われたら、慣れちやうかもしれないでしょ？ 慣れちやうたら、もうドキドキしなくなるかもしれないし…… そんなの、嫌だから』

『君には、いつだつてドキドキしてたいの。君と会える事が、お話出来る事が…… 付き合える事が、私にとつては奇跡みたいな物だから。それに、慣れちやいけないんだよ。うん…… だつて…… いや、何でもない』

『あ、着いたみたい。じゃあ一回電話切るね…… また、後でかけてもいい？ …… ありがとう』

『…… あ、もしもし？ 五時間ぶりだね。親戚に挨拶しに行ったり、荷物整理とかご飯食べたりしてたら遅くなっちゃった。そつちはもうご飯食べた？ 君偏食だから心配だよ…… えへ、彼女ですからね！ …… 将来的に、そういう事も考えなくちゃかもだし…… あ、そうそう。こつちはまたお寿司でね、サーモンいっぱい食べたよ…… え、四個、くらい……？』

『あはは、やっぱ少ないよね…… 雰囲気もあるかもだけどね。ちよつとお酒飲んだテンションの大人には近づきたくないよ…… 怖いし。今は縁側で星を見ながら電話してるんだ。凄く綺麗なんだよ……』

そつちじや見えない星が、ほんとに明るく見えるんだ。…君にも、見せてあげたいな。あ、写真撮ろつか？ほんとに綺麗なんだよ。』

『よいしょ。うん、撮れた。そして送って。…どう？綺麗でしょ？夏はやっぱりさそり座と夏の大三角形だね。はくちよう座のデネブ、こと座のベガ、わし座のアルタイル。…この三つが作る三角形を、夏の大三角形って言うの。小学校の頃やったでしょ？…綺麗だよ、ほんと。』

『…あ、ごめん、見惚れちゃって。私、星が好きでね。よくプラネタリウム行ったり、望遠鏡覗いたりして、星をよく見てた。一人でも静かにたのしめるしね！…泣きたい…。まあそれに、怖い映像見ちゃったりして寝れない日とかは、よく星を見て過ごしたんだ。…今は、君がいるから、見る機会も減ったけど。怖いの見ても、君とこうやって電話してれば怖くないし。…ごめんやっぱ怖いかも。』

『君は怖いの得意だっけ？ 良いなあ。…えーだって血まみれの幽霊とか、怖い顔した幽霊とか。…ああ想像したら怖くなってきた。…都市伝説とかUFOとかUMAは好きなんだ。見てて面白いし、怖くないし。…私、宇宙人はいるって思ってるんだ。絶対だよ、絶対。えー、信じてないな。』

『だって考えてみてよ。本当に生命体が存在出来るのが、地球だけだと思う？ どんなに遠くても、きつとあるんだよ。地球みたいな星が。…あはは、こんなんだから、友達出来ないんだろうなあ。…君は優しいね、私の話をちゃんと聞いてくれるから。え、面白い？…ありがとう』

『君の意見も聞かせて欲しいな。私、こういう話人としたことなくて。…すると、絶対楽しいじゃない？ こういう話！ 宇宙人はいるのか、とか、地球は侵略されるのかーとか！…いや、侵略は遠慮したいな。…もし人類滅亡とかになったら、君と一緒に居られなくなる。…あ、君も？ 嬉しいな。』

『…ふんふん、面白いね君の意見。銀河はいっぱいあって、その何れもが私達のいる銀河と同じような形態をしてるなら、地球みたいな星

もある、と。．．．そう考えると、その星でも、私達みたいにして電話してる人もいるかもしれないね』

『．．．でも私、この星に生まれて良かったよ。．．．だって、君に会えた。君とお話出来た。君を、好きになれた。それだけで、私は生まれてきて良かったって思えるんだ。．．．私、君が居なくなっちゃたらどうしようね。いや、縛り付けるとかそういうの、君が嫌がるんなら絶対したくないよ？ 君に迷惑かけたくないから。．．．え、迷惑じゃないの？ むしろ嬉しい？ ．．．ふふ、君も結構変な人だよ、あはは』

『でも、やっぱりしないよ。重い女って思われたくないし。いや、君の事好きだよ。大好き。好き好き。でも、君が嫌がったり、めんどくさいって思われるのは、凄く嫌。私と、君を繋ぐ物って。．．．ほんとに細くて、壊れやすい物だと思うからさ。だからさつきもね、そういうのはあんまりって』

『君にいつぱい言ってもらえるのは、凄く嬉しいんだ。でも。．．．それが普通になっちゃうのが、凄く怖い。君に好きだって言ってもらえる事は、ほんとに奇跡なんだから。だから。．．．そんな奇跡をいつも言われちゃったら、それが普通になっちゃうかもしれないでしょ？ 奇跡なんだって、思わなくなっちゃうの。そんなの、嫌だから』

『．．．え、めんどくさい!? っ、ごめ。．．．あの、えつと。．．．き、嫌いになった!? ごめん、ごめんなさい。．．．え、違うの? ．．．ほんと? めんどくさい、よね。こんなの。．．．え、嬉しい? ちゃんと、考えてくれるから。．．．? ．．．うん、君の事だから、いつぱい考えたの。どうしたら、いつもドキドキしていられるんだろうって。．．．まあ、どんなに一緒にいたって、ドキドキが収まる事は無いと思うけどね』

『電話越しでもドキドキしてるんだ。君の声が聞こえるから。胸がとくんとくんと。．．．痛くなくて、とても心地いいの。ああ、君の事が好きなんだなって、分かるから。．．．君は、そんなんでも無さそうだね。いつつも飄々としてて、余裕持ってて。．．．むう、何か不服だよ。私はこんなにドキドキしてるのに。．．．』

『．．．え、キツ。．．．む、無理無理無理!! 無理だよそんな。．．．だって、君の顔が、君の唇が。．．．でも、君はそれで、ドキドキするんだ。．．．ね

？ 分かった。私、頑張る。頑張って、君とキス… する』

『… ねえ、一緒に展望台行く？ 夜ならほとんど誰も居ないから… うん、帰ったら、一緒に行く。一緒に星を見て、いっぱいお話して… キス、しよ？ じゃ、バイバイ。また明日、電話するね』

## 短編集の短編集。「マッチ売りの少女」

short. 1 「マッチ売りの少女」

寒い。今年も雪が降ってきた。暗い暗い街道を仄かに灯すガス灯に照らされて、黒に染まった街には不釣り合いな白い雪が降り注ぐ。最初は、あ、雪だ。くらいの降雪量だったが、今となっては深く被った帽子の鏝に積もってしまいうくらいの量だ。降っては溶けるを繰り返していた道の雪も、段々と白く薄く積もっていく。このままだと、明日明後日には完全に積もってしまうだろう。ああ嫌だ嫌だ。

大枚を叩いて買った黒いコートをよりいつそう強く抱き、巻いたマフラーに口元を埋める。家に帰れば温かいスープを飲める。蠟燭に火を灯し、薪をストーブに放り込めばすぐに身体は温まる。

… まあそれを耐えられず途中の屋台で売られていたコンソメスープに口をつける。値は張るが具材やスープの量は山盛りで、思わずほう、と白い息が漏れでる。ジャガイモや玉ねぎ、更には薄くスライスされたベーコンと、寒い日にはぴったりな具合のスパイス。堪らない。

「… ませんか」

びく、と身体がこわばる。いつもなら、きつと気のせいだと見逃していた筈の小さな声。しかし、雪が降り人通りの少なくなった街道だからこそ聞こえた、か細く小さな声。

「マッチ、買いませんか？」

ぼろぼろになった小さな羽織、継ぎ接ぎだらけの安物の服。そして、震えて震えて止まらない細く真つ白な手。その手に握られた、シワだらけになった真つ赤なマッチ。

そこに立っていたのは、とても綺麗な金髪をした、小さな少女だった。

「あ…」

何をいいかけた。家にならマッチはある。このご時世無駄な金は使つていられない。近代化が進むこの国で、マッチなんていうのはじきに廃れる。こんな可哀想な子は他にいくらでもいる。この子だけに手を差しのべるのは、ただのエゴだ。

「え……と。無理して買わなくても大丈夫ですよ、ほんとです。はい」少女は、少し無理をしたような弱々しい笑顔を浮かべる。

「売り切らないと困っちゃうんですけど、ね……あはは……」  
「……すまんな。今手持ちがないんだ」

「そう……ですか……大丈夫ですよ、お気をつけて……」

マッチを籠に戻して、緩い羽織を優しく引つ張る。強く引き絞れば破れてしまいそうで……今ここを離れて立ち去れば、彼女は寒さに凍えて、ここで……ずっと……

「……だから、これと交換してくれないか」  
「え？」

持っていたスプの器を少女の手に持たせる。小さな手がびくつと震え、そして……収まっていく。手の先はだんだんと赤くなり、温かさが戻る。目はきらきら輝き、頬は紅潮していく。

「そ、そんな！……こんな美味しそうな……私には……」

「いいんだ。その代わり……そうだな、6個貰おうか」

籠に残っていたマッチは、残り6個。その全てを引き取り、その内の一つを少女に渡す。

「そしてこれは君が使い。僕が買った物だから、遠慮せず使うといい」

「そ、そんな……何と、言ったらいいか……あ、ありがとうございます」

「……次はちゃんと手持ちを持ってくる。今日はそれで我慢してくれ」

そう言つて被つていた帽子の雪を払い彼女の頭に被せる。中身は羽毛で出来てるし、少しは寒さを和らいでくれるだろう。ぽんぽんと叩き、その場を離れる。

……何をしているんだ僕は。馬鹿か。何で帽子被せたんだよそれはいらないだろうが……マッチ使いきれるかな……

少し心は温かく、歩く足取りは少し軽く。

手には仄かな温かさが宿っていた。

## 短編集の短編集。「マッチ売りの少女、に」

今日も寒いまま終わるのかと思った。今日も、売れ残っちゃうのかと思った。

幼い私を雇ってくれる所はどこにもなくて、貰えるお金も少なく、誰も買ってくれないマッチ売り。道行く人々は誰も私に見向きもしなくて…。このまま、消えていくのかと思ってしまうくらい。

だけど、あの人は気づいてくれた。寒さで震えて、か細い私の声を。その手に持った温かいスープを渡して、大きな手で帽子を被せてくれた。被せてくれた帽子も温かくて、私の小さな頭じゃとてもぶかぶか。それを深く被って、まだ温かいスープに口をつける。美味しい。こんな美味しいの、初めて食べた。ホクホクのじゃがいもも、分厚いベーコンも、ぴりつと辛い胡椒も。何もかも。

あの人してくれたマッチでつけた小枝の火に手を近づける…。今日はとても温かい。雪がこんなに降っているのに、なんで。

心臓が、とても温かい。頬は、とても熱い。

「…また、来てくれるかな」

薄い薄い毛布にくるまって、小さな小屋の窓から見える景色を見る。あの人も、同じ雪を見ているのかな…。

いつもなら、全然眠れなかった夜は。何故かぐつすりと眠ることが出来た。

「…これと、これを下さい」

「はいよ。随分小さいが、妹さんのかい？」

「え？ ああ…。まあそんなところですよ」

「はっはっは。良いお兄さんじゃねえか。安くしといてやるよ」

「！ありがとうございます」

硬貨をおじさんに渡しながら、毛布と手袋を受けとる。ここは街の商店街。食料から衣類まで結構色々な店が揃っている。僕は、冬物を売ってくれている店で小さな毛布と手袋を買っていた。

何だ、何してんだ僕は。こんな……あまり値段はしないけども。でも、無駄遣いしている場合じゃ……いや。前から、そういう人達はよく目にしてきた。

時代が急激に変わった近代。蒸気機関なんてものも開発され、街には大きな工場が建て並ぶ。綿工場からの素材で作られたこの毛布も手袋も、手作りよりも精巧で精密であり、そして。手作りならではの温かさと拙さが消えてしまったと思うと少し悲しい。

そして、その時代について行くことが出来なかつた人、そして置いていかれてしまった人達が沢山いる。昨日の女の子だって、道端に倒れこんでいる老人だって、何もかもが、この場に留まっている。時代の波が、勢いが、あらゆる物を置いてけぼりにした気がする。

なら、僕に出来る事は、何なのだろう。

「……あ。お兄さん」

そんな事を考えていたら、昨日のか細い声が聞こえた。

少し震えていて、ぼろぼろの衣は変わらないのに、笑顔な少女。今日も籠に沢山のマッチをいれて彼女は佇んでいた。

「やお嬢さん。今日はちゃんと買いにきたよ」

「ほ、ほんとですか!? ありがとうございます!!」

少女は心底嬉しそうにぴよんぴよん跳ねる。その姿はちゃんと年相応の少女の姿で、少し安心した。

「それと、今日は届け物もね」

「え? 届け物?」

鞆の中から、先程買った毛布と手袋を取り出す。

「ほら、君への届け物だ」

「……はえ?」

目をぱちくりさせて、僕の手を見る。なんだその反応は。笑っちゃうじゃないか。

「だから、君にだよ。そんなのじゃ寒いだろ？ これを着て、ね？」  
籠を地面に置かせて、毛布を羽織らせ、小さくてとても冷たい手に手袋をはめる。

「… あったかい…。」

「そうだろう？ 頑張ってる君へのプレゼントだ」

「… お兄さん、何で… 何で、私にここまで…。」

目尻に涙をため、僕の顔を見る。

何で、と言われると困ってしまう。特に理由はない。偶然、君の声が聞こえて、マツチを買っただけだ。このプレゼントはただの気まぐれ。

でも、少し違和感が残る。僕は、人に関わるのがあまり好きではない。人と話すのは得意じゃないし、接するのは極力避けてきた。だけど、目の前の少女は違う。可哀想だったから？ 同情したのか、僕は。なら他の人でも良かっただろう。

なら、何で、この少女に。

「… お兄さんはね、夢があるんだ」

「夢、ですか？」

「うん。君みたいな子達が、笑っていられるような場所を作りたい。君へのプレゼントは、その第一歩さ」

僕には、叶えたい夢が、あったのだ。

## 短編集の短編集。「マッチ売りの少女、さん」

「わあ、おっきなお家・・・」

「さあどうぞ。まずは雪を落としてね」

小さな少女が初めて見る物に目を輝かせる。まるで娘のようだ。いいや違うだろ馬鹿。雑念を振り払い、ブラシで少女の帽子の雪を落としてあげる。

「あ、ありがとうございます・・・良いんですか、本当に？」

「構うもんか。これは僕の始まりの一步だ。来てくれなきゃ困る」

少女に贈り物をした後、僕は少女を家へ招き入れていた。戸籍も家庭も無いのだろう。問題にはなるまい・・・多分。

「さあいらっしゃい。ここが僕の家だ。まずは暖炉を焚かそう。そして食事の準備をしよう。今日から大忙しだな」

「は、はい！お手伝いします」

いそいそと靴を脱ぎ、ぼろぼろになった靴下が見える。よく見れば履いていた靴も穴が空き、所々が解れている・・・未成年労働者の労働環境は最悪だ。こんな状態になっても、その日を生き抜く事すらままならない賃金しか貰えず、環境は悪化していく一方。

誰かが、何とかしなくちゃならない。今まで客観的で曖昧にしか思っていなかった絵空事。僕が、やるんだ。

「いや、大丈夫だよ。お手伝いさんもいるし君は・・・そうだね、まずはお風呂に入ったらどうだい？」

「お、お風呂ですか!?そんな高価な物・・・私には・・・」

しどろもどろになって俯く。恐らく、見たことすらないのだろうな。

「入ってくるといい。お手伝いさんも向かわせよう。温かいお風呂に入ってから、君に仕事を与える。それでいいね？」

「・・・分かり、ました・・・」

・・・不安はまだ拭えていない、か。当然か。何処ぞの誰とも知らない人に連れられて来たんだ。無理もない。まずは、彼女が安心して暮らせる環境にしなければ。

資本家は自分の財産だけでなく、その下にいる労働者に目を向けなくては。

召し使いに服を預け、書齋に入る。僕はまだこの業界に入りたての新人だ。事を大きくし過ぎれば上に潰される。まずは僕の工場内だけでも環境を改善し、落ちてきた利益を戻さなくては。それには、労働者との信頼関係が必須になる。

父が若くして亡くなり、成人したての僕が引き継いだ工場は、段々と利益を落として行ってる。僕の管理が行き届いていないせいだ。環境の悪化により死者も出ている。何とかしなくては…。

僕に出来る事なんてたかが知れてる。誰かに助けを請うには、まず僕が動かなくては。

「綺麗な髪ですよ、お嬢様」

「お、お嬢様なんて…そんな…」

「いえいえ、このマリー。こんなに綺麗な金髪を見たことはありません」

あつたかい… 湯気なんて工場の蒸気機関でしか見たこと無かつたし、あそこは熱くて熱くて… あつたかいなんて知らなかった。

優しく、ゆつくりと髪が揺らぐ。白いふわふわした泡が、私の髪を包み込んでいく。気持ちいい… 思わず眠くなってしまうくらい。

「ふわあ…」

「あらあら、お風呂で寝てしまっただけのぼせてしまいますよ… じゃばー」

「わっふっ!？」

突然頭に大量のお湯が流される。目を閉じてこっくりこっくりと舟を漕いでいた私は驚く。

「ふふふ、びつくりしました?」

「びつくりしましたよ!でも… あつたかかったです…」

「それは良かった。さ、湯船に浸かりましょう」

恐る恐る、白い箱の中に入っているお湯に足を浸ける。とても温かくて、気持ちいい。お湯つて凄いな。お水を温めるとこんなに気持ちいいなんて。

「マリー…さん」

「はい?どうされました?」

「何で…私…ここにいられるのでしょうか」

さつきからずつと考え込んでいた。こんなおつきなお家に、沢山のメイドさん。学校に行っていない私でも分かる。あのお兄さんはとってもお金持ちなんだ。私みたいな、平民のその下にいる人達とは、何の関係も、近くにいる資格さえない…。

「…お嬢様、お名前は?」

「へ?…エラ、です」

「それでは、エラ様。ぼっちゃんま…あのお方の自慢話を致しますね」

「はあ…」

「ぼっちゃんまはとてもお優しい方です。私も平民の出なのですが、ぼっちゃんまは温かく迎えて下さいました。メイドの事なんてこれっぼっちゃんも分からない私に、ぼっちゃんまやこの家専属の由緒正しいメイドの皆様方は、少しも見捨てず、優しくお教え下さいました…私は、今とても幸せです。この家に、ぼっちゃんまに仕える事が出来て」

「…」

「ぼっちゃんまは、人を見捨てる事の出来ない…とてもとても、か弱い心をお持ちなのです。きつと、エラ様も偶然ぼっちゃんまと出会ったのでしよう?」

「は、はい」

「目に入った方が困っていたら、後先考えずに助けてしまう…それがぼっちゃんまなのです。だからきつと…エラ様を助けたのも、偶然」

…やっぱりそうなんだ。私は、可哀想な子だから、同情されて助けられた。さつき言っていたあの事も、誰が相手でも良かったんだ。私じゃなくて、他の人を助けても、同じ。あの方は…誰にでも優し

い。

「嫉妬、しますよね」

「へ?」

「妬いちゃいますよね、そんなの。あの誰にだって手を差しのべるんですよ。ほんとに女... 人たらしです。いつの間にかメイドや庭師が増えているなんてざらですよ。そりゃ利益も落ちますよぶつぶつ...」

「ま、マリーさん!？」

「?ああ失礼しました。ふふ。私、ぼっちやまの事大好きなんですよ。人としても、男性としても」

「へ!？」

突然顔が熱くなる。抱き締めてくれるマリーさんの体は、さつきより温かい。

「だから、手を差しのべて良かったと思って貰えるように頑張ったんです。お料理もお洗濯もお掃除も。何もかも。ぼっちやまは、とても素晴らしいお方だから。仕えていることに恥じないようなメイドになろうと思っただけです」

「マリー、さん...」

「... 話し過ぎましたかね。こほん。つまり、理由は自分で作り出す物です、エラ様。ぼっちやまが救って下さった理由を、意味を、自分から。自分は、ぼっちやまのために何が出来るか、それが大事なので...」

「... お兄さんのために、何が出来るか...」

「ええ。ここにいる方々は全員そうだと思いますよ。毎日、ぼっちやまのために。ぼっちやまが何かを成そうとするなら、それに殉ずる。ぼっちやまの優しさが、私達の原動力になる。ぼっちやまを助けてあげたいから」

お兄さん... 凄い人なんだ。私に、何が出来るかな。

「マリーさん... 私、何も出来ないです。体も小さいし、頭もよくないし... 私なんて...」

「... 大丈夫ですよ、エラ様。最初は小さな事で構いません。言った

ではありませんか。理由は自分で作る物だつて。ぼっちやまのために、何をしたいか。それが大事ですよ、エラ様」

「…はいー」

まだ、全然分かんない。私に出来る事も、お兄さんのために何かするものも。だけど、お兄さんに恩返ししたい。私を助けてくれたお兄さんに、少しでも。

私に出来る事は、何なのかな？

「…ここ、労働量に対して全然人が足りてない…え、整備不良？全然分かんなかった…駄目だ、こんなんじゃない…」

書斎で頭を抱える。大量の報告書を見ても、問題は山積みだ。労働者の人数、素材の発注、部品の交換に整備、なにより衛生環境。ガスや鉄鋳を扱うんだ。身体に有毒な物などうじゃうじゃある。

僕は…何も見えてなかったのか。父が残したこの工場を、僕は何も見えていなかった。目の前の事だけ…周りの真似をしながら、外面だけを気にして…。

「失礼します、ぼっちやま」

「…ん？マリーか。どうかした？」

「休憩に紅茶とお茶請けをと思ひまして」

「…ありがとうございます。頂くよ」

脳が凝り固まっている。これじゃ駄目だ。また目の前しか見えなくなってしまう。一度休もう。うん。

「そういえば、あの子は？」

「今他のメイドが案内をしております。目を輝かせて…昔の私を見ているようで、とても微笑ましいのです」

「はは、そうか…迷惑、だったかな」

「…そんな事ありませんわ、ぼっちやま。ぼっちやまの優しさを、迷惑だなんて思う者は誰一人いません」

「そうじゃなくて…あの子は、まだ小さい。ここで働かせるにしても、出来る事は限られているだろう。周りのメイドだつて良くは思わないかもしれない。彼女は…また辛くなつてしまふかもしれない」  
ただで住ませる、なんて言つたら僕の工場の労働者も、召し使ひも黙っていないだろう。だからといって、またあの寒い街道に彼女を捨てるなんて…。

「…あの子、ぼっちやまに恩返しがしたいと申しております。優しくしてくれたたぼっちやまに、何かしてあげたいと」

「…」

「でもそれは、メイドの仕事だけではないかもしれませんが…そうですね、ぼっちやまに少しヒントをあげます」

「ヒント？」

「あの子は、労働の最前線にいた子です。寒空の中、苦しく、辛くても生き抜いた逞しい子です。それをお忘れなく」

「…」

「それでは失礼します。ぼっちやま、あまり無理はなさらないください」

「あ、ああ…」

「マリー…今のはどういう…労働の最前線…働いていた…」

「お、お兄さん」

「っ…おお。よく似合つてるじゃないか」

もじもじしながら、書斎のドアの裏から顔を覗かせる少女。メイドの皆が可愛さから着せたのだろう、水色のフリルのワンピースに、白いエプロンドレス。小さなメイドさんだ。

「少し、良いですか？」

「ああ勿論。お風呂はどうだった？」

「あ、はい。とても温かくて…気持ち良くて、あんなの初めてです」

とことこと歩いて、少し笑みを浮かべる。真っ白だった肌には生氣が戻り、ほんのり赤く染まっている。

「それで、その…お兄さん」

「なんだい？」

「助けていただき、ありがとうございます。何とお礼を言えば…私には、お兄さんに助けていただいて幸せです」

「… 気にしなくて良いさ。顔を上げて」

お礼を言われる筋合いなんてない。僕は偶然君を助けただけだ。後先考えず、ただ目の前の可哀想な子を中途半端に救っただけ。他にいる可哀想な人達は？助けたこの子のその後は？何も見えていない、考えていない。

「私、考えたくんです。お兄さんのために… 今、お兄さんは困っているんですよね」

「… ああ、恥ずかしながら」

「だから、私お兄さんを助けたい。お兄さんに出来ない事を、私が頑張ってやりたいんです」

真っ直ぐな瞳。悲しみに暮れていた子とは考えられない程の、確かな眼。

「私、働いてたから。お兄さん、分かんないでしょ？工場の事。私、沢山知ってます。そこで働いている人達の事も」

「…… そういうことか、マリー。」

「お兄さんが分かんない事、私がやります。工場で働いている人達が、何を求めているのか。どうして欲しいのか」

「… ああ、そうだ。その通りだ」

何を馬鹿な事をしていたんだ、僕は。僕は工場の事何も知らないんじゃないやなかったのか。そりゃそうだ。こんな紙切れ一つで何が分かる。書いてある文字、数字で知れる事なんて何も無い。僕は、働いている人達を見たことがない。声を聞いた事がない。

何に困っているのか、何が足りていないのか、僕がこの眼で確かめなきゃ始まらない。

「だから、私工場に行ってください。色んな人のお話を聞いて、色んな物を見て、お兄さんに教えます」

この少女が居なきゃ気付けなかった。気付こうともしなかった。労働者達の声。か細いこの子が教えてくれた、沢山の弱く、小さく、そ

れでも助けを求める声。

「… マリー。居るな？」

「はいぼっちゃま。扉の裏に待機しております」

「すぐに講堂に皆を集めてくれ。メイドも庭師もだ。会議を行う。頼む」

「承知致しております。もうすでに、皆お集まりですよ。あとは、私達だけです」

「流石仕事が早いな。助かる」

「ええ勿論。ぼっちゃまのメイドでございますから」

にこりと頬笑む彼女。全く、僕は皆に助けられてばかりだ。

「皆、仕事の最中にすまない。明日から、大規模な改革を行うつもりだ。まずは、この敷地に労働組合所を作る。工場で働いている人達が自由に出入りし意見交換をするためだ」

「講堂に沢山の人達が集まる。庭師、メイド、シェフに兵士。その全員が、お兄さんに注目している。」

堂々としたお兄さんは、とても生き生きしているように見える。言葉に自信があつて、自分の考えに自信があるみたい。

「工場環境改善には、まず労働者の意見を聞くべきだと思った。明日から、僕を含め数人で工場に向き、環境を確認する。それに加えて労働者から意見を募る。出来るだけ多くだ。どんな事でもいい。出来るだけ多く」

誰もが頷く。お兄さんの言葉に真剣に向き合い、肯定する。さつきマリーさんが言つてた通りだ。

「組合所が完成したら、業者を呼んで意見の構想、及び実行に移す。それまで、皆には今以上の負担を強いる事になる。それに、賃金の向上は約束出来ない。今より多くの金が必要になる…。失敗するかもしれない。だけど、今この現状を打破するにはこれしかない。僕は、目の前の人だけじゃなく、もっと多くの人を支える立場にいるから」

お兄さんの言葉に、少しの不安が混じる。だけど、それでも。お兄さんは続ける。これが正しいのだと信じて。

「それでも・・・ついてきてくれるか、皆」

「当たり前じゃねえかぼっちゃん」

突然庭師の一人が声を上げる。

「ぼっちゃんやまがやることなら、反対なんて致しません」

「何でも言ってくれよぼっちゃん」

「あんなのためなら何だってやるぜ俺あ!!」

続々と庭師が、メイドさんが、色んな人が声を上げる。お兄さんのためなら、お兄さんを信じる、お兄さんに報いたい。そんな声ばかりが響き渡る。

「凄、凄、凄いよお兄さん。お兄さんの声が、皆に届いたんだね。」

「・・・ありがとう、皆・・・僕、頑張るから、皆・・・僕を助けてくれ」

「勿論ですわ、ぼっちゃん」

「俺達皆、あんに助けて貰ったんだ。次は、俺達が助けるよ」

「・・・大忙しですね、皆さん」

忙しく屋敷内で沢山の人が動き回る。それでも、皆の顔は晴れやかで、楽しんでるようにさえ見える。

「ああ。本当に。助かってるよ」

身支度を整えたお兄さんが歩いてくる。黒い燕尾服に身を包んだお兄さんは、やっぱり偉い人なんだと再び確認した。

「君のおかげだ。君が居たから、気付く事が出来た」

「そんな・・・私は、言っただけです。まだ、何もしていません」

「そうだ、私の恩返しはまだ終わってない。ここからなんだ。私の恩返しは。」

「・・・私は、私みたいな、小さな子達を助けたいです。小さいのに、働かなくちゃ行けない子達を、助けてあげたい」

「ああ、勿論」

「だから、私はそこに行きます。小さな子達を沢山… 助けて貰えませんか、お兄さん」

「当たり前だ。何とかする。だから、そこは頼む」

「っ… はい！」

「ねえ、そこのお嬢さん」

「はい…？何ですか」

ぼろぼろの服、寒そうに凍える身体。そこには、私そっくりな子が俯いて座ってる。

「マッチはいりませんか？」

「… マッチ…？」

「はい！とても温かくて、優しくて… そんなマッチを」

あの日、お兄さんがくれたマッチ。お兄さんが、差しのべてくれた手。

次は、私が差しのべる番。私が、この子達を暖めてあげる番。

お兄さん、ありがとう。私の恋は、まだまだ足りなくて、まだまだ小さいから。もう少し待っていて下さい。私が、理由を作れた時、その時は――。

マッチ売りの少女のお話。おわり。

成仏はしないでおいであげましょう

安ければどこでも良いや。そんな軽い気持ちで物件を探した。奨学金利用して大学出て、漸く就職して都会まで出てきてる身、贅沢なんて言ってもらえない。飯食って寝られればあまり関係はない。

「…って思ってたけど綺麗だな…」

壁紙は真っ白で汚れ一つ無く、広いキッチンとリビング、そこに差し込む日光が眩しい。

トイレとお風呂は別れていてそこもまあ広い。スーパーやコインランドリーも近くにあり自転車使えば駅だって数分で着く、最高の物件じゃないか。

…この背筋に走る悪寒さえ無ければ…。

「うーむ、幽霊なんて信じて無かったけど…」  
恐らくこれは、ガチらしい。

「曰く付き、ですか」

「ええ、まあ」

物件を紹介してくれたのは、お節介そうなおじさんだった。都内の安いアパートを借りたいと申し出た僕に、まあ丁寧に対応してくれた。

「こちらとしても早く売りたいってのが本音だけど、やっぱり難しいというか…」

「どういった事情が？」

「…自殺してしまった女性が居てね。君より少し年上くらいだったかな。都会の慣れない暮らしや社会でのストレスとかだったんじゃないかな」

おじさんはすすっていたお茶を置き、少し遠い目になる。あ、これ

ちよつと長い話だ。

「部屋がとても片付けられてね。そりやあ埃一つ残さず、って感じだったよ。家具も必要最低限な物だけだね、寂しい部屋だった…一冊の本を除いてね」

何だったかな、とおじさんは向かい合っているテーブルのパソコンをいじる。カタカタと小気味の良い音が響く。お、これだと小さく呟く。

「——が著した『優しい心理学』って本がテーブルに置いてあった。大事そうにブックカバーが掛けられて、小さな葉が挟んであったよ」  
「…へえ」

これが、僕がこの部屋に住もうと決めたまきっかけだった。

何をとち狂ったか僕は、彼女と気が合いそうと思ってしまったのだ。たかが本一冊、好きな本だったからという安易な理由で。

この世を恨んで死んでいったかもしれない、見たこともないましてや亡くなった女性と気が合うだなんて、何て頭お花畑だったんだろう。

案の定、僕はその夜、今まで生きてて初めて幽霊を見る。

「…こんなもんか」

実家から送った荷物をほどこき終わり、家具やら何やらを部屋に置いていく。

広い部屋を自分の家具で少し埋めていく、何故だか充足感を得た僕は満足気に置いた一人用ソファに腰かける。全体的に柔らかく、これでも寝れるようなソファ。買って良かった。

何だ、全然平和じゃないか。これだったら別に怖がる必要も無かったな。幽霊なんて信じて無かったけど、本当に居ないんだな。これで証明された。

都会に出てきた緊張と、力仕事が終わったからか急激な眠気が襲ってくる。僕は、それに何も抵抗せず瞼を閉じる。

僕は、ただっ広い公園のベンチに腰かけていた。暖かな日と心地よい風が身体を癒していく。ぼんやりとした意識の中、僕はここが夢の中だと悟る。上手く身体が動かせない。ただ、何もない一点を見つめ続ける。

黒い何かが揺らぐ。明るい日の光の中、まるで半紙に墨を溢したかのような黒が、僕の視界に揺らいでいる。

あれはヤバい奴だ。あれに近づいちゃ駄目だ。咄嗟に頭は理解すれど、身体は動かない。まるで魅せられたかのように、僕はその黒を見つめ続ける。

ゆっくりと、それは近づいてくる。そこで、漸く僕はそれが人の形を成している事に気づく。延びる肢体、振り乱したかのような真っ黒で長い髪。それは女性だった。

そして、もう一つ理解する。彼女は、ここで死んだ女性だと。新しく入ってきた僕を、邪魔者を排除しようとしているんだ。

まだ先がある、僕の生を恨んでいるんだ。

何故だか僕は、それを理解出来るような気がした。輝かしい先がある誰かを呪う気持ちを。自分の領域に勝手に入ってくる烏滸がましさ。僕は理解出来る。

背筋はずっと寒い。気持ち悪さでどうにかなりそうだ。今にも逃げ出したい。このまま振り返って走り出せば逃げ出せる。そもこれは夢なのだから目を覚ませばこの恐怖から逃げられる。

だけど僕は、それを見つめ続ける。恐怖と同時に、僕は知りたかった。彼女を。自分に近い彼女を見てみたい。

手を伸ばせば触れられる。立ち上がれば顔が見える。そんな距離まで彼女は来た。恐怖で頭がふらついてきた。もうそろそろ限界が来そうだった。だけど、僕は聞きたい。ここで折れては勿体ない。

「…あなたの、名前は…？」

「… 何で？」

「えっと… 聞いてみたいから」

彼女は首を傾げる。

「どうして？ 怖くないの？」

「怖いけど、でも…」

少し楽観的に行こう。いきなり呪い殺されはしないはず… だ。

「もし幽霊だったら、こんな機会は無いだろうと思って。僕は幽霊なんて見たこと無かったし信じてもない。でも、今日の前にいるのが幽霊なら、色々聞かなきゃ損だ」

異様に饒舌に語れた。何だか、心から絞り出してる感じがする。夢の中なら、僕は結構舌が回るのだろうか。

「… 変な人。普通なら、もう逃げてるのに」

少し雰囲気や和らぐ。息がちゃんと吸い込める。冷や汗が止まっ  
ていく。

「… 私は、雪希。雪に希望の希」

黒い靄が消えていく。綺麗な白いワンピースに、雪のように白い肌  
が見える。

その顔は、誰よりも美しくて、誰よりも悲しそうで、誰よりも寂し  
い。

「… 幽霊に名前聞いたのは、君が初めてだよ」

僕の心を奪うのには1秒もいらなくらい、綺麗な笑顔だった。

## 幽霊さん 幽霊さん

幽霊を思い浮かべると、憎悪や恨み、この世に後悔を残して死んでいった悪霊をイメージする事が多い。成仏出来てないんだから、そりゃあ悪霊をイメージするだろうけど、彼女は何か違った。

透き通るような、いや実際透き通ってるけども美しい白肌。長く伸びた艶のある黒髪。生気の籠っていない、しかし瑞々しく見える唇。一点を見つめて動かない綺麗な瞳。彼女を幽霊だと言っても、信じる人はそう居ないではないか。そう思える程に、彼女は生きている人間と遜色無い出で立ちをしていた。

「… ねえ」

「はい？」

「君は何で、この部屋に来たの？」

心底不思議そうに、彼女は首を傾げ尋ねる。本当に不思議なのだろう。

自分という霊が住み着いた曰く付きの物件。安さに目が眩み住もうとする人はいれど、まさか居座って名前まで聞いてくる奴は初めてなのだろう。

「… 凄く簡単な理由ですよ。あなたが読んでいた本が、偶然僕が好きな本だったからです」

「… そんな理由で？」

「そんな理由です」

僕は配置した本棚から一冊の本を抜き取る。掛けてある紙のカバーを外し、彼女に見せる。

「… 『優しい心理学』。懐かしいね」

「これ一見評論本に見えるんですけど、実は探偵ものなんですよね」  
心理師の主人公が、様々な事件に巻き込まれていく。嫉妬や憎悪、負の感情で埋め尽くされた事件の中で、持ち前の心理洞察を駆使して事件を解決していくストーリー。

作者が心理関係の方なのか、登場人物の心情の描写や、狂っていく人達のおぞましい感情の変化、読者に訴えかける心からの叫び。

きつと、探偵ものじゃなかったら多くの人の心を打つ描写が所狭しと埋め尽くされた、僕の好きな作品。

「なーんで探偵ものにしちゃったんだか分からないくらい心理描写が的確かつ日本語が上手くて。ちよつとずれた感じが何か好きです」

「ふふつ、分かるなあ。結構泣けるもんね」

笑った。

幽霊が笑うとこういう笑顔になるのか。

「?どうしたの?」

「いつ、いえ…」

あんまりにもその笑顔が綺麗だったから。なんて出会い始めで言えるわけではない。

何だか気恥ずかしくて、僕はもう一度その本に目を落とした。

「君みたいな良い子が住んでくれて嬉しいよ」

彼女は、にっこりとそう言った。

何故だか、少し寂しそうな目をして。

その寂しそうな意味が、まだ僕には分からなくて。

ただ、その美しい笑顔に見惚れることしか出来なかった。

「そっか、じゃあこっち来たばかりなんだね」

「はい。一応就職してここで暮らすことになりました」

「ふーん。因みにどんな会社なの?」

「経営コンサルタントですね」

「へー、凄いいじゃん」

そんな会話を料理を作りながら幽霊さんと話す。幽霊さんは、あつちこつちふわふわしながら、時々壁に埋もれながら僕の料理を見ている。

料理と言っても、パスタにホールトマトとベーコンと小松菜ぶちこんだだけだが。別に一人暮らしなんだし、料理に凝る必要はないだろう。

「…いや一人ではないか。人、として数えて良いのかは甚だ疑問だが。」

「ちゃんと料理するんだね」

「コンビニ弁当とかの方が、かえってお金かかりますからね。仕方なくですよ」

「ふふ、君のその諦めた現実主義が結構気に入ったよ」

「好きでこんなんになってるわけじゃないです」

箸でミートソースとパスタをまぜまぜしながら返事する。僕だつてやろうと思えばちよつと良い料理ぐらい作れるはずだ。レシピ見ながらだけど。

「…まあ、幽霊さんがいるから、コンビニ弁当じゃなくてパスタ作ったのは、少しの見栄を張ったっていうのもあるが。」

「私が生きてた頃はずーっとカップ麺だったなあ。あれはあれで美味しいもんだよ」

「あー分かります。僕うどん派ですね」

「お？君分かる口だね」

にししと悪戯っぽい笑みを浮かべる。意外な笑顔に心臓を撃ち抜かれる。くっそ…何だこの幽霊可愛い。

「部屋にゴミいっぱい溜まってたっけ。懐かしいな」

「…あの」

やはり、気になってしまう。死んだのに、未だここに留まっている理由が。そして…何故自殺を選んだのか。

「…やっぱり気になる？」

「…まあ、はい」

「はは。そんな面白い話でもないよ」

「面白かったら困るでしょ」

「…… 違うない」

平凡。その一言に尽きる。

生まれてから、普通の家庭で育った。普通に小学生になった。ほとんど友達は出来ず、いつも教室の隅で本を読んでいるような子だった。

普通に中学生になった。運動は嫌いじゃなかったから運動部に入った。特に結果を残すことなく引退して、受験勉強に励んだ。

友達もあまり居なく、受験勉強には集中出来たお陰でそこそ良い高校に入った。そこでは運動に対する熱も冷め、登校と下校を繰り返す日々を送った。恋もしない。青春もしない。灰色の記憶。そこで何を成したか、何を得たのか、今となってはもう思い出せないほどに、元々無かった色は色褪せていた。

結局そのまま大学に入った。奨学金を貰いながら人生で初めてのバイトをした。今までほとんど人と接しなかった私にとって、職場は絶望的に相性が悪かった。吐き気と嫌悪に苛まれ続けながら仕事をした。

私にはもう、人生に色など無かった。

「そこで急にリストラを受けてね。再就職のあてもなく、貯金も無かった私は、すんなりと自殺を考えた。死ぬことに対して何の恐怖も抱いてなかった。だって、今までも死んでたようなもんだしね」

そして、彼女は死んだ。何も無い部屋で。ひっそりと息を引き取った。

「…おしまい。どう？本当に面白くなかったでしょ？」

彼女は、それでもにっこりと笑う。今まで聞いてきた話の彼女と、今の彼女の笑顔が一致しない。まるで他の誰かのようだ。

「私は灰色だった。ずっと。ううん、多分きつと何かしらの色はあったんだと思う。でも、私はそれを見つける事が出来なかった。見つけようともしなかった。私には…色なんて無いんだと決めつけてたんだね」

「…その気持ち、分かります」

「…そっか」

彼女は空中で膝を抱えて浮かんでいた。少しの微笑みをたたえて。

「じゃあ次は、君の話を聞かせてよ」

「…僕、ですか？」

「うん。人とこんな話するなんて初めて。君の事を聞いてみたい  
な」

「…僕も面白くないですよ」

「良いんだよ。君は、私と同じ目をしてる」

僕は彼女の瞳を見る。死んでいるからか、それとも元々なのか。彼女の瞳は、死んでいる。

つまり、僕も同じような目をしてるってことは、僕の目も死んでいるのだろう。笑えないな、と思いつつ僕は自分の人生に思いを馳せる。

灰色の空、灰色の海、そこに色彩ある色はなく。ただ淡々と、灰色の世界が広がっている。

「母は自分しか愛せない人間でした。自分が輝けるなら、簡単に子供生み、育て、気に入らなかつたら暴力を振るいました。僕は、それ以外の愛を知らなかつたから、大人しくそう愛されました」

「友達は居ましたが、何というか。そうですね…誰の一番にもなれませんでした。二人組を作るとき、一緒に帰るとき、好きな人を内緒で教えるとき…僕は誰にも選ばれなかつた。自分で選ぼうと思わなかつた。その人には、他の誰かがいると知っていたから」

「母が病気で亡くなり、奨学金を得て高校、大学と進みました。遠くにいる父が資金援助をしてくれたお陰で、何とか生きていけました。無駄遣いはできないと思い、使うことはあまりありませんでした。僕は、父だけにはちゃんと愛されていたのかもしれない」

「恋人も青春も、僕にはありませんでした。ただぼんやりと、それを見ているだけでした。僕なんかが、その輪に入っていけるなんて思いませんでしたから」

「恋人も友達も、そこから先出来ませんでした。僕に歩みよつてくれ

た人達がいたのかもしれない。だけど、僕は見ないふりをしました。…きつと、僕は」

一番が、欲しかった。

そう言おうとした瞬間、息が詰まった。頬を何かが伝う感触があった。それは、とても熱くて、痛くて、苦しくて。

ずっと、今までずっと、堪え続けた涙。悲しくても、寂しくても、無視し続けた感情が、止めどなく溢れてくる。

「…そっか」

冷たくて、それでも優しい腕が僕を包み込む。

「…幽霊さんって、僕のこと触れられたんですね」

「幽霊に肉体が無いなんて、いつ誰が言ったんだらうね」

彼女の腕の中で、ずっと涙を流し続けた。今までの悲しみを、寂しさを洗い流すように。

彼女はずっと、僕を抱き締め続けてくれた。

いつ頃から降っていたのか、雨はずっと降り続けていた。それが、僕の涙と同じように。ただ静かに降り続けていた。

機械ですが

ロボットが来れば、さぞかし便利になるのだろうと思つてた。計算も一瞬で、正確で出来て。無駄な事をしないから効率的で。何より。

こんな辛い社会に便利屋として放り込まれる事になつても、同情する事は無いだろうと思つていた。

何故なら、ロボットだから。心なんか持たず、いいや自分の意思すら持つていないと思つていたから。

「… 今日も残業か」

壁に張り付いている時計を見ると、夜の8時。定時なんてとつくに過ぎていくというのに、俺の机に積まれた資料だのタブレットだのは全然減つていない。

何でこんなご時世なのに未だに紙なんか使つてんだか。上の奴らはこれが経費の無駄だつてことに気づいていないのか？馬鹿か。

はあ、ため息を吐く。チエアに深く背中を沈め、デスクに置いてあるコーヒーに口を付ける。温い。何時間前に淹れたんだっけか。いや、淹れてくれたんだっけか。

「… 安堂さん、もうそろそろ帰つても大丈夫ですよ」

「いえ。まだ仕事が残っておりますので」

「でも定時過ぎてるし、もう他のも帰つてるから」

「いえ。まだ仕事が残っておりますので」

「ああそう…」

一度もこつちを見ない。目に映るのはおびただしい数の文字列数字プログラム e t c . . . マルチタスクにも程がある。何個並列して打つてんだ…。

キリツと真つ直ぐな背中、精巧な機械のように動かされる手。いや、本当に機械か。

「生田さんこそ、もう退社時刻を過ぎております。帰るべきは生田さんかと思いますが」

「いや入ったばかりの新人残して帰れないよ……」

安堂さん。うちの会社に導入された”アンドロイド”。最新式のコンピュータを内蔵した人型のロボット。コミュニケーションと同時に、効率的な仕事を受持ちより社会を循環させるために大量生産された仕事用ロボット。

うちの社長が俺らが貰えるはずの人件費をわざわざ割いて購入した、期待の新人。

その仕事ぶりは期待を超えていた。どんな仕事を任されても文句一つ言わない。納期を巻いて終わらせる。ミスや漏れも無く正確。安堂さん一人で仕事が全部終わるレベル。

故に、”人”は楽をし始める。面倒な仕事、多い仕事、うちの社員はどんどん安堂さんに任せ始めた。明らかにそれは自分でやれやみたい仕事でも任せる。

それは仕方ない事かもしれないし、それが目的で安堂さんは導入されたのかもしれない。だけど、俺はどうしても癪に障って仕方なかった。

「……はあ」

「コーヒーをお淹れいたします」

すつと立ち上がる彼女。デスクを見ると明らかに先ほどより進んでいる。人間では出せないスピードだ。だけど、多すぎる。

「いや、安堂さんも少し休んでくれ。コーヒーくらい自分で淹れる」

「しかし」

「休んでくれ。上司命令で出すぞ」

「……承知いたしました」

安堂さんは椅子に座り直し、一点を見つめ続けた。それ休むって言うのか……アンドロイド目線で言うならスリーブモードってところか。

何時の世も長い仕事にはコーヒーは付き物だ。これは恐らくこの先も変わらない気がする。

フィルターをコーヒードリッパーに取り付けお湯を注ぐ。良い匂いだ。何時嗅いでも、いくら嗅いでもコーヒーの良い匂いは色褪せない。コーヒー万歳。

… 安堂さんは、コーヒー飲むのだろうか。というか飲食するのかわ？ お昼も彼女が食事しているところを見た事が無い。

聞いてみるか。新人とのコミュニケーションは大事だ。

「… 安堂さん？」

「はい」

「こ、コーヒー飲む？」

「いいえ」

「そうですか…」

飲まないのか…。

少ししよんぼりしながら、マグカップを持って机に戻る。少し口を付けてから、いつも常備しているチョコを手取る。

「じゃあチョコは？」

「いいえ」

「そっかあ…」

チョコもか。やはりしよんぼりだ。

俺は、小さい頃からロボットに憧れを持っていた。ロボットアニメは大好きだったし、プラモやゲームもよくやった。だからこそ、安堂さんを見るとしよんぼりせざるをえない。

ロボットとは、こんなにも暗いものか。

そこに、寂しさと悲しさを感じる。

「安堂さんは、何か食べたりとかしないの？」

「一応食事する機能はついていますが。コミュニケーションを円滑にするため、体内に食物を取り込みエネルギーに変える事も出来ませんが、あまりに非効率です」

「ああ出来るんだ。ロボット凄いな」

「そうでしょか」

無表情だ。あまりに。人間の顔をしているのには間違いない。どこをどう見ても人間だ。だけど、そこに生氣は感じられない。多分無表情100人用意しても、安堂さんは見分けられると思う。それくらい、彼女からは機械染みた物を感じる。

「味は？」

「と申しますと？」

「あー。これ甘いとか、苦いとか、美味しいとか感じるのかなって」

「はい。味覚を再現するプログラムは内蔵されています」

「へえ！そうなんだ」

え、じゃあ食べたり飲んだりしてくれても良くない？

しょんぼりだ。

「じゃあチョコ食べない？甘いよ」

「いいえ」

ぐぬう。頑なな。それがロボットたらしめているのだろうけど。

「食物は私の身体に対して非効率です。エネルギーへ変えるためにエネルギーを使う必要があります。そして得られるエネルギーはあまりに少ないです。なので、今必要としているエネルギーを鑑みるに、チョコレートを食べるのは効率的ではありません」

「そうですね。すみませんでした…」

ぐもつとも過ぎる。

「…んー。そろそろ終わりで良いかな」

一応やっておこうと思った所までは終わった。くそが。本当はもう終わってるはずなんだよ3時間くらい前に。くそが。

「…作業行程終了いたしました。退勤いたします」

「ちよ、はやっ」

すすーつと椅子から立ちあがり流れる様に資料とタブレットを纏めてタイムカードを押しに行く。いや早すぎる。

「ちよつと！安堂さん！」

「何か？」

「…少し、時間貰えないかな」

「はい。承知いたしました」

決断もはええな。ロボットだ。

「…何故、ここに」

「今頃飲み屋に行く気にもならんし、何よりアンドロイド用のあるとこあんま無いからね」

会社を出てから少し。コンビニに安堂さんと立ち寄った。

アンドロイドは、アンドロイド用のエネルギーリンクがあるらしい。それが一番効率的にエネルギーを得る事が出来るらしい。あと充電。

「そうですが…家に戻り充電に入れば、翌朝には完了しているでしょう。エネルギーリンクを買うのは金銭的にも非効率です」

「良いんだよ。いつも同じ充電の味じゃつままないだろう？」

「理解出来ませんが」

「まあまあ。お金は出すからさ」

冷やされた冷蔵庫から酒とエナドリを取り、適当につまみを掴んでレジに持っていく。

「…何故そんなことを」

「一人で飲むのはつままないからね」

「つまらない、というのが理解出来ません」

「良いから良いから」

パワハラだろうか。文句一つ言わない彼女が少し不服そうだ。新人を一人で飲むのがつままないから誘う。傍から見れば完全にパワハラだな…。

まあ少し目を瞑ってもらおうことにしよう。

「近くに公園があるんだ。行こう」

「…承知いたしました」

「……だ。……」

がらんとした少し狭い公園。ブランコやシーソー、砂場やジャング  
ルジムと当たり障りない遊具が並んでいる。

ブランコに腰掛け、座るよう促す。やはり少し不服そうだが、しぶ  
しぶと腰を降ろしてくれた。

「はい、安堂さんの」

「……」

エナドリと、さっき買った柿ピーを手渡す。完璧にフリーズして  
るわ。

「……先ほど、食物は効率が悪いと申し上げましたが」

「でもエナドリの方が効率良いでしょ」

「……それは、そうですが」

アンドロイドは基本、エナドリの補給が一番エネルギーを得られる  
そう。一番手っ取り早いエナドリの補給だが、お金がかかる。

「遠慮なく飲んでくれ。感謝の気持ちだ」

「……承知いたしました」

エナドリの栓を開け、口を付ける。少しほつとした。完璧に迷惑か  
と思っていた。

「……！」

「ん？」

少し驚いた顔をした。初めて見た、無表情以外の彼女の顔。目を見  
開き、不思議そうにエナドリの缶を見つめる。

「……味覚プログラムが、今まで検知したことのない反応をしました」

「どんな？」

「……これは、美味。美味しいと、プログラムが反応しています」

「……そっか。そりゃ良かった」

同じく酒の缶を開け、一気に喉へ流し込む。かぁー、美味  
い。

「…俺さ、少し安堂さんと話がしたくてね」

「話、ですか？」

「うん。当たり障りない、普通の話」

俺は、アンドロイドが少し気に入った。

## ある朝、コーヒーを一杯

めっちゃ早く起きた。今までの自分では考えられないくらいめっちゃ早く早く。

まあ、昨日は酒をひっかけすぎて頭はがんがんと痛い。

痛む頭を押さえながらスマホを見る。なんと朝の6時だ。健康的だね！ 目覚めはいい。体はだるくないし、目だっけはつきりと開いている。ただ本当に頭が痛い。割れそう。この痛みを取り除けさえすれば最高の朝に違いない。小鳥だっけチユンチユン鳴いている。だが、この二日酔いのせいで俺のテンションはがっくり下がっていた。

ゆらゆらと左右に揺れながらベッドから起き上がる。こうしているほうが幾分楽だ。自分から揺れる事でふらふらしている平衡感覚を騙しているかのよう。ドアを開け壁に頭を打ち付けそうになりながらもなんとか台所に辿り着き、うがいをする。冷たい水が体に心地よい。そのまま水を一杯飲む。

乾ききった身体に染み込んでいくようだ。そりゃ砂漠で遭難した人間が蜃気楼でオアシスを見るはずだ。都会のアパートの一室に住んでいる人間がこうなんだから。

少し頭痛が落ち着く。がんがんに変わった感じ。そんな変わって無くない？

朝飯にはまだ早い。今食べたら中途半端な時間におなか減りそう。どうしようかなと冷蔵庫を覗く。牛乳：いや、いいものがあるじゃんか、うちには。

「…：コーヒー飲むか」

いつの日か、忘れてしまった朝の日課だ。

お湯をポットで沸かしながら、コーヒーマイルで挽く豆を選ぶ。コーヒーは豆の種類が豊富だ。豊富すぎてどれを選べばいいかわからない程に。コクや香り、苦みや酸味も全く違う。他にもラテにしたら美

味しいやつとかもある。それはもう個人の好みだ。

俺は数ある、香ばしい薫りを放つ袋から一つを選ぶ。名前はマンデリン。

マンデリンは豆の中でも酸味が控えめなのが特徴だ。コーヒーだと苦みが苦手だと言う人が多いと思うが、実はこの酸味が苦手なんじゃないかと思う。コーヒー独特の、口をすばめたくなるようなあの感じ、あれは実際のところ酸味だ。あれが控えめのこのマンデリンは、コーヒーの魅力、コクを最大限に楽しめる豆だ。ぜひおすすめしたい。

豆を一人分すくい、コーヒーミルに流し込む。さらさらと金属と豆の擦りあう音が聞こえる。懐かしい。そのまま取っ手をつかみ、時計回りに回していく。ごりごりと豆が粉々に砕かれていく。さつきまどとは一風変わった、豆の中身の匂いが部屋に充満していく。鼻孔をくすぐり、肺へとその香りで満たされていく。良い匂いだ。

豆を挽き終え、ポットにフィルターを敷く。そこへ粉々になった豆を入れる。ようやっと沸かしておいたお湯の出番だ。

のの字のように回しながらお湯を注いでいく。ここで、一番良い香りが部屋を満たしていくのだ。街中の喫茶店のような、もしくはどこからかただよってきた、俺のようにコーヒーを注いでいる人のような、そんなコーヒーの匂いだ。

ぼたぼたとポットの底へ零れ落ちるコーヒーの水滴をぼけーっと眺める。この時間は、まるでポットだけ時間が進んでいるかのようだ。他の音は何も聞こえず、ただただ、水音だけが部屋に響く。それを、微動だにせず眺めている。

最後の一滴が滴り落ちるのを見届けるとマグカップに注ぎ始める。何だかんだここまで書いてきてるが、コーヒーを淹れる時はいつだっていい匂いがするものだった。今一番いい香りしてるわって思いながら全行程を行っている。良い匂い過ぎるわ。あかんで。

カップに注ぎ終わり、湯気と共にその香りを一気に吸い込む。あー、濃厚。濃厚だわ。今までで一番良い匂いしてるわこれ。

香りを十二分に嗅ぎ終わったら、遂に口をつける。ずずずーっと口に含み、喉へと流し込む。コクの深い味。かといって口をきゅーっと引き結んでしまうような酸味は無く、ただただ深みのある苦みとコクが口内を支配している。

「… うつつつまああ…」

それしか感想が出てこない。脳内であんだけ考えてたのに、口に出てくるのは頭の悪い平凡な感想のみ。しょうがない、これを話す相手がないのだもの。

そうしているうちに、カーテンから朝日が零れている。小鳥のさえずりもいつの間にか聞こえない。人の営みが始まろうとすると、鳥というのは逃げていくのだろうか。

そんな秘密の伴奏を聴けたのだと思うと、たまの早起きも悪くない。そう考えながら、最後の一滴を飲み干していた。